同志社時報

2020.4
No.149

特集

■大学入試改革の今後について

学校法人 同志社

■心は諸君と共にありて
絶えず諸君の為に祈祷して止まざるなり、
諸君や必ず神妙の巧手に導かるゝならん

新島襄全集Ⅲ-288

山本　真司（国際中学校・高等学校教諭）

■老舗ベーカリー「進々堂」の屋号はフィリピの信徒への手紙３章13―14節から命名されている。新宿中村屋で修行しつつ内村鑑三に学んだ続木斉氏が「パン造りを通して神と人とに奉仕する」をモットーに創業された。パリでフランス文学とパンの研究をされた斉氏は自作の詩や評論を新聞広告に掲載している。「広告は真実の福音でなければならない。虚偽の咆哮、誘惑の手段であってはならない。時に経営者の生活報告、思想、信仰、いつわらざる感話、一夕の瞑想録をもって紙面の一隅に天来の涼気を送るべきである。」

■伴侶のハナ氏は四条教会（現日本基督教団京都教会）に通い牧野虎次牧師のもとで教会学校教師を務めるとともに、同志社女学校でデントン先生に学んだ。斉氏帰天後、進々堂の経営と８人の子育てを「凛然として切り廻した」と伝えられている。白々と明ける早朝、内村鑑三『一日一生』を閉じ、質素な上っ張りを身に着けて店へ出て行く姿を子どもたちは覚えていた。

■さて、大学良心学研究センターの労作『新島襄３６５』が届けられた。本校では全教職員に配布し、会議の冒頭に実施している賛美、聖書朗読と祈祷と共に、その日に当てられた個所をみなで分かち合うことにした。進々堂が創業の志を受け継いでいるように、同志社もまた新島襄の志をいつも噛みしめて、歩み続けたいものだ。

※進々堂に関しては、『進々堂百年史』２０１３年を参照

法　人

『第24回同志社国際主義教育講演会を開催』

2019年11月30日

2019年11月30日(土)、今出川校地良心館107教室において、1963年大学文学部社会学科卒であり、日本近現代史研究者である保阪正康氏(ノンフィクション作家・評論家)を講師に迎え、「天皇家と同志社」と題して第24回同志社国際主義教育講演会を開催しました。

当日は、学生や一般市民の方々など約200名が来場。質疑応答も活発に行われ、講演会は盛況のうちに終了しました。講演の内容は、本誌「レクチャー」にて詳しく掲載しています。

大　学

『第34代同志社大学長に植木朝子教授が正式決定』

2019年12月４日

第34代同志社大学長に植木朝子(ともこ)文学部教授が決定し、2019年12月４日(水)に大学室町キャンパス寒梅館６階大会議室にて記者会見が行われました。

次期学長に正式決定した植木教授は、多様性を打ち出した教育の実現と社会との連携を重視する旨の所懐を述べました。

女子大学

『京料理食事マナー体験』

2019年９月28日

会席料理の食事マナーを通して日本文化に触れ、社会における教養と品格を身に付けることを目的に、京料理の老舗「六盛」において実施しました。
京料理の歴史、訪問先での靴の脱ぎ方、襖の開け方・閉め方、座布団の座り方など、社会人となった際に困らないよう身に付けておきたいマナーを教えていただきました。その後、実際に会席料理をいただきながら、お箸や器の扱い方などを丁寧に説明していただきました。

中学校・高等学校

『新・旧南体育館』

2019年10月15日

2019年10月に新南体育館メインアリーナ棟が完成。この建物が完成するまでの教場確保の為、旧メインアリーナ棟は、工事中もそのまま利用されてきた。新アリーナ棟が完成した後、旧アリーナを解体し、付属棟の建設工事を開始する。新・旧体育館両方が併存するのは、この数週間のみのタイミングという事で、空撮にて撮影頂いた貴重な写真！右手前が新体育館メインアリーナ棟、隣接するのが旧メインアリーナ棟。2020年12月末には付属棟が完成し、メインアリーナ＋付属棟＝『翼翔館』が竣工する。

香里中学校・高等学校

Xmas セレブレーション 2019

2019年12月14日

毎年恒例の Xmas セレブレーションを、12月14日(土) 16：30より、本校香真館で地域の方々をお迎えして開催いたしました。500名近い来場者を迎え、第１部生徒宗教委員、聖歌隊、演劇部員によるミニ・ページェント(降誕劇)、第２部吹奏楽部による XmasSong アンサンブル演奏、ダンス部によるパフォーマンス、第３部サンタからのプレゼントまで楽しい時間を地域の皆様と過ごせました。終了後は、食堂で「おしるこ」を提供し、身体を温めてもらって帰路についていただきました。

吹奏楽部による XmasSong 演奏

ダンス部とパプリカダンスを踊る

女子中学校・高等学校

『収穫感謝の日礼拝・施設訪問』

2019年11月15日

秋の収穫感謝の日に先立ち、11月15日(金)に収穫感謝礼拝を守りました。午後からは有志の生徒が８か所の養護施設や福祉施設を訪問し、持ち寄った野菜・果物と献金をお渡ししました。神様から与えられた豊かな恵みを感謝し、多くの方々とその恵みを分かち合う時となりました。

野菜・果物の持ち寄りの様子

講師の先生による収穫感謝礼拝

宗教部生徒による野菜・果物の飾りつけの奉仕

国際中学校・高等学校

『高校生体育祭』

2019年９月17日

クラス別対抗での高校生体育祭を開催した。

『ハロウィーン』

2019年10月28日

生徒がそれぞれ工夫したコスチュームで生徒会行事のハロウィーンを盛り上げ楽しんだ。

小学校

『近藤紘子さんによる特別授業(ピースウィーク)』

2019年10月30日

近藤紘子さんをお招きして、特別授業が開かれました。広島に投下された原爆による傷を抱えた人たちとのふれあいやエノラ・ゲイの乗組員との出会いを通しての赦しの体験のお話を聞き、平和のために何ができるのかを考える時間となりました。

国際学院

初等部：『6年生アメリカ修学旅行 in Boston ～現地小学校との交流～』

2019年９月25日～10月２日

６年生は、新島襄の足跡を辿るアメリカ修学旅行の中で、現地のPYP認定小学校と交流を行いました。日本の文化紹介や遊びを通して、現地の子ども達と主体的なコミュニケーションを図り、楽しい時間になりました。

国際部：『College Counseling』

2019年８月21日～12月13日

In college counseling this semester, DISK hosted five universities for information sessions. G11 had group sessions on the IB, how to evaluate which countries would be of interest for university. G12 students and their parents came for individualized counseling sessions focusing on the timeline for this year. G11 students traveled to Osaka for a college fair featuring universities from Japan, US, Canada and the UK.

幼稚園

『開園記念会』

2019年11月８日

幼稚園が開園して今年度の６月24日で122年が経ちました。
現在の園舎で行う最後の開園記念会は、特別な一日となるよう保護者の方に計画・準備･進行などのご協力をいただきました。
礼拝ではみんなで神様に感謝の祈りを捧げ、その後子どもたちは保護者と一緒にゲームや製作のコーナーを回ったり、腹話術やマジックショーを見たりと盛大な会となりました。
親子・教員が共に幼稚園の記念日をお祝いし、楽しい時間を過ごせたことが何よりの思い出となりました。

インタビューの2人

私の志
（本文4〜7頁）

岸本泰昭さん

試合に勝つ喜びや達成感を得る一方で、負けた悔しさやけがによる挫折を経て、人への寄り添い方を学びました。今は総合格闘技と有料老人ホームでの仕事を両立させています。

1984年大阪府生まれ。同志社大学商学部入学後、総合格闘技道場コブラ会で総合格闘技を始める。大学卒業後は、大手電機メーカーに就職し、サラリーマンと格闘技プロ選手として活動。その後退職し、格闘技に専念。現在は格闘技選手と介護士を仕事としている。
前GLADIATORライト級王者 総合格闘技団体 パンクラス ライト級10位。
180センチ78キロ（試合時70・3キロ）

岡崎愛子さん

その立場に立たないと分からないことはたくさんあります。健常者の方には、もっと想像力を働かせていただければと思うことも。私たちも積極的に外へ出て活躍すれば、社会は変わると思います。

1986年大阪府生まれ。2004年、同志社大学商学部入学。2005年、JR福知山線の脱線事故で頸髄を損傷し約1年の入院生活を送る。2008年卒業、ソニー株式会社に入社。2014年退社し、企業や学校での講演活動や犬のケアに関する仕事を開始。現在はアーチェリーに専念する。主な戦績は、第43回のじぎく杯アーチェリー大会W1女子2位、パラアーチェリー世界選手権大会（オランダ）W1女子9位、ミックス戦（W1）3位、第29回交流アーチェリー大会W1女子1位（いずれも2019年）。同年12月、東京五輪聖火ランナーに選出された。株式会社ベリサーブ所属。著書に『キャッチ！ JR福知山線脱線事故がわたしに教えてくれたこと』（ポプラ社）他

同志社時報

No. 149

2020.4

目次

〈表　紙〉
ハリス理化学館
中谷隆志（大学国際教育インスティテュート事務長）

〈表紙裏〉
新島　襄の言葉
山本真司
（国際中学校・高等学校教諭）

〈口　絵〉
■法人　第24回同志社国際主義教育講演会を開催
■大学　第34代同志社大学長に植木朝子教授が正式決定
■女子大学　京料理食事マナー体験
■中学校・高等学校　新・旧南体育館
■香里中学校・高等学校　Xmasセレブレーション2019
■女子中学校・高等学校　収穫感謝の日礼拝・施設訪問
■国際中学校・高等学校　高校生体育祭／ハロウィーン
■小学校　近藤紘子さんによる特別授業（ピースウィーク）
■国際学院　初等部：6年生アメリカ修学旅行 in Boston ～現地小学校との交流～／国際部：College Counseling
■幼稚園　開園記念会
「私の志」インタビューの2人

私の志 INTERVIEW
大企業からの転身　岸本泰昭さん
みんな、総合格闘技が教えてくれた　4
メダル狙います！　岡崎愛子さん
一人ずつの行動で社会の垣根を取り払いたい　6

特集
鼎談　大学入試改革の今後について
多久和英樹／川崎清史／中根正義　8

レクチャー
第24回同志社国際主義教育講演会
「天皇家と同志社」
保阪　正康　16

建物案内　静和館（女子中学校・高等学校）　23
建物案内　成心館（同志社大学）　24
同志社の逸品　ミントンズ・チャイナ・ワークス社製タイル　同志社社史資料センター　25

同志社ナウ
同志社大学ラグビー部、JICAプログラムでインドへ派遣　川井　圭司　27
女子大学の起業家セミナーが熱い　三宅えり子　28
「愛」を「愛」という言葉なしに伝える　村上　準　29
ラオスに学校を建てよう。プロジェクトⅡ　水上　陽一　30
フェンシングクラブ全国高等学校総合体育大会入賞　吉田和高／山本啓太　31

私の研究・私の授業
私の研究
寄り添う専門職たる看護婦の研究　村田　晃嗣　32
横波超音波を使って分子レベルの変化を検出するセンサ　山下　麻衣　34
台湾文学を研究すること　髙柳　真司　36
より良い看護を提供していくために　唐　顥芸　38
朝の5分間、新聞記事が子どもを変える　光木　幸子　40
西村　孝次　42

同志社クローズ・アップ
「法曹コース」の設置と法学部の将来
―良心を手腕に運用できる法曹の育成のために　川嶋　四郎　44
人文科学研究所75周年記念シンポジウム
「同志社大学人文研の過去・現在・未来」　林　葉子　46

表象文化フェスティバル―ふみだすチカラ―　丸山　敬介　48
同志社女子大学表象文化学部設立10周年記念事業
英語で平和を学ぶプロジェクト
～Doshisha Peace Award 2019～　皆川　祥吾　50
香里中学・高校における特別支援の取り組み　竹田　幸平　52
音楽で賛美する～讃美歌の魅力～
中学2年生　総合的な学習の時間　三浦　彩　54
知の研究　帖佐　香織　56
同志社小学校 PEACE WEEK の取り組みについて　中川　好幸　58

特別寄稿

「梨木校地」の1933年
梨木屋敷から同志社布哇寮、そして同志社幼稚園へ　本井　康博　60

新刊紹介

新島襄の教え子たち（出身地別）・本井康博著／王家の遺伝子・石浦章一著／カズオ・イシグロに恋して・臼井雅美著／ドイツにおける運輸連合制度の意義と成果・青木真美著／2100年の世界地図・峯陽一著／奴隷船の世界史・布留川正博著／小さき者の幸せが守られる経済へ・浜矩子著／人類の起源、宗教の誕生・小原克博他著／1571年銀の大流通と国家統合・城地孝・堀井優他著／子どもの貧困／不利／困難を考える3―施策に向けた総合的アプローチ・埋橋孝文他編著／グローバル化と法の諸課題―グローバル法学のすすめ―・川嶋四郎他著／ボランティア・市民活動実践論・上野谷加代子・木原活信他著／クィアと法・菅野優香他著／いじめ：10歳からの「法の人」への旅立ち・村瀬学著／テレビドラマでわかる平成社会風俗史・影山貴彦著／バブル世代教師が語る平成経済30年史・西村克仁著　68

●本誌では学校法人同志社の各学校名から「同志社」を省略して、左記のとおり表記しています。
大学＝同志社大学、女子大学＝同志社女子大学、中学校・高等学校＝同志社中学校・高等学校、香里中学校・高等学校＝同志社香里中学校・高等学校、女子中学校・高等学校＝同志社女子中学校・高等学校、国際中学校・高等学校＝同志社国際中学校・高等学校、小学校＝同志社小学校、国際学院初等部・国際学院国際部＝同志社国際学院初等部・同志社国際学院国際部、幼稚園＝同志社幼稚園

●執筆者等の役職・職位は2020年3月15日現在、大学広報課が把握している範囲で表示しています。

大企業からの転身

みんな、総合格闘技が教えてくれた

大手電機メーカーの職を辞して、憧れだった総合格闘技の道へ。大けがと手術を繰り返して満身創痍になりながら、現役を続ける35歳。選手生活が教えてくれた喜怒哀楽は、福祉という新たな道へも導いてくれました。

岸本泰昭（きしもとやすあき）さん
総合格闘家

大企業を辞めて総合格闘技の道へ

――総合格闘家を目指された経緯を教えてください。

岸本　高校時代はサッカー部だったのですが、その頃観た桜庭和志選手とホイス・グレイシー選手との激闘に感動して、いつか総合格闘技をやりたいと思っていました。大学は最初、桜庭選手のジムに近い早稲田を受けようと考えたほどです（笑）。同志社大学ではサークルでサッカーをしていましたが、やはり情熱を注げるものが欲しくて総合格闘技道場コブラ会に入会しました。大阪にある町道場ですが、プロ選手の輩出数では全国でも指折りの道場です。学生時代は道場中心の生活を送り、3年生の頃にプロライセンスを取得しました。

――道場に入るまで格闘技のご経験はおありだったのですか。

岸本　ありませんでした。柔道など格闘技のバックボーンがない、私のような転向組は少なくありません。高校までの部活で体力や身体の使い方の基礎を築いていれば、格闘技にも応用できます。ただ最近は総合格闘技がメジャーになりつつあり、子どもの頃から習い事として学ぶケースも増えてきました。今後はその方が有利になっていくと思います。

――大企業を退職してプロの道を選ばれた理由を教えてください。

岸本　まず就職を選択したのは、ライセンスを取ってもすぐにプロとして食べていけるわけではないからです。就職してもトレーニングは続け、できるところまで会社と両立したいとは考えていました。ただ、同期たちは社内でそれぞれ目標を持っている一方で、私自身は社内での将来像を明確に描けませんでした。格闘技仲間も目標や夢を持って努力している。彼らと比べた時、自分はどっちつかずになるのでは、本当にやりたいことに自分は背を向けているのではないだろうかと。「行くなら今」だと決心して、入社2年目の年末に退職しました。

――周囲の反応はいかがでしたか。

岸本　会社からは慰留されましたが、私の思いを汲んでいただけました。両親には半年前から気持ちを伝えていたのですが、本気にしていなかったようです（笑）。最終的には、本当にやりたいことがあるのは良いことだと理解してくれました。一番背中を押してくれたのは、大学の同窓生だった現在の妻です。

――その後の生活をお聞かせください。

岸本　24歳でフリーターになったので、昼過ぎまではスーパーでお弁当作りのアルバイトをして、夜はトレーニングをしたり、別のジムで格闘技のインストラクターをしたりしました。アルバイトで固定給を得ながら、年3回ほどの試合に出てファイトマネーを獲得。練習環境はスポンサーからの支援などで整えていました。その頃から、着実に勝てるようになっていきました。

――20代後半は破竹の勢いで連勝されたと聞きます。

岸本　8連勝してタイトルマッチまで行き、ベルトを逃しました。そこから大きなけがが増えていき、全身麻酔手術を6回受けました。膝の半月板損傷、腕の尺骨や眼窩底の骨折。鼻に衝撃を受け続けると腫れて鼻腔が狭くなり、呼吸ができなくなるので、骨を削って鼻腔を広げる手術もしました。一度けがをして手術すると筋力が落ちて、また一からの積み重ねになりますが、やはり総合格闘技が好きなんですね。意地もあったかもしれない。2018年1月に「GLADIATOR」という団体でライト級王者になれました。

負けた悔しさから人の痛みを学んだ

――総合格闘技から得るものは何ですか。

岸本　学んだことはすごく多いです。楽しさも挫折も教えてもらった。計画的にトレーニングを重ねて試合で勝利をつかむという成功体験も得られました。まさに人生の縮図です。これらの経験は必ず、次のステップに進んだときの肥やしになっている。次に応用、変換できる自信が育っているはず。真剣に打ち込んだ分、リターンは大きいと思います。素晴らしい出会いへの感謝も育ちます。

――負けても、リターンはありますか。

岸本　私たちが仲間と分かち合うのは勝利の喜びだけでなく、負けたときの悔しさも同様です。その分かち合いを繰り返すうち、人への寄り添い方も少し分かった気がします。それは他の仕事にも生きることではないでしょうか。実は福祉分野にも関心があり、膝を負傷した時に介護職員初任者研修の資格を取りました。現在は総合格闘技を続ける一方で、有料老人ホームで入浴や食事などの生活介助や事務をしています。ホームに暮らす方たちには、人生の残り時間があまりない辛さがあります。私は格闘技でけがをした時に味わった辛さを知っている。共有できるものがあります。

――いつまで現役を続けられますか。

岸本　今、35歳です。この世界の限界は40歳頃。現在参戦中の「バンクラス」は強豪の集まる団体なので、ここでチャンピオンベルトを獲れれば、また次の新たな目標が見えてくるかなと思います。バンクラスの試合はAbemaTVで中継されるので、ぜひ観てください。

――夢を教えてください。

岸本　自分の総合格闘技ジムを持つのが夢です。それも、家族で来ていただけるようなジムが目標です。今はキッズ格闘技教室があったり、女性もボクシングジムに通う時代。健康で長生きするためには身体の機能を維持することが必要ですから、ファンクショナルトレーニングの指導もしたいです。介護の仕事も続けたいので、社会福祉士の資格取得も視野に入れています。

――新しい卒業生の皆さんへメッセージをお願いします。

岸本　社会に出れば環境は一変します。でも、人生の主人公はあなた自身であることを覚えておいてほしい。しっかりと自分のストーリーを楽しみながら、充実した物語を描いてください。

（2019年12月10日、大阪にて）

メダル狙います！

一人ずつの行動で社会の垣根を取り払いたい

JR福知山線脱線事故で車いすユーザーとなった岡崎さん。体を動かしたくてパラアーチェリーを始めると、めきめき上達。東京2020パラリンピック代表内定を機に、意気込みを伺いました。

岡崎愛子（おかざきあいこ）さん
パラアスリート（アーチェリー）

本格的に始めて3年で世界選手権3位

――パラリンピック代表内定、おめでとうございます。

岡崎　ありがとうございます。昨年、世界選手権のミックス戦で3位になり、パラリンピックの出場枠を得ました。延長戦の末に粘り勝って3位に入れたことは自信になりました。

――パラアーチェリーを始めた経緯を教えてください。

岡崎　2013年の冬に、アーチェリーの経験者である母から「車いすでもできる」と聞いて始めました。もともと中学時代はソフトボール、高校では愛犬と一緒にフリスビードッグに打ち込んでいたので、体を動かすのは大好きです。ただ、弓の組み立てや、矢をつがえたり的から矢を抜いたりするには介助者が必要。ソニーに就職して東京で一人暮らしをしていたので、両親が上京する時しかアーチェリー場へは行けませんでした。本腰を入れるようになったのは、東京で介助してくれる人ができた2016年です。区のアーチェリー場で練習を再開して、普段はユーチューブで海外の選手の動画をひたすら観たり、自分の練習の動画を撮ったりして研究しました。初めて試合に出場したのは2018年4月です。

――本格的に練習を始めて、わずか3年で世界選手権に出場されました。飛躍を後押ししたものは何ですか。

岡崎　2018年9月に新しい弓に替えたことと、体を固定するベルトに工夫を重ねたことが要因だと思います。パラアーチェリーでは一般的なリカーブと、先端に滑車のついたコンパウンドという2種類の弓を使います。私が属するW1クラスはどちらの弓でもよいのですが、私は四肢まひなので、より小さな力で引けるコンパウンドの方が使いやすいのです。このコンパウンドを、弓の強さ、引き尺などをセレクトして注文できるセミオーダーメイドのものに新調してから射型が安定し、的に当たりやすくなりました。両腕がなく、足で弓を支えて射つアメリカのマット・スタッツマン選手が使っているのと同じタイプの弓です。

――現在の練習内容を教えてください。

岡崎　2019年11月から、パラアスリート支援に力を入れているソフトウエア検証企業の契約社員になったので、現在は練習環境に恵まれています。週に3日はナショナルトレーニングセンターで、コーチと一緒に練習します。週末のうち1日はアーチェリー場へ出かけて練習。空いている日は、日本で唯一の脊髄損傷

者専門ジムで全身トレーニングを行います。もう12年間機能回復トレーニングを地道に続けているおかげで、関節や筋肉をしなやかに保てています。

――本番に向けて課題はありますか。

岡崎　私は握力がゼロなので、顎に発射装置を固定して射ちます。背筋、腹筋もほとんどありません。最近整ってきたとはいえ、正しい射型を保つのが課題です。失敗したときは普段と何が違うのかをチェックして、その日のうちに修正するよう努めています。もう一つは暑さ対策ですね。試合はすべて屋外で行われるのですが、私は脊髄を損傷したので体温調節ができません。厳しい暑さの中では体温が39～40℃になることもあります。そうなると熱中症や手のしびれを起こしてしまう。当日は傘や冷却グッズ、冷たい水などでこまめにケアする必要があります。正確に的を射るためには感情面でも安定しないといけませんが、私の場合、メンタル面よりコンディション維持に必死なので、それがかえって良いのか、過度に緊張することなく試合に臨めています。

緩い挑戦でいいから
継続することが大切

――東京パラリンピックへの関心は今までにないほど高まっています。

岡崎　私たちは「パラ・バブル」と捉えていますが、バリアフリー化が進んでいるのは喜ばしいことです。街に出ると、声をかけられる機会も増えました。

――パラアーチェリーを始めたことでご自身の内面に何か変化はありましたか。

岡崎　障がいをあまり意識しなくなってきたと思います。元の自分に近づいてきた感じでしょうか。事故から入院、復学、就職活動と進む中で、できることをしようという考え方が身についてきました。バイタリティあふれる人たちが周囲に大勢いるので、自分にも、もっとできることがあるのではと思えるようにもなりました。そこから学んだのは「とりあえず、やってみる」という姿勢。考えるのはそれからでもいい。緩い気持ちでいいから挑戦し続けたいです。

――そこから育った志はありますか。

岡崎　障がい者がもっと外へ出て活躍してこそ、社会は変わると思います。私がスポーツなど多方面で行動することによって、何かを感じていただけると嬉しいです。少しでも障がい者と健常者との垣根のない、「ごちゃまぜの社会」になればと願っています。

――同志社時代の思い出をお願いします。

岡崎　車いすで復学後、今出川校地で段差を見つけました。寒梅館の裏も通りにくかったので大学にお伝えしたところ、すぐに改善されました。やはり同志社大学は福祉への取り組みに熱心だと感じました。

――今春卒業する学生の皆さんにメッセージをいただけますか。

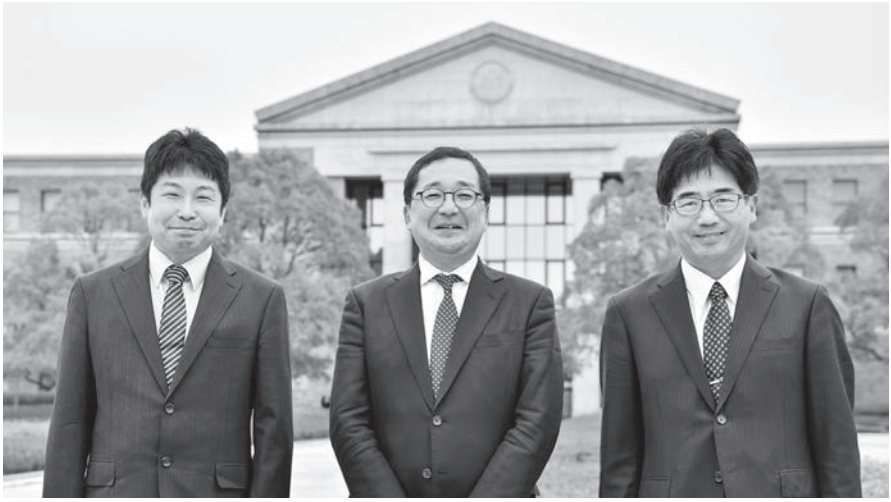
岡崎　私がソニーを退職したのはいったん立ち止まりたかったからでしたが、それによって視野がさらに広がりました。大好きな犬に関連して起業もしたし、失敗もしました。だから成長できました。転職を勧めるわけではありませんが、仕事でもプライベートでもいいから、皆さんもいろいろな世界を見てください。

――パラリンピック本番に向けて意気込みをお聞かせください。

岡崎　11月頃から点数が伸びてきました。この調子を維持できればメダル争いにも絡んでいけるかなと今から東京パラリンピックが楽しみです。私の出場はミックス戦が8月29日、個人戦が9月1日。ぜひ応援にきてください。声援が多いほど、他国の選手にプレッシャーをかけられますから！（笑）

（2019年12月6日、東京にて）

大学入試改革の今後について



多久和英樹（たくわひでき）教授　（同志社大学入学センター所長）
川崎清史（かわさききよし）教授　（同志社女子大学広報部長）
中根正義（なかねまさよし）氏　（毎日新聞編集委員）

入試改革に対する同志社の立場

中根●大学入試センター試験は２０２０年1月が最後となり、来年から大学入学共通テストがスタートします。それに伴い、入試改革を巡りさまざまな動きがありましたが、昨年末で一段落しました。今回の入試改革にはどんな印象をお持ちですか。

多久和●入試は大学として学生たちを受け入れる最初の入り口であり、一年一年が勝負です。同志社大学、女子大学の入試を受けてくれる高校３年生や近い将来受験してくれる中学生たちまでを大切にして、毎年の入試を正しく行う。それが私たちの基本姿勢です。外の騒動に一喜一憂せず、誠実に情報発信もしないといけない。内部の責任者として当然のことを行っています。

川崎●世の中で言われているほど、大学内にそれほど動揺はありません。来年からの共通テストにも、一つずつ適切に対応していくだけです。入試改革が行われる背景を大きく考えてみると、大学入試

には、大学が求めている人材を選抜する部分と、高校での学習の進捗度を測るという部分の両面があります。今回中止となった「読む・聞く・書く・話す」という英語の４技能評価や、思考力などを見る国語・数学の記述式問題については、社会で活躍できる人材を育てたいという目標に向かっては意義のある試験方式なのでしょう。しかし大学側には、高校ではそういう勉強がまだ不十分なのではという疑問があります。だから入試改革に対しては、どちらかというと高校側からの反対の声が大きかったのではないでしょうか。「英語４技能試験が無くなって残念だ」という声はあまり聞こえてきません。改革の方向性そのものは、それほど悪いことではないと思います。

中根●私もそう感じています。「知識・技能の確実な習得」「思考力、判断力、表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」という「学力の３要素」を含め、方向性が間違っているとは思えません。ＡＩの進展など今後の社会の大きな流れを考えると、教育改革の必要性があることは間違いないでしょう。今回問われていたのは、50万人という規模の受験生に対応できるのかという問題が解決されないままだったことでしたが、国の審議会などの議論を通し、改革の方向性が示されています。高等教育機関がすべきことは明確になっており、すでに取り組んでいるところも数多くあります。改革に向けての流れは、もはや止められるものではなくなってきていることを、取材等を通じて実感しています。

多久和●高校や大学を卒業して社会に入ってきた人たちの能力が非常に高く、皆が満足していたら、おそらくこういう議論にはなりません。ただ、今の高校生や大学生は真面目に授業に出ます。昔に比べてさぼっているわけではない。せっかく英語の４技能も含めてよく勉強しているのに、なぜできないのか。彼らは読解力がないと言われます。できるはずなのに、できないのです。それが、皆が根本的に感じている不満ではないでしょうか。そこを伸ばすのが非常に難しい。少子化がさらに進むと、おそらく今思っている以上に社会の人々が活躍しないといけなくなります。企業を含め、今までは人的に余力のある中で社会が動いていましたが、その余力が無くなる時代が来る。そういう意味では、全員の能力を伸ばしていくことが課題です。入試で測る能力、測らないけれどもきちんと見る必要のある能力、そして今後育てる能力というものがある。入試はテクニカル面で難しい問題を抱えているにしても、今後は一人ずつの学生をオーダーメイドで育てていく必要があるのではないかというのが、全体的な印象です。

川崎●入試の多様化に伴い、学生も多質化、多様化しています。大学側はいかにそれを伸ばして社会へ送り出すかを考えないといけない。今の個別教育を含めて入試を考える必要があると思います。

多久和英樹教授
同志社大学入学センター所長

従来型を堅守した上で主体性を評価する入試を

中根●学力層を富士山型で考えると、かつて裾野は緩やかでした。少子化が進むと、この裾野が狭まります。頂点にいる学生は今までの学力を維持できたとしても、各大学の定員が変わらなければ、それぞれの大学に入学した学生の学力差が広がります。すると、学生の質を担保するのが非常に難しくなってくる。ひいては大学の研究力の担保も大変になってきます。難関大学とされる大学のトップの方々を取材すると、そうした点について、非常に危惧しておられます。今後、学生の質をどう担保していけばよいのでしょうか。

多久和●同志社大学の入試では基本的に、おそらく次の20年間も記述式を維持しないといけません。今あるものを維持するだけで非常にコストがかかります。本学では入試業務に、学長以外の全教員が携わっています。入試関連の教職員の稼働率は他大学の比ではないでしょう。従って入試に関して現在の規模はマックスなので、それ以上のことはできません。今までのように、丁寧に一人ずつを評価するというポリシーが基本です。そういう意味での質の担保は非常に重要だと考えます。また入試データを見ると、合格率は3人に1人です。3人に2人にはお断りのメッセージを出さざるを得ない。しかし挑戦したが不合格だった経験は、必ずしも否定されるものではありません。その挑戦を今後も維持してもらうために、なぜ合格できなかったかを、私たちは受験生に対して合理的に説明する義務があります。そういうレベル、内容の入試を維持しないといけない。それが同志社大学のスタンスであり、質の担保の一番の近道であると考えています。そこに、関西の大学で一番信頼を置いていただける理由があるのではないでしょうか。女子大学があるのも安心です。本学には無い学部や進路もあるので、法人として協力し合いながら質の担保、進路の確保をすべきでしょう。

中根●2つの大学でうまくフォローし合う関係がありますね。

川崎●女子大学の場合、学生の質の担保は現時点でも課題であると思っています。具体的な問題が起きているわけではありませんが、憂慮すべき問題と考えています。少子化になると、従来なら入学できなかった学生も入ってくる。そういう学生たちも今までと同様のレベルで卒業させるために、大学の教育力も高めていく必要があります。学力の3要素、知識・技能に偏らず、思考力・判断力・表現力、さらに主体的な学びも評価できる入試を積極的に行い、多様な学生を集めて教育する。その必要性は、より強くなってくるでしょう。女子大学の入試は、現在はマークシート方式です。それを変える必要性については議論しないといけませんが、新しい学力観に即した入試ではないかもしれないけれども、マークシートでも知識・技能、思考力・判断力をある程度測れると考えています。そもそも自分から学ぶ意欲がなければ、その3要素などの力もつきませんから。

多久和●同志社大学も女子大学も受験するのであれば、記述式も勉強しないといけないわけですね。国立大学も記述式を

述式でしょう。普段の勉強をした上で、入試ではマークシートなどのカテゴリーがある。それでよいのではないでしょうか。同志社でも学内高校を含めて多様な生徒が入ってきます。それを含めて、全体で主体性を育てる。入学後に主体性の不足が分かれば、補ってあげればいい。加えて、学生側の意欲も重視したいですね。たとえば音楽、美術など特徴的な学科の学生や小学校の教員になりたい学生などには、意欲は非常に重要だと考えます。しかし今後はすべての分野において、そういう意欲が必要になる。意欲の育て方を考えないといけない。授業をしていると分かるのですが、意欲を持っている学生が一番伸びます。そこが、一点刻みの入試を改革する理由の本質だと思います。最初できないことに対しては、教育者は我慢できる。ただ、今は意欲のない学生、理解の止まってしまう学生が少なくない。そこを何とかしたい。入試は大学からのメッセージでもあるので、逆に本学で伸びそうな人を入試でも丁寧に評価してあげる。そういう時期に来ているのではないでしょうか。

同志社の入試と3つのポリシーとの整合性

中根●中央教育審議会は2017年から、3つのポリシーの策定・公開を各大学に義務付けています。アドミッション・ポリシー（入学者受入方針）、ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）がそれで、大学教育改革の柱とされています。一つ目のアドミッション・ポリシーは先ほどお話に出ましたように、大学からのメッセージでもあります。非常に大事なものです。今回、英語4技能試験について、国が中止を決めた途端、国立大学は右にならえで取りやめるケースが続出しました。それは大学人の矜持としてどうなのかと思いました。同志社ではアドミッション・ポリシーに基づいて、どのような特色を持った入試をしておられますか。

川崎●女子大学では、「知識・技能」「思考・判断・表現」、主体的な学びは「関心・意欲・態度」という言葉に置き換えて、その3つで各学部・学科ごとにアドミッション・ポリシーを作っています。一般入試以外の入試では、たとえば指定校推薦は、高校側で全体的な力を3つ総合して推薦していただいていると思います。AO入試では主体的に学ぶ意欲の強い人が入学しています。指定校推薦とAO入試で現在、約3割の学生が入学している。それを考えると、入試方式の見直しは必要だとしても、大学全体としてはアドミッション・ポリシーに合致した学生が、ある程度のバランスで来ていると思います。

多久和●同志社大学の入試は記述式です。本学では、普段の勉強を深く、丁寧にしている人に来ていただきたいと考えています。記述式試験は手が止まって困るの

川崎清史教授
同志社女子大学広報部長

が普通です。不十分なもの、困り具合をこちらが評価するための、記述式なのです。ただ、のべ４万人分の答案を丁寧に評価するのはなかなか困難です。在籍中の学生の教育も忙しいため、そこにもう少し重心を置きたい。高大接続も含めて在学生の学力向上に力を入れた方がいいと思いますし、今後はそちらの方向へ行かざるを得ないのかなと思います。

中根●国の言う３ポリシーと同志社の入試との連携、整合性はどうでしょうか。

多久和●学校法人同志社のシステムでは、大学のガバナンスに教員がかなり参加しています。教員といえども自分だけの学部がよければよいと考える人は少なく、同志社全体を考え、責任を持って仕事をしています。従って３つのポリシーが揃うのは自然なことです。入学時に到達点まで達していなくても、入学後はきちんと育てようというポリシーがある。それを各学部や学科に落とすと、その分野の本質的なことを勉強し、小手先ではなく将来通用する能力を身につけさせるポリシーになる。世の中に出る時は自分さえよければいいというのではなく、一人のひととして役割を果たし、人を引っ張って行けるような、「人として」卒業してくださいという方針です。「新島先生の教育理念に従って１５０年間続いてきた同志社大学である」というのが一番のアドミッション・ポリシーだと思います。

中根●「同志社そのものがポリシー」とは大きな言葉ですね。新島先生は仏教都市である京都の地で、あえてキリスト教精神の学校を設立した。強固な理念を持たないと存続していけなかっただろうし、京都の街が受け入れてくれたことも大きかったように思います。その伝統が今も脈々と息づいているということですね。

川崎●１５０年続いてきた教育理念を３つのポリシーに入れている。だから同志社の入試と３つのポリシーとの整合性が取れているのは、当然のことです。

多久和●しかし次の50年、１００年もこのままで行けるのか。それを考えると、私たちはさぼってはいけない。

中根●同志社の教育理念の一つである国際主義については、入試に関連してどうお考えですか。

川崎●国際主義イコール英語ではないと思いますが、女子大学では必ず英語の試験はあります。それは国際主義へのメッセージの一つでしょう。学内的には国際主義教育と合わせて、今後英語教育にさらに力を入れていきたいという議論はあります。

多久和●グローバル入試も一定程度、検討はしています。あとはタイミングと形ですね。グローバルを広い概念で捉えて、必要な時期に検討はしたいと思いますが、もう少し世の中が落ち着いてからです。外国の人と一緒に授業だけでなく食事などをすると、自然といろいろなテーマについて会話が生まれます。そこからグローバルなバックグラウンドが育つ。そういう環境を、もっとうまく生かせればと思います。

中根正義氏
毎日新聞編集委員

リベラルアーツをいかに学ばせるか

中根●災害の多い昨今、世の中に貢献したいと考える高校生が増えています。ところが社会貢献への思いはあっても、高校生はその方法が分からない。やる気や意欲があっても、基礎学力が不足して大学の授業についていけない学生も増えています。たとえば経済学部では、今は中堅以下の大学でも当然ながら数学を必須にしています。高校で数学の勉強をしていなければ、大学でついていけない学生が出てくる。意欲と基礎学力を、どうセットで育てていくのかが非常に大事な時代だと思います。文系学部でもデータサイエンスやプログラミング教育が必要になってきています。教育理念の一つにリベラルアーツを据えている同志社として、どうお考えでしょうか。

川崎●私は薬学部の教員でもあります。薬学部の学生は、最後は国家試験に受かることが目標です。しかし国家試験合格のためだけの勉強、教育では面白くない。学生は非常に多様です。プラスアルファをしっかり学びたい学生もいるし、6年間で卒業して免許取得までを達成したい人もいます。システムの問題ではなく、一人ひとりの学生を教員が見て指導していく必要がある。リベラルアーツや教養は社会で必要になりますので、その重要性も学生に理解させ、勉強への意欲も持たせていくことが必要です。入試との関連性は難しいですが、教育としてはそういうことが大事です。教員の力が問われている。同様の課題は、どこの学部や学科でもあると思います。

中根●同志社大学の場合は規模的な問題もあり、一人ずつに向き合うのは大変ですね。

多久和●手取り足取り教えるのは難しいし、学生もそろそろ大人なので逆に自立を促す必要がある。新島はおそらくそういうことを言ったのではないでしょうか。今まで教育側は学生に一方的に与えるだけでしたが、大学も学生側がアウトプットしたものを見る必要が出てきているのかなと思います。そのウェイトを変える必要が出てきている。画一的な教育ではなく、やはり教員の力が問われています。幅広い学びが将来役立つことは確かです。大学も学びの材料を提供しないといけない。また、全部自分で学ぶのはなかなか難しいですが、多様な学生と知り合い、多様な価値観や京都という街にも触れ、そこから学ぶのもリベラルアーツでしょう。それが最後には自分の基礎やコアになる。ストロングポイントを作るためにそうやって学んでいった先に、自然とリベラルアーツに行き着くのかなと思います。私は数学が専門ですが、数学に取り組んでいると、しばらくして他分野での気づきがあった経験もあります。

中根●新島先生が大切にしたリベラルアーツに、京都という街の魅力が加わっている。京都は日本の伝統、文化の宝庫であり、国際観光都市でもある。黙っていてもそういう風に触れて生活できるのは素晴らしいことです。

川崎●京都という地は、入学してくる学生の魅力の一つになっています。京都関連科目もあって非常に人気です。学生の意欲を高める上で良い場所であり、強みです。特に今出川校地は伝統・文化の中心地という、非常に良い場所にあります。

高大接続の重要性

中根●私は全国各地の大学の方々とお話しする機会が多いのですが、主体的に学ぶ力を育てるには大学の4年間では難しいと聞きます。そこで高大接続の問題が大事になってくる。同志社には総合学園として法人内の各学校との連携がありますし、公立高校との連携もあると思います。京都先端科学大学の永守重信理事長（日本電産会長）と一昨年お話しした時、永守氏は「もっと高校と連携した教育をしていかなければならない」とおっしゃっていました。「大学の4年間の教育だけでは足りない」と。意欲があれば4年間で化ける学生もいるが、そうでない学生もいる。そこで大学での知や学びに高校・中学の段階でも触れられる機会を設け、意欲へとつなげていく。そういう意味での高大接続が、今まで以上に重要になってくるのではないでしょうか。

川崎●女子大学では、社内校からの進学は同志社大学ほど多くはなく、全体で40名程度です。同志社大学にも行けるけれども女子大学に希望学部があるから入学したというケースが多いです。彼女たちはとても意欲的で、中核的な存在として頑張ってくれています。指定校推薦枠では、京都聖母学院に同志社女子大学クラスが設置されており、一定数の生徒が本学に来てくれています。生徒の適性に合った進学指導をしておられ、10年近くにわたり本学と連携を深めています。ある程度継続しているということは、それが成功していることを示していると思います。本学の教員が高校へ行って授業を行うこともあり、将来女子大学に来た時のイメージづくりを高校生の頃からしているわけです。今後もある程度、継続していきたいと思います。

多久和●私は現在「フロントライン同志社」の取り組みの一環として、高校、中学、小学校も含めて数学の先生の会を作り、一貫教育の中で情報交換をしています。高大接続として、こちらから無理やり乗り込んでいくのは少し違うと思うので、法人の中高の先生方には自由にやっていただきたい。ただ希望があれば中高や学年に関係なく、法人校の生徒たちを大学に受け入れてあげたいですね。生徒たちが背伸びできる環境整備をしたい。現在、同志社大学全学生の約6分の1が法人内高校から進学しています。約100人です。進学希望者はもれなく入学できることになっている。いったん引き受けたら最後まで面倒を見るのは基本なので、ぜひ彼らに多様なアプローチをしたい。最近では、同志社幼稚園の園児たちが年に一度、大学の中でクリスマス会をしています。劇をしたりお点前をしたり、非常に面白い取り組みです。一貫教育という意味では、大学はそれに関心を持ってあげないといけない。もちろん法人校から他大学へ進学してもいいのですが、将来的に教員として同志社に戻ってきてくれるといいですね。現に法人出身の教員が、大学にもかなり増えています。法人出身の女性の研究者、教授もかなり増えてきました。これからは女性がもっと活躍する時代。全員が活躍してもらわないと困る時代です。ただ大学から押し付けても心には届かないので、必要なら生徒、学生に意欲を持って参加してもらう。必要ならアウトプットもしてもらい、それを大学は活用する。それが本当の高

大接続だと思います。

少子化時代に取り組むべきこと

中根●開かれた大学として、今後、ますます情報発信が重要になっていくのではないでしょうか。大学の入学定員と入学者数は同じになり、将来は確実に総入学者数の方が少なくなります。文部科学省の資料によると、12年後には18歳人口が１００万人を切り、さらに昨年の出生数から17年後には90万人を切ることが確実になりました。この中でどう教育を進めていくのか。やる気、意欲をどう育てて行くかが問われていくでしょう。学園全体で、学生の期待に応える教育に取り組む必要もありますね。

川崎●１５０年を過ぎても、もっと続いていく大学にしていかないといけない。そのために、良い学生を育てないといけない。そのためにも入試では、大学が大切にしていることをメッセージにして訴える。絶え間なく努力し、時代に適切に合わせて変えていくことが大事だと、改めて思いました。

多久和●近年、同志社大学は新島塾を始めたり教育寮の準備をしたりしています。新しい学びに対応すべく、意欲ある学生をどう育てるのかに尽きると思います。入試は世間から注目を浴びるシビアな機会ですが、今までと変わらず取り組んでいきたい。先人たちが築いてきたことを維持してしっかりやっていきたい。一貫教育の枠組みの中、小学校、幼稚園まで含めて、法人校の生徒たちに刺激を与え、自分がどう考えるのかを問い続けてもらいたい。正直言って、私は現状に満足していません。同志社には引っ込み思案なところがあり、守りに入っていた部分があります。今後は言うべきことは言い、参加するべきことは参加しないといけない。次の50年、何をするのかを考えたい。今後は女性の時代でもありますので、女子大学と連携しながら取り組んでいきたいと思います。

中根●私は普段、東京で仕事をしていますが、同志社の認知度はまだまだ不足していますし、東京の大学では得られない魅力が伝わっていないように感じます。そうした点をもっと伝えていただければと思います。本日はありがとうございました。

「天皇」と「個人としての実像」との開きを考える

今日は天皇家と同志社との関係を、同志社の視点で考えたいと思います。前提が三つあります。一つ目は、近代日本の天皇制ファシズムと同志社はどう関わったのか、そこで同志社はどう向き合ったのかということ。二つ目は、天皇という制度を考えるとき、私たちはいくつかの錯誤を犯しているのではないかということです。たとえば明治天皇は鎖国を解いて日本を率いた大帝のごとくに語られます。しかし明治天皇と睦仁という個人との間には大きな段差があります。睦仁という個人は慎重な性格で、戦争はできれば避けたいと思って逡巡し、決断もなかなかできない。日清戦争の時、「これは朕の戦争ではない。政府の戦争だ」と言った。日露戦争開戦時には戦争をしたくないと泣いたという説もあります。

大正天皇もそうです。嘉仁という天皇は驚くほど神経質で、文人肌でした。漢詩を作る天才で、天皇でなかったら近現代で最も優れた漢詩人になったでしょう。ところが第一次世界大戦中から、ほとんど漢詩を作らなくなります。当時作った漢詩では、青島で水を求めて死にゆく兵士たちを思い、我が身はこれで良いのかと自問します。大正6年にはこんな漢詩を詠んでいます。外見は貧しいが精神も貧しいと言えるのかと問う「貧女」、南方で育ち日本に暮らすオウムの幸せを問うた「鸚鵡」。軍事は大嫌いでした。2週間続く陸軍大演習に出席する際は「2日にならないか」と言ったほどです。優れた感性で漢詩を詠み、軍事に対して怯える。当時としては、望まれる天皇像としてふさわしくない。大正天皇はノイローゼ状態になり、追われるように摂政を置かれました。

昭和天皇と裕仁という個人との間にも段差がありました。昭和天皇も「戦争」という言葉を嫌っています。日中戦争、太平洋戦争へと至った時、「誰が戦争をしろと言った」と、自問自答したと言います。明治以降の天皇の歴史は、政治権力や軍事権力が期待する天皇像をつくり上げ、天皇自身が個人をそこへ合致させるのに苦労した歴史だと言うことができます。

なぜ3人の天皇は戦争に怯えていたの

レクチャー

第24回同志社国際主義教育講演会

「天皇家と同志社」

ノンフィクション作家・評論家
日本近現代史研究者　保阪正康（ほさかまさやす）氏

か。江戸時代、日本は対外戦争を一度もしませんでした。つまり日常において、天皇のあり方から戦の概念は消えていた。だから怖がる。そして第一次世界大戦、第二次世界大戦があり、ドイツをはじめとする多くの国で君主制があっという間に崩壊します。戦争は君主制を崩壊させることを昭和天皇は知っていました。

終戦後は新しい憲法のもとに新しい天皇のイメージがつくられようとしましたが、昭和天皇はそれを成し得ませんでした。それを受け継いだのが平成の天皇です。平成の天皇と明仁という個人との間には段差がなく、一体化している。こんな珍しい形は天皇の歴史で初めてです。明仁という天皇は大きく天皇像を変えました。大きな転換点は、国民に向けたビデオメッセージです。メッセージの中で、天皇は最初に「個人として」と言いました。天皇は内閣の助言と承認を得なければ個人的な発言はできないはずです。それなのに天皇が意思表示をするようになったことは、重視する必要があります。

三つ目の前提は、国民と天皇との関係は時代によって変わるということです。私たちは千年余にわたり、天皇と権力、国民との間には何があるのかという「答案用紙」を書いてきました。各時代の答案が私たちの目の前に積まれていて、私たちはそれを自由に「歴史」として見ることができます。たとえば南北朝の答案には、天皇という権威が権力を求めると世の中がどれだけ乱れ、民がどれだけ不幸になるかが書いてあります。江戸時代は朝廷権力と武家権力の間に役割分担がありました。これは良い答案でしょう。日本の歴史の中で最低の答案は昭和10年代です。国民と天皇との間に軍事が介入し、天皇を神と思えと強圧的、弾圧的な政策をとった。そして平成の天皇は、また新しい答案を書きましょうと私たちに呼びかけたのです。

以上三つの前提に立ち、今日は天皇家と同志社について、三つの局面から語ります。一つは新島八重さんと、大正天皇の妃である貞明皇后との関係です。二つ目は、徳富蘇峰と、その弟子で日銀総裁になった深井英五、終戦時に駐バチカン公使だった原田健という3人の同志社出身者を通して、天皇家と同志社の関係を語りたい。三つ目は、半藤一利という作家と私が計7、8回にわたって平成の天皇と美智子皇后との間で交わした会話から分かったことを語ります。

新島八重がもたらした幕末の整理

大正14年に貞明皇后は、昭和天皇の弟である秩父宮の妃として、突然会津の人を選びました。会津の松平容保の六男で

外交官をしていた松平恆雄の娘、節子（※婚姻後は勢津子）という人に白羽の矢を立てたのです。貞明皇后はなぜ会津の女性にこだわったのか。

私は秩父宮妃殿下に昭和の終わりに取材を申し込み、松平家から嫁いできた理由を聞きましたが、妃殿下は「私は18歳だったので知らない。とにかく皇室に入れと言われた」と答えます。NHKで大河ドラマ「八重の桜」を制作することになった時、新島八重について調べたことがありました。すると大正13年から14年の初め頃、貞明皇后が同志社女学校に視察にきたことが分かったのです。資料によると皇后は視察時に、八重さんと1時間会っています。女官が1人付き添ってはいますが、2人で会っている。

会話の内容については資料が残っていませんが、私はこの1時間をキーポイントと考えます。ただ訪問のお礼を述べるだけなら1時間もいりません。私はその時、八重さんが訴えたのだと思います。会津がいかに悲惨な状況にあり、朝敵のそしりを受けているのかという、会津の苦痛を切々と訴えた。キリスト教の女学校を視察する際、おそらく貞明皇后は攘夷などいろいろな不安があったでしょう。しかし八重さんと話す間に不安が氷解し、幕末維新からの会津の状況を理解した。そして大正14年、会津の松平の娘に白羽の矢を立てた。時間的にぴったり符節します。

会津では提灯行列が行われ、朝敵の汚名がそそがれたと大喜びします。会津は復権した。それは八重さんの功績だと思います。その後、八重さんはいくつもの和歌を作り、それまで会津に帰ったことがなかったのに、昭和2年から亡くなる7年まで頻繁に会津に帰っています。山本家の墓を直したり、会津女子高校で講演や揮毫をしたりして、会津への特別の感情を示しています。

貞明皇后と八重さんの会談は、歴史だと思います。皇室そのものを変えたのではないでしょうか。史実は可視化できますが、私はこの話から、可視化できない史実もあることを感じます。証拠はありません。しかし歴史とはそういう積み重ねの中から、ある事実が生み出されてくるものです。

貞明皇后はなかなか聡明な人です。長男の妃は薩摩から、次男には会津から、三男には徳川から、四男の三笠宮には明治維新の勲功華族である高木家から妃を迎えています。薩摩に幕末維新の功績を認め、徳川の流れも断ち切らないよう配慮したのでしょう。皇后は4人の子を使って維新時の整理、清算をしたのです。その役割を同志社が果たしたと考えてよいのではないでしょうか。

終戦後日記から分かった徳富蘇峰の内面的変化

二つ目は3人の同志社出身者についてです。まず新島襄の精神に一番近いところにいた徳富蘇峰について。蘇峰は、明治10年代は民権派として『國民新聞』『国民之友』を興し、民権論者として論を張りました。明治20年代後半からは国権派に徐々に変わっていき、日露戦争になると政府の代弁をするようになっていきます。昭和に入ると大日本言論報国会の名誉会長として、太平洋戦争の精神的な鼓吹の役を果たしました。これは正義の戦争であると、若い人向けにも本を書いています。1943年頃からアメリカが作成していた日本の戦犯者リストにも、蘇峰は一時的に入っていたほどです。こ

れ以降の経緯に関する資料はありませんが、蘇峰がA級戦犯になるのを避けるため、天皇の助言者の一人だった枢密顧問官の深井英五らが尽力したのではないか。そして蘇峰の代わりに、リストに大川周明が入ったと思われます。

この徳富蘇峰をどう考えるかは、新島襄を考えるときに突き当たる大きな壁です。もし新島が長生きしたら蘇峰のようになったのではないかという懸念、不安が私にはありました。しかし蘇峰がつけていた終戦後日記を読み、私は大変驚いたのです。

日記の中で蘇峰は、昭和天皇だからこんな戦争になったのだと書いています。明治天皇だったらこんな戦争にはならないと。いかにも責任逃れに見えますが、含蓄に富む言い方です。明治天皇は戦争に怯えつつ、戦争に納得した。昭和天皇はそういう境地ではないということです。睦仁という天皇が持っている個人的性格と、裕仁という天皇の個人的性格が違うと言っているのです。睦仁とは異なり、裕仁は人為的につくられた天皇であると。日記では新島襄の思い出も書いています。この日記を読みながら、ある立場からズルズルと言論報国会の名誉会長に押し上げられていく、蘇峰のある種の弱さは感じます。それでも蘇峰は歴史をよく見ていました。

蘇峰のそういう内面的変化の中に、私は彼を見直します。彼は彼で相当悩み、こういう形になったのだと。同時に、日記で新島の純粋な精神に触れているのを読み、新島が長生きしたら蘇峰にはならないのだという確信を持ちました。目からうろこが落ちるような形です。

戦争終結に尽力した深井英五と原田健

蘇峰の弟子であり新島襄の教え子でもあった深井英五は、同志社の生んだ秀才です。零落する高崎藩の士族の家庭に生まれ、学問をしたいが続ける余裕がなく、新島の縁で奨学金を与えられて同志社に来ました。毎月新島の家に行き、八重さんから奨学金をもらっていた。それ自体が最大の勉強だったと、深井は自伝で書いています。歴代の日銀総裁の中で最も勉強家、理論家で、リベラルであり、誠実に軍部と対峙して財政を守ろうとし、結果的に総裁のポジションから外れていく人です。

深井は昭和10年代、貴族院議員になり、枢密顧問官になります。昭和20年8月15日に至るポツダム宣言受諾の際、病身をおして枢密院の会議に出席し、戦争を終わらせないといけないと言っている。戦争終結を、命をかけて訴え、2カ月後に亡くなりました。この深井英五を私たちはきちんと見直さないといけない。深井

英五の存在が新島襄の精神であり、蘇峰を考える際の掛け橋になります。

昭和20年に入ってから、駐バチカン公使だった原田健の元にはアメリカ、イギリスなど諸国の機関から、戦争を止めるようアプローチがありました。原田はそれを逐一、日本の外務省に報告します。バチカン工作は有力な終戦工作の一つでした。なぜか。昭和天皇のバチカンへの関心はかなり高く、開戦時からバチカン王国には我々の基本的な考えを伝えてほしいと言っていたからです。その原田が送っていた電報が全部外務省の窓口で止まっていたことが、戦後になって分かりました。天皇にも外務大臣にも伝わっていなかったのです。昭和天皇は昭和50年代の記者会見で、バチカン工作について聞かれた時、あの時原田を公使ではなく大使にしておけばよかったと言いました。大使の電報なら天皇まで届いたからです。原田の気持ちを考えると、虚しさを感じて当然だと思います。

蘇峰、深井、原田たちを突き動かしたものは、やはり新島精神だったと思います。人間が自分の良心に従って真っ当に動けばどうなるのかを、身をもって示した。そういう人たちのことを私たちはきちんと記録し記憶して、同志社と天皇家との枠で考えるべきです。同志社としての役割はそれぞれの場で誰もが果たしたが、うまく歴史の形を作らなかった。しかし正しい方向に動いた先達が天皇の周辺には何人もいたことを、私たちは改めて想起すべきだと思います。

近代史を調べる中で、私は何人もの軍人に会いました。同志社の出身だと言うと、同志社で軍人になった人はいないだろうと言われました。私はここぞとばかりに、それが同志社の一番いいところだと答えます。すると、それでは時代を動かす人になれないだろうと言われる。しかし、そういう人たちは「時代」しか動かしていない。大事なのは長い単位でものを見ていき、「歴史」を動かすことです。新島は人をつくり、何世代にもわたってこの国を動かそうとしました。軍人や政治家たちの持つ、ある種の傲慢さや、ある意味では戦争責任を全部天皇に預けて知らん顔をする構図に、私たちの国の最大の誤りがあります。蘇峰も深井も原田もそれをしていない。自分の持ち場でやるべきことをやったということです。

平成の天皇の本質的な悩み

私は平成の天皇、皇后から招かれていろいろな会話をしました。「同志社というのは御所の前の大学ですよね」と天皇が言われた。見学されたことはまだないというので、ぜひ一度見てくださいと言

いました。のべ二十数時間会った中で、私には徐々に分かってきたことが一つだけあります。この人たちはけっして口にしないが、言いたいことがあるのだなと。それは何か。「私の名前で何万という人が死んだ。私はどうすればいいと思いますか」という質問です。むろん私はそう尋ねられたことはありません。

昭和天皇が悩むなら分かります。しかし昭和天皇は悩んでいません。なぜか。昭和天皇は13歳から20歳まで帝王学を受けています。「あなたの名前でいろいろなことが行われるが、それはあなた個人とは関係がない。あなたは国家の一機関であり公人だから」と徹底的に教わります。だから兵士が「天皇陛下万歳」と叫んで死んだと聞いても、それは国家の一機関のために死んだのだと思うのです。

しかし平成の天皇はそういう帝王学を受けていません。だから私の名前で何万人も死んだのだと苦しむのが、彼の本質的な悩みだと思います。だから追悼と慰霊を繰り返し、戦地を訪ねた。それで気持ちをおさめていたのだと思います。

私は天皇制の擁護者でも、否定論者でもありません。しかし天皇は一切政治に関わってはいけないし、軍の傀儡になってはいけない。天皇制は、何もしないと存在感が薄れます。天皇家は何かをしないと国民にメッセージを送れません。その視点で見ると、昭和天皇と戦争との関係も見えてきます。平成の天皇は戦争を選ばず、先帝の犯した罪を詫びていった。じっとしていたら天皇制は潰れることを、天皇の側が知っている。そこに、政治が介入してくる怖さがあるのです。平成の天皇が発したビデオメッセージには、内閣の助言と承認が暗黙のうちにあったはずです。そのルールは天皇の暴走を防ぐためでした。それが逆転し、「内閣の助言と承認を与えるから言いなさい」と言う政治家が登場してくる可能性がある。だから私たちは関心ではなく監視の目を向け、天皇制度を見つめ直す必要があります。でないと国民は利用されてしまうことを私たちは強く自覚すべきです。天皇の側も、それを望んでいると思います。

新島の原点に帰り時代を監視する

勝海舟から「いつになったらお前さんの理想とする大学ができるのか」と問われ、新島は「２００年」と答えました。私はその言葉の中に新島襄の本質を見ます。新島は岩倉使節団に加わり、田中不二麿という文部大臣と一緒にヨーロッパを回って大学を視察し、報告書をまとめました。その時に視察したソルボンヌ、ケンブリッジ、オックスフォードなどは中世の創設です。大学は一朝一夕に成るものではない。だから新島は、田中から

帝国大学をつくれと言われて断っています。そして同志社を１８７５年に創設しました。２００年までには、あと55年あります。その時、新島の言い方を援用すれば、レンガの建物ができる。私たちは一人ずつが年に一つレンガを積み、同志社を離れていく。そして２００年後、それは強固な建物になってほしい。その建物は軍人や政治家がつくったわけではないが、どのレンガも一つひとつが落ち着いて強固な意志を持っている。そう言われたい。そのために、私たちはあらゆる原点に帰ることが必要だと思います。

　新島の原点に帰るとはどういうことか。「一市民たれ」と言うことです。新島が２００年かかるといったのは、それだけの時間があれば日本中の人が一市民としての自覚を持つという意味だったのかもしれません。あるいは帝国主義的な道が崩壊し、そこからまた市民社会が芽生えてくると考えたのかもしれない。この「市民たれ」が天皇制のファシズムを防ぐ道です。「市民」をまた「臣民」にしようという勢力があることを自覚し、私たちは自分の胸の中に抱え込んだ新島襄を大きくしていく必要があると思います。

（２０１９年11月30日、今出川校地良心館教室にて）

no.30

静和館

（女子中学校・高等学校）

建物案内

現在の静和館

初代静和館　　撮影：吉川徳厚（元数学科教諭）

図書・情報センター

ステンドグラス

初代静和館（１９１２年８月29日竣工）は米国太平洋婦人伝道会の寄付によって建てられ、同志社女子部の象徴として長い間愛された校舎であった。二代目静和館建設の際、タイムカプセルが掘り起こされた。その中に納められていた初代静和館定礎式（１９１１年11月29日）の記録に、館名について次のようにある。

「……實ニ太平洋沿岸並ニ近接諸州ニ在ル多數婦人ノ義俠ナル同情ニ成レルモノナリ故ニ其厚意ヲ紀念センガ為メパシフイク（Pacific）ノ字ニ因ミ之ヲ静和館ト命名ス」

二代目静和館（１９９３年７月14日竣工）にはその多くの人々の祈りが大切に引き継がれている。初代の南入り口のアーチは南側にモニュメントとしてたたずみ、また、当時の生徒たちの手のぬくもりが残る階段手摺り部分は東階段横で在校生たちを見守っている。１～３階は高校各学年のホームルームと担任会室。広い廊下は休み時間に生徒たちのダンスの練習場となる。４階には３００席の多目的ホール。毎朝礼拝が行われる場所でもある。南側に面した廊下の窓からは京都御苑の豊かな木々を見渡すことができる。地下の約１，０００㎡の広さの図書・情報センターには、約９万冊の蔵書、閲覧席１１７席、会議室、キャレルコーナー、ブラウジングコーナー等があり、中央にはライトコートが設けられている。

２００６年、女子部創立１３０年を記念して、東側入り口の吹き抜け４階西面に、父母の会、清風クラブ、ゆかり会のご寄付によってステンドグラスが設置された。陽が西に傾くと、「地の塩」「世の光」と「書（本）」に見立てたガラスから光がこぼれる。

二代目静和館も、多くの同志社少女（おとめ）たちに愛され、四半世紀を越えた。

建物案内

no.31

成心館
（同志社大学）

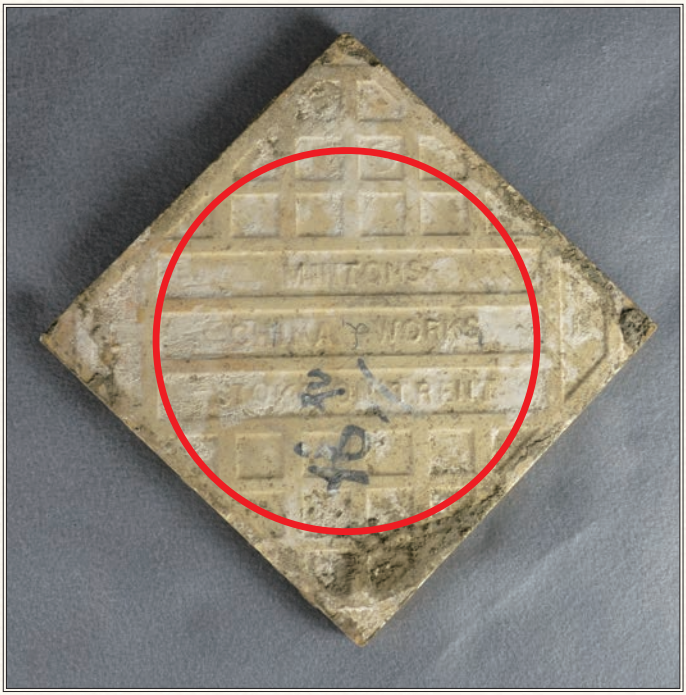
成心館は、１９８６年４月の田辺校地開校に際し、学生部（当時）および同部所管のラウンジ、会議室などを擁する福利厚生施設として、知真館等教室、図書館と体育地区の中間位置に建設されました。その後、キャンパス内事務室配置変更に伴い用途変更を重ね、２０１３年度には京田辺キャンパス教務センターが本棟に移転し、当初のラウンジ機能が減少したものの、施設館名を制定せず従来の棟名「ラウンジ棟」を用いてきました。

その後、２０１６年４月の事務室配置変更によって、現在の京田辺キャンパス教務センター（生命医科学部・研究科／スポーツ健康科学部・研究科／心理学部・研究科／グローバル・コミュニケーション学部の教務窓口、京田辺校地教務課、免許資格課程センター事務室）に加えて学生支援センター（京田辺校地学生支援課／学生生活課／スポーツ支援課／障がい学生支援室）も備わり、同棟が学生の教学支援、学生生活支援の拠点施設となったことから、施設館名として「成心館」の館名が制定されました。

館名は、新約聖書「マタイによる福音書６章10節　御国の来たらんことを。**御心の天に成るごとく**、地にも成れさせ給え。」に由来しており、日々、多くの学生に利用される拠点施設として活用されています。

— collection 11 —

ミントンズ・チャイナ・ワークス社製タイル



フレンドピースハウスは、かつて同志社病院長を務めたジョン・C・ベリー（John Cuting Berry）の教師館であった。フレンドピース奨学金制度の設立者であるハワイのセオドア・リチャーズ（Theodore Richards）とその妻であるメアリー・アサートン・リチャーズ（Mary Atherton Richards）はこの建物を1936年（昭和11）に購入し、改修後、先述の奨学金制度で同志社にやって来る日系二世の奨学生の拠点とした。同施設は、フレンドピースハウス（同志社布哇寮）と名付けられた。

その後、このハウスは2018年（平成30）に解体された。それに伴い同志社社史資料センターは、同施設の部材や調度品の一部を受け入れ、さらにその一部を第20回企画展「フレンドピースハウス―ハワイから同志社へ―」で展示した。今回紹介するミントンズ・チャイナ・ワークス社製タイルはその一つである。ハウス解体時には、9枚のタイルが同施設の1階第2会議室壁面に用いられていた。表面には鹿や牛、馬などの動物や風景が描かれており（前頁写真上）、うち1枚のタイルの裏面に「MINTONS CHINA WORKS STOKE ON TRENT」との刻印がある（前頁写真下）。この刻印から、イギリスの陶磁器製造会社であるミントンズ・チャイナ・ワークス社（Mintons China Works）の製品と判明した。ストーク＝オン＝トレント（Stoke-on-Trent）はイギリス中西部の都市であり、ミントン社の拠点である。

ミントンズ・チャイナ・ワークス社の稼働時期とタイルの製造時期については、株式会社 LIXIL INAX ライブミュージアム主任学芸員の後藤泰男氏からご教示をいただいた。氏によると、ミントン社はビジネス・パートナーや親族によっていくつかの会社にわかれており、そのうちの一つであるミントンズ・チャイナ・ワークス社は1868年に創設され、1918年までタイルを製造していた。なお、ストーク＝オン＝トレントにあり、ミントンの資料を所蔵する City Central Library からの情報提供によって、前頁写真上左のタイルのシリーズ（“Animals of the Farm”）は19世紀後半のタイルを収めた目録に掲載されており、ウィリアム・ワイズ（William Wise）のデザインであることがわかった。

同社の稼働時期とタイルの製造時期を考慮すると、9枚のタイルは1887年（明治20）頃に建てられたベリーの教師館で用いられていたと考えられる。フレンドピースハウスの前史をうかがい知ることのできるのがこれらのタイルである。

同志社社史資料センター

同志社ナウ

同志社大学ラグビー部、JICAプログラムでインドへ派遣

大学政策学部教授　川井圭司（かわいけいじ）

青年海外協力隊としてインドに派遣

２０１９年3月同志社大学と体育会ラグビー部は国際協力機構（ＪＩＣＡ）と大学連携協定を締結し、現役ラグビー部８名を２０２０年2月17日から1か月間、青年海外協力隊員としてインドに派遣することになっています。８名の部員は、インドの生徒・学生にラグビーを指導し、インドラグビーの普及と強化に貢献することが期待されています。このプログラムは２０２３年までの４年間継続される予定で毎年2月にインドに派遣されます。

この派遣に合わせて事前学習を実施し、インドの歴史、文化的背景などについて各自がプレゼンテーションを行い、皆で学びを深めているところです。先日、京田辺市長、そしてインド領事を表敬訪問し、市長、領事から日印双方にとってぜひ有意義な活動にしてほしいとの激励を受けました。

スポーツを通じた国際交流と貢献の意味

昨年11月にＪＥＮＥＳＹＳという外務省のプログラムでインドのラグビー関係者20名が日本ラグビー界の視察と人材交流を目的として来日しました。田辺グランドでの練習見学が予定されていたのですが、熱い気持ちを抑えきれなくなったインドの選手らから一緒にプレイしたいという予期せぬ嘆願があり、急遽、練習に飛び入り参加をするという一幕もありました。こうしたハプニング的な展開により両国の選手がラグビーを通じて心を通わせました。訪日のプログラムの中で、もっとも印象に残った経験だったと、喜んでいたそうです。言葉や文化の違いを超えて両者が互いに尊重し、さらに知りたいという気持ちが自然に生まれてきました。スポーツを通じた国際交流、国際貢献の意義は決して小さくない。ラグビー部員のインド派遣を前に、そのことを実感する時間となりました。インドでの彼らの貢献、そして彼ら自身の成長が大いに期待されます。

女子大学の起業家セミナーが熱い

同志社ナウ

女子大学現代社会学部教授　三宅（みやけ）えり子（こ）

女子大学では、女性アクティベーションセンターが主催して２０１６年度から「女性のための起業家セミナー」を実施している。当セミナーは女性起業家育成を目的としており、６回シリーズの初回に起業家精神、ビジネスプラン作成について学習する。同時に、最終回で発表するビジネスプラン作成のためのグループ作りも行うが、各受講生の思いを確認した上で、一般女性、卒業生、在学生、起業経験者・未経験者ができるだけバランスよく混じるような形にする。その後は、講演とグループワークがあり、講師陣には起業を成功させた女性経営者を招いて起業の体験談を話していただく。起業のきっかけや、リスクをとる勇気、積極的な行動、創意工夫、困難の克服などを話す講師の熱い思いが受講生に伝わり、受講生の起業理解と意識が深まっていく。講演後は活発な質疑応答が続く。また、グループごとに起業アイデアを練ってゆき、講師も各グループの状況に応じてアドバイスをする。このような女性起業家と受講生の出会い・協働の場の提供が、当セミナーの特徴の一つである。二つ目の特徴は、ビジネスプランコンテストを通した受講生の成長と、ビジネスプラン・プレゼン後に得られる審査員からのリアルでクオリティの高いアドバイスである。２０１９年度のビジネスプランのテーマは、社会問題解決に焦点を当てる傾向が見られた。毎年どのグループもセミナーで学んだことをもとに、グループで協力してよく準備したことがわかる聞き応えのあるプレゼンを行なっている。

当セミナーに対する受講生の満足度はきわめて高く、セミナー受講後は起業意欲の高まりもみられる。過年度のセミナー受講生で、その後、起業が軌道にのり活躍する女性も出てきている。起業家セミナーを実施している女子大学はまだ少なく、新聞記事に取り上げられるようになってきたが、学内外で当セミナーの認知度を上げ、今後さらに多くの方々に参加していただけることを願っている。

同志社ナウ

「愛」を「愛」という言葉なしに伝える

中学校・高等学校教諭　村上準（むらかみじゅん）

3年生の国語では、「万葉集」を学習します。私自身、古典を学ぶ意味の一つは、はるか昔の人々と思いを共有できる体験をもつことにあると思っています。千年以上前に生きていた人々が残した言葉に、今を生きる私たちが共感できる、なんと面白いことではありませんか。人間の心の奥底にある、ルーツを探りたいという気持ちが満たされていくような心持になります。

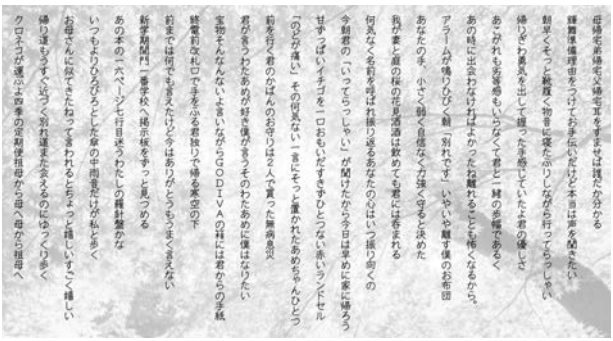
さて、万葉集には有名歌人の作品ばかりではなく、一般庶民の歌も収められています。

信濃道（しなのぢ）は
今の墾（は）り道（みち）　刈（か）りばねに
足踏（あしぶ）なむ　沓（くつ）はけ我（わ）が背（せ）
東歌（あずまうた）

現代語訳は、「信濃への道は最近開通したばかりの道です。切り株を踏んでしまうでしょう。沓をお履きなさい、あなた。」何気ない日常のワンシーンを切り取った歌ですが、この最後のフレーズだけでも想像がぐんと広がります。若い夫婦なのか？玄関で妻が放った言葉なのか？沓は妻が夜なべしてつくったものなのか？妻が夫を気遣う気持ちが手にとるように分かります。この歌の素敵なところは、「愛しているよ」「心配しているよ」という言葉を使っていないのにも関わらず、その気持ちが伝わってくるところです。心情を表す言葉を使わなくても、その心情が表せるところに言葉の深さがあり、言葉のおもしろみが感じられることを、子どもたちと共有したいと思いました。

そこで今回は、そういった言葉を考えて短歌のリズムに乗せる創作活動に取り組んでもらいました。

初めは何に対して「愛」を述べるかを考えるところから苦戦していましたが、題材が決まると試行錯誤しながら歌をつくっていました。語順を替えると読み手の印象が大きく変わってくることや、言葉の選択、もしくは漢字／ひらがな／カタカナの表記の違いで印象が堅くなったり、柔らかくなったりすることを感じてくれていたようです。お互いに添削をしたり、気に入った表現を共有したりしている様子が印象的でした。短歌を通して、言葉と向き合いながら、各々楽しんで創作活動に取り組んでいました。


母様宛原稿用紙
鎌倉保健福祉事務所
「ひとが嫌い」
「ひとが嫌い」
「ひとが嫌い」

ラオスに学校を建てよう。プロジェクトⅡ

同志社ナウ

香里中学校・高等学校教諭　水上陽一（みずかみよういち）

○これまで

今から10年程前、生徒達による「ラオスに学校を建てよう。プロジェクト」が始まりました。当時、生徒自治会が学園祭等の行事運営以外にも何か活動することはないか模索していた時、社会科の授業でのラオス学習を機に、私達には教室があって毎日普通に学習できることが当たり前と意識しているが世界にはそれこそが叶わない子供達が大勢いることを生徒達が意識づけられたのが始まりのようでした。このプロジェクトの主な活動としては、学園祭等での香里オリジナルノートやセーター、カーディガン、などのグッズ販売、そして募金活動による資金集めを中心としてきました。２０１２年にはその収益金が約２００万円にも及び、シェンクワンに小学校の校舎を建設寄贈することができました。

その後、２校目をという話になったようですが、その前に生徒達に一つの課題も生まれました。ラオスでは未だに爆弾や地雷の処理、病院等の生活環境の整備が必要とされており、むしろ学用品が不足とされているということでした。そのために２０１４年からは収益金を使ってノートや教科書、鉛筆等の学用品、サッカーボールやバトミントンセット、バレーボール等の運動用具も寄贈をしていきました。

○２０１９年度の取り組み

この２０１９年度においても入学式、オープンキャンパス学園祭等での募金、グッズの販売を中心に資金集めの活動を進めてきました。その後、収益金も約２５０万円となり昨年度より再び進められていたシェンクワンの小学校校舎増設にも乗り出すことになりました。

11月の文化祭では生徒自治会によるラオス展示も行い本校生徒をはじめ、広くラオスについて知ってもらう機会を作りました。そのために事前に京都大学のラオスからの留学生に本校に来ていただき異文化の話を聞き、展示に生かしました。文化祭開会式ではラオス領事館関係の方を招き、校舎増設資金の贈呈を行いました。現在、増設校舎の図面も出来上がりこれから本格的に建設に取り掛かることになっています。

同志社ナウ

フェンシングクラブ 全国高等学校総合体育大会入賞

女子中学・高等学校　吉田和高（よしだかずたか）・山本啓太（やまもとけいた）

２０１９年7月26日～30日にかけて、霧島市牧園アリーナ（鹿児島県）で行われた全国高等学校総合体育大会（インターハイ）において、本校フェンシングクラブの小山美優さんが個人対抗女子サーブル第8位入賞という成績を収めました。インターハイでの入賞は、本校フェンシングクラブにとって２０１１年以来、8年ぶりのことです。彼女の努力が結果として実り、互いに切磋琢磨した部員にとってもこの上ない喜びとなりました。

昨年、一昨年とインターハイへの出場が叶わなかった小山さんにとって、今回のインターハイは最初で最後のものでした。予選では、緊張からか、身体が硬く、本来の動きが出せませんでした。しかし、トーナメントに入り、頭を使い、足を使い、相手を揺さぶり、得点を重ね、徐々に調子を取り戻しました。迎えたベスト8を掛けた試合では、予選で一度敗れた選手と再び戦うことになりました。一度試合をしていることもあり、戦い方を十分に考えることができ、自分のやるべきことをしっかりと決め、自信を持って試合に入ることができました。その結果、終始リードを保ち、見事リベンジを果たすことができました。

今大会の目標は、「入賞（ベスト8）すること」でしたが、彼女はまた別の目標に向かって走り出しています。更なる高みを目指して、一歩一歩着実に力をつけ、技術だけでなく一人の人間としての成長を楽しみにしています。

現在、本校フェンシングクラブでは、全国大会の学校対抗戦において表彰台に立つことをクラブの目標に掲げています。同時に部員一人一人が個人の目標を持って日々の練習に取り組んでいます。クラブの目標と個人の目標を両立させることは難しいことですが、決して独りよがりにならず、他者と共にあることを忘れずに、これからもチームとして歩んでいきたいと思います。

私の研究

むらた　こうじ
村田 晃嗣
（大学法学部教授）

アメリカ政治と映画

私は大学院時代の4年間をアメリカ合衆国の首都ワシントンで過ごした。今でも年に数回はこの政治の町を訪問する。そして、ここ数年は必ず立ち寄る場所がいくつかある。閑静な住宅街の一角にあるフィリップス・コレクションもその一つで、印象派からモダン・アートまで幅広く堪能できる。そして、連邦議会図書館である。ここは世界最大規模の図書館で、貴重な歴史資料も数多く保管されているし、議会調査局は多数の専門家を擁して連邦議員の立法活動を補佐している。だが、私が必ず赴くのは、動画研究センター（Moving Image Research Center）という部門である。ここには多くの記録映像の他に、1万本以上の映画が保管されていて、研究目的なら事前に予約して視聴できるのである。日本はもとよりアメリカでも一般には入手できない戦前の作品も、ここで観ることができるのである。

私にとって、このセンターは貴重な研究の場である。なぜなら、私はこの数年、アメリカを中心に映画と政治の関係について研究しているからである。このセンターで私が観ることのできた作品をいくつか紹介しよう。

まず、ノーマン・タウログ監督のミュージカル喜劇『お化け大統領』（The Phantom President, 1932年）である。禁酒法とギャングの横行する大不況下で、アメリカは大統領選挙を迎える。ブレア候補こそ適任なのだが、彼にはおよそショーマンシップやセックス・アピールがない。そこでブレア候補そっくりの陽気なセールスマンが替え玉に仕立て上げられる。ところが、そうとは知らないブレアの恋人は彼の性格が陽気になったことに喜び、この替え玉を真剣に恋するようになる。「私は大統領選挙を戦うんだ。ミュージカル・コメディをやるわけではない！」、「同じことさ」――本物と替え玉の候補者の間の会話である。政治とエンターテイメントの類似性が指摘されており、この延長線上にロナルド・レーガン大統領やドナルド・トランプ大統領がいる。アイヴァン・ライトマン監督『デーヴ』（Dave, 1993年）は、この作品のリメイクである。

次に、グレゴリー・カーバ監督『獨裁

大統領』（Gabriel over the White House, 1933年）である。腐敗した大統領（1920年代の共和党の大統領の集合イメージ）が事故で一命をとりとめると、天使に乗り移られて一変し（原題は『ホワイトハウスに舞い降りた大天使ガブリエル』）、失業対策や犯罪対策、そして平和外交に、戒厳令まで発して、それこそ「独裁的」に奔走するという物語である。政治の再生がテーマであり、同年に当選したフランクリン・D・ローズヴェルト次期大統領への応援歌でもある。実際、ローズヴェルトはこの映画を大いに楽しんだという。この作品を知る者はほとんどいないが、三谷幸喜監督『記憶にございません！』（2019年）は基本的にこれのパロディである。

さらに、カーティス・バーンハート監督『彼氏はトップレディ』（Kisses for My President, 1964年）では、女性大統領とその夫の関係がコミカルに描かれている。この映画の最後では、大統領は妊娠を理由に辞任する。「これで男性優位が確認された」と夫が言う。「どういう意味？」と大統領が問う。「君は数千万人の女性によって大統領に選ばれたのに、たった一人の男性のために辞職するんだ」と夫が答える。およそフェミニズムとは無縁の作品である。

こうした作品まで分析して、アメリカ映画と政治の関係史を紡ぎ、さらには、日米比較を試みるのが、目下の私の研究課題である。もともとは、レーガン大統領の人物研究を手がけており、彼が映画俳優出身だったことから、こうした研究テーマにたどり着いたのである。ただし、人物研究にも依然として強い関心を持っており、日米関係に大きな役割を果したハワイ出身の民主党上院議員ダニエル・イノウエの研究にも着手しようとしている。

リベラル・アーツのささやかな試み

教育面では、2、3、4年次の演習（ゼミ）で、国際政治学の基礎的な文献を読ませるだけでなく、映画を題材に国際問題やアメリカの内政問題を議論するなど、専門分野を広い文脈で考察できるようにする工夫をしている。いわば、リベラル・アーツ的な試みである。この際にも、グループで議論し、グループで発表する、集団作業を経験させるようにしている。また、3年生と4年生にはゼミ論文を義務づけている。3年生で書いたことを1年かけてブラッシュアップさせるようにしているのである。特に、論点を見つけ、先行研究を調べ、どのような分析の方法を用いるのか、どのような資料やデータを使い、結論は論点に対してどこまで答えられており、何が残された課題なのかを明らかにする――こうした論文作成の作法を学んでもらおうとしている。書くことは考えることである。

さらに、3年次には、東京研修と4大学合同ゼミを実施している。前者は国会や外務省、防衛省などを見学して実務家のお話をうかがい、さらに、東京在住のゼミの卒業生の人びとと交流する機会である。後者は、京都大学、一橋大学、慶應義塾大学の国際関係論のゼミとの合同イベントで、四つの大学が順番にホストを務めることになっている。学生たちにとっては、他流試合として大きな刺激になっているようである。

寄り添う専門職たる看護婦の研究

やました　まい
山下 麻衣
（大学商学部准教授）

1、近代日本看護史研究を始めた経緯

様々な仮定をおいた上で、社会で起きている事象を読み解こうとする経済学という学問そのものに興味を持っていたこと、労働市場における女性の働き方の構造を学べること、以上の理由により、経済学部を選びました。学部時代のゼミでは労働経済学を学んでいましたが、歴史の勉強が好きであったことやゼミの先生の勧めもあり、大学院では、日本経済史・日本経営史分野に進んで研究することになりました。

以降、歴史の方法論で、女性の働き方の構造を専門的に研究することになったわけですが、日本経済史・日本経営史分野で研究されている女性労働者の中心は近代日本の工業化の進展に大きく貢献してきた紡績業や製糸業で働く女性でした。ただ、近代において、これら女性だけではなく、いわゆる「職業婦人」と呼ばれる人たちも社会で活躍してきたのに、なぜ、紡績業や製糸業で働く女性ばかりが研究対象になっているのだろうか。このような疑問を持ったことが研究対象として看護婦を選択する出発点でした。

そして修士論文の研究テーマを考えていた時期に、歴史人口学、医学史、社会史を研究している先生との交流が密にあったこと、アメリカ合衆国やイギリスで蓄積されてきた看護史研究や学際的な内容に大きな刺激を受けたことも影響して、女性が就く資格職の代表的存在であり、現在も医療や福祉の現場で活躍している看護婦を最終的には研究対象として選びました。

2、研究内容

２０１６年末に『看護婦の歴史：寄り添う専門職の誕生』（吉川弘文館）をまとめましたので、その内容を簡単にご紹介させていただきます。

日本における看護史研究の中心的な主題は、第1に看護婦の社会的地位の低さの証明、第2に看護婦の社会的地位を向上させるための方法の提示であったと考えています。しかしながら、社会的地位について議論するためには、まずは看護婦の労働事情を含めた境遇に関する史料の発掘を要します。さらにはそれら史料に基づいた看護婦の境遇に関するより正確さを追い求めた実証も不可欠です。私はこの2点にこだわって研究を続けてきました。

拙著の特徴の第1は、現在史料で検証可能な範囲で近代日本における「看護婦」と称せられた人々の特徴を、教育の場および働く場で場合分けしたことです。戦前における看護婦の教育の場は学校だけではなく診療所や病院も含まれていました。また、働く場としては戦地、派出看護婦会、病院、診療所、海外、小学校などがありました。このような場で、教育レベル及び資格取得方法が異なる「看護婦」が、千差万別な待遇で患者のために働いていたことを実証しました。第2は、看護婦の労働の内容が、どのような基準軸で、誰によって、どのように判断されてきたのかを描きだそうとしたことです。このような視点を持てた理由は、平成19年から5年間、「総合社会科学としての社会・経済における障害の研究」（学術創成研究、研究代表者：松井彰彦（東京大学大学院経済学研究科））に参加させていただき、障害を持つ人々を分析する際の方法論の1つとして「障害学」（Disability Studies）という学問を学ぶ機会を得ることができたからです。なお、このプロジェクトの成果として、２０１４年に、私が編者となって『歴史のなかの障害者』（法政大学出版局）を共に研究を続けてきた信頼し尊敬できる先生方と出版しました。この本の1つの章で、私は第二次世界大戦前における東京市尋常小学校の特別学級で学ぶ学生がどのような経緯でこの学級で学ぶことになったのか、小学校を卒業した後、どのような進路をたどったのかについて分析しました。この本は日本だけではなく、ドイツ、イギリスの事例も含まれており、障害を持った人々が社会の中でどのように生きてこられたのかについて明らかにしました。

以上が現在に至るまでの研究概要ですが、今後は、拙著でとりあげることができなかった第二次世界大戦後の看護婦の働き方の歴史を解き明かすべく、研究を進めていくつもりです。

3、ゼミ教育

ゼミでは、歴史を学ぶことで、現在の経営活動を、知識を前提とした他の人とは異なる観点から分析できる力をつけて欲しいという思いで、題材を提供しています。分析対象としての企業は、例えば、エスティ・ローダー、ＴＯＴＯ、Ｐ＆Ｇなどの美容や健康に深く関わっている企業を取り上げ、経営の歴史や製品に込められた思いについて書籍を通して勉強してきました。企業を選定するにあたっては、新たな価値観をより積極的に提案し利益を上げ続けている企業を選んでいます。

歴史学は過去に起こった出来事を題材に現在そして未来を思考する学問です。歴史の学びの最大の特徴は「始まり」と「終わり」が明確であることです。「始まり」と「終わり」を結ぶロジックを、政治、法律、経済、文化、個人の属性などから多面的かつ深く考察し答えを導き出す点におもしろさがあると思っています。学生の方は、今後社会で活躍されるにあたって、答えが1つではない難しい「問い」に対して一定の答えを導き出す場面に遭遇することになるでしょう。今後も、学生のみなさんが、習得した「知の力」を活用して、チャーミングな答えを導き出せるよう、そして、日々の生活の中に転がっている「おもしろ」を1つでも多く発見できる力をつけられるよう、工夫していきたいです。

横波超音波を使って分子レベルの変化を検出するセンサ

たかやなぎ　しんじ
髙柳　真司
（大学生命医科学部助教）

超音波の計測応用といえば

超音波は人間に聞こえないくらいの高い音のことですが、その応用というと何を思い付くでしょうか。胎児の観察など医療分野で用いられる超音波診断装置、空中や水中で障害物を検知するソナー、金属部品内部の亀裂を検査する超音波探傷器といったものが想像しやすいかと思います。これらは超音波を信号として扱い、送受信により得られた情報を利用した機器です。前述のものは主に音速と時間から得た距離情報を基にした測定です。超音波を送信して山彦のように物体から反射してきたエコー信号を受信し、音速と送受信の時間から距離を算出して物体の位置を表示するというものです。また、受信した超音波の大きさを濃淡で画像に表すと、物体の位置に加えて物体の違いについても知ることができます。これにより、例えば超音波診断装置では病変部位の診断も可能となっています。

私が「超音波を使ったセンサの研究をしています」と言うと、これらの計測をイメージする方が多いのですが、実は以降のように利用する情報が異なります。

周波数に着目すると

音速や大きさの他に音波の重要な要素として周波数があります。音の根源は物理的な振動であり、1秒間の振動回数のことを周波数と呼びます。この周波数に着目すると、前述と異なった計測をすることができます。この計測の原理を楽器のグラスハープで説明します。グラスの縁を指でこすると、指の摩擦によりグラスの形で決まる特定の周波数の音を発します（共振）。さらに、グラスに水を入れることでこの共振周波数が低くなるため、音階を微調整することができます。逆に考えれば、耳で聞く音からグラスに入れた水の量を知ることも可能です。つまり、指の摩擦とグラスの共振と耳による検出で、グラスへの水の負荷量をセンシングできたことになります。実際の計測では、指と耳を電気機器に置き換え、電気信号によって共振する素子（共振子）をセンサ部に用いることで、電気測定で完結します。

共振子を小さく薄くして薄膜で構成すると、わずかな負荷の変化でも大きく振動が変わります。これにより分子レベルの負荷が検出可能となり、ガスセンサな

どに応用できます。薄膜共振子の共振周波数は非常に高く超音波の領域となり、このような計測も超音波応用の1つに分類されます。

薄膜共振子の可能性

薄膜共振子センサは、共振子への分子の吸着や共振子表面での化学反応による分子の結合など、分子レベルの微量な負荷を検出することができます。この計測で必要なことは、負荷による共振周波数の変化を捉えることです。したがって、音波を共振子に閉じ込め、共振状態を維持できることが重要です。例えば、音叉を叩くと共振周波数で長時間振動し続けます。共鳴箱などが無ければ音もあまり外に漏れません。共振子センサでは、このように共振状態を維持するほど共振周波数の変化を測定しやすくなります。一方で共振状態の音叉を水に漬けると、音波が水中に漏れて音叉の振動が無くなってしまいます。これでは共振周波数の変化を測定できません。

ここで、音波のもう1つ重要な要素として、縦波、横波といった振動形態があります。音叉を叩いて発生する音波は、主に物体の膨張、圧縮で伝わる縦波です。これに対し、横にずるように滑らせて発生させた音波は横波になります。水にはこのようなずり振動は伝わりにくく、横波を利用すると水中への音波の漏れが抑制されます。実際にずるような衝撃を音叉に手で加えることは難しいですが、共振子では電気信号によってずり振動を起こす材料が存在します。水中で共振子センサが利用可能になると、抗原抗体反応など生化学反応の検出にもターゲットを広げることができます。さらに、薄膜を用いた半導体デバイスのように微細加工などを組み合わせることで、小型な薄膜共振子を大量に作製することも考えられます。これにより、生活習慣病の予防など家庭で使えるバイオセンサへの展開まで可能性が広がります。

基礎から応用まで

ここまで説明が長くなってしまいましたが、私は横波型薄膜共振子について材料の基礎からセンサ応用まで一貫して研究をしています。詳細を挙げると、横波音波を発生させる薄膜の形成、共振子の音波伝搬シミュレーションと設計、共振子構造の微細加工、電気測定による共振情報の取得とデータ解析、抗原抗体反応などの検出というように検討すべき内容は非常に幅広くなっています。そこでは、電気、機械を始めとして、化学、生物、情報などの知識も必要とされます。私自身は電気系学科の出身のため、化学や生物は勉強が足りない部分も多いですが、そうした知識が結びついて一連の研究に繋がっていく部分にやりがいを感じています。

現在、私の所属する生命医科学部 医情報学科では、医用機器の研究・開発に向けて前述の基礎知識を広く習得できるカリキュラムが組まれています。2019年4月に医情報学科に着任してまだ1年ですが、講義や研究を通して多分野の知識を学ぶことの重要性を学生に伝えることができればと思います。また、基礎と応用の両方に触れることで研究や開発の一連の流れを意識できるようになれば、学生自身の活躍の幅も広がると考えています。そうして学んだ学生が研究を推し進め、さらなる発展に繋がることを期待しています。

台湾文学を研究すること

唐 顥芸（とう こううん）
（大学グローバル・コミュニケーション学部准教授）

私の研究は、日本統治期の台湾における近現代詩です。

なぜ、台湾人である私が日本で台湾の詩を研究するのでしょうか。私の研究テーマを聞いた時に、おそらく多くの人は疑問に思うでしょう。

台湾は１８９５年に日本の植民地となり、およそ50年間日本の統治下にありました。日本統治期の１９２０年代に台湾の近代文学が萌芽、発展しました。そのために、日本統治期の作品は中国語や台湾語、さらに日本語で創作されました。すなわち、その時期の台湾文学を研究するために、日本語は必要不可欠な能力だといえます。

日本で台湾文学に出会った

実は、私自身もそのことを知ったのは、日本に留学してからでした。戦後、中華民国の統治にあった台湾では、中国国民党による一党専制統治を数十年間経験しました。国民党は、自身が率いる中華民国こそが中華文化の正統な継承者であると主張しているため、台湾に立脚して台湾を語り、研究することは長い間タブーでした。例えば、大学機関において台湾文学学部が初めて設立されたのは１９９７年だったことから、台湾文学が学術の一分野として認められたのはごく最近であることがうかがえるでしょう。戦後、義務教育ではほぼ抹消されていた日本統治期の台湾文学を、一般大衆が知ることはなかなか難しかったのです。

このように、台湾文学について何も知らなかった私は、日本語を勉強したいという気持ちだけで日本に留学しましたが、ある日偶然、大学の図書館で日本統治期台湾の詩人楊華が書いた一編の詩を目にしました。

人們散了後的秋千、
（人々が去った後のぶらんこに）
閒掛着一輪明月。
（のどかに掛かっている一輪の明月）

この詩は、まるで一枚の写真のような風景を見せながら、人間世界の変動と自然界の不変による対比を通じて、寂しさの感情から静かで穏やかな気持ちへと私を導いてくれました。

この詩を読んだとき、私はあまりの驚きでしばらくその場に立ち尽くしました。驚いたのは、たった2行の詩なのに、これほど豊富なイメージと感情を描くことができるだけではなく、台湾に生まれ育ったのに、異国の図書館に来るまでこの

詩とこの詩を書いた詩人について全く知らなかったということです。なんともいえない恥ずかしさと悔しさ、台湾文学のことをもっと知りたい、知ってもらいたい気持ち、さらにせっかく日本語を勉強し、日本に留学しているという絶好のチャンスをいかしたいと思い、私は日本統治期の台湾文学を研究する決意をしました。

複雑な言語問題

しかし、いざ研究をはじめると、文学どころか、歴史を含めて私は台湾のことに関してあまりにも無知であることに気づき、全てを一から勉強することになりました。まず、日本の植民地統治がどのように行われ、台湾人はそれについてどのような反応を示したのかなど、史料に沿ってみることにしました。政治面だけでなく、経済、社会、文化などを総合的にみる必要がありました。その中で、文学作品はどのように創造され、文学者たちはどのような問題に直面し、模索してきたのかを考察しました。

特に私が興味をもったのは、台湾における複雑な言語状況です。台湾には異なる言語を話す原住民族が十族以上います。そのほか、16世紀以降に中国大陸の福建と広東から移住してきた漢民族が住んでおり、それぞれが異なる言葉を話しています。日本統治になってから、日本語が学校で教えられ、公用語となりました。一方、話し言葉は異なっているけれども、書き言葉において、漢字と漢文は漢民族の住民にとってコミュニケーションや文学創作の道具として使用されていました。日本統治になってからも、漢文は統治者と被統治者の意思疎通と交流の道具でした。

1920年代には中国の白話文運動に刺激され、台湾においても平易な漢文を書くことが提唱され、中国の口語文である白話文を用いて文学を創作することも試みられました。一方、台湾人の話し言葉（主に、当時から台湾語と呼ばれる福建南部からの移民が使用する言葉を指します）を用いて、文学を創作すべきだという主張も見られました。さらに、日本語教育の進行に伴い、日本語ができる新しい世代が出現したため、日本語を用いて詩や小説などを書く人も現れました。

重層的な影響下にある台湾文学

しかしながら、文学創作を行う際に、中国の白話文か、台湾語の口語文である台湾話文か、あるいは日本語を使用することは、単純に言葉を選択するという問題ではありませんでした。世代や教育経験の違い、伝えたい内容、想定する読者、文学作品を通して達成したい目標、さらに言葉に対する好悪の感情など、複雑な理由が絡んでいます。

一方、言うまでもなく、ある言語を使用することは、その言語で書かれ、翻訳された文学作品や文学理論などの影響を受けることになります。このように、複雑な言語状況下で発展した日本統治期の台湾文学は、複数の言語とその文化による重層的な影響下にありました。したがって、研究する際には、当時の中国文学、日本文学、さらに中国語か日本語に翻訳された西洋文学、文学理論などについても理解する必要があるのです。

以上のように台湾文学を研究することで培った思考や視点から、私は授業において、中国語圏の文学作品を通して、作品が創作された背景や社会状況、文化などを、学生たちと一緒に考えることにしています。これからも日本で出会った台湾文学の世界で、研究・教育に邁進したいと思っています。

より良い看護を提供していくために

光木 幸子（みつき さちこ）
（女子大学看護学部准教授）

安心して食事をとれる機会の提供

私が臨床現場で看護を実践していたころ、厳しいカロリー制限の食事や運動を実践される方がいる一方で、コントロールがうまくいかず入退院を繰り返す方、合併症を併発する方、「地道に頑張っているつもりだけれどもつい食べ過ぎてしまった」といった言葉を多く聞いた。

１９９０年代に糖尿病療養に対する考え方が大きく変化した。今までの医師主導の指示的な教育から、患者自らが教育された内容を選択し実行することへの変化である。療養を支援するには、どのような思いを抱きながらどのように選択し実行されているかを知る必要があると考え、調査した。食事や運動を実行しているが「いつもひもじい」「家族のために頑張っている」「糖尿病になったのは自分のせい」の思いを抱え、頑張っているけれどもなかなかうまくいかない葛藤の日々を過ごしていることを知った。そこで、月１回でも食事量やバランスを気にせず安心して食べる機会、自分の食事療法を胃で確認できる機会を提供したいと考え、お弁当付き（管理栄養士により献立された）糖尿病教室を開始した。現在も京都府立医科大学附属病院で月１回行われている。

がんと糖尿病を併せ持つ患者への支援とは？

がん患者は、治療の進歩により、長期生存が可能となり、症状や薬の管理、感染予防など自分の療養を自ら行うことが求められる。また２人に１人ががんに６～７人に１人が糖尿病になる時代、がんと糖尿病を併せ持つ患者の急増が予測されるが、今のところは、医療者の専門性が異なるため、患者自身がそれぞれの専門家に意見を聞き自分の療養を手探りで作り出している。「病気を併せ持つ患者に対して糖尿病の専門性をもつ看護師とがん看護の専門性をもつ看護師がどのような介入をすればよいか」について、現在は大阪府・奈良県・京都府の慢性看護・がん看護の教員、慢性疾患専門看護師、がん看護専門看護師及び認定看護師で研究会を作り、看護師への研修会も開催している。

新たな生活習慣を作り出すことを支援する

授業では、慢性疾患とともに生活して

いる人が自分の療養を自分で調整しながら幸せに生ききることを支援する看護の方法について教授している。

今まで健康であった人が、病気を発症し、自分の生活に療養を組み入れるとき、症状管理等の新たな行動の習得と今までの生活習慣の変更（つまり行動変容）の2つが求められる。

「生活習慣とはなにか？」20年前から抱いている疑問であるが、今のところ、私の解釈は、「その人が時間経過とともに自己の快楽を集約して出来上がった価値観を反映している生活」ととらえている。そのため生活習慣を変更させることは容易なことではない。行動変容の支援を看護師が行う場合、まずその人の生活で療養を阻害している問題が何かを本人が気づけるように関わり、次にそれを改善するために変更できそうな内容を自ら考えられるように関わり、その内容を目標として設定する。次の受診時には、その目標が達成できたかどうかを確認し、高すぎた目標であれば目標を容易なものに変更する。目標を達成していれば新たな目標を設定することを繰り返し、成功体験を積み重ねながら少しずつ自分の療養に合った生活習慣へと修正していく。

保健師助産師看護師法のなかで、看護師は、「診療の補助」と「療養の世話」の2つの職務を行うことが明記されている。その中で「療養の世話」は看護師独自の業務であり、その1つに患者自身が療養行動を自分の生活に組み入れることへの関わりがある。

慢性疾患の療養行動の内容は、病気により異なるが、それを支援するプロセスは同じである。授業では、これらのプロセスへの関わり方を実践的に学修できるように工夫している。1回目の授業で生活習慣病やセルフモニタリングの重要性を講義し、学生に1週間自分の生活習慣（食事・排便状況・睡眠・気分）と自分の身体のサイン（体重・血圧・脈拍・呼吸数・経皮的酸素飽和度）を記録してもらうよう依頼する。この目的は、3つあり、1．学生に自分自身の生活習慣を理解してもらうこと、2．毎日自分の状態をモニタリングすることを体験し患者理解を深めること、3．友人同士で学内にあるプラクティカルサポートセンター（看護技術をトレーニングできる施設）を活用し血圧測定とサチュレーションモニターを使用する、つまりスキルトレーニングをすることである。1週間後にある2回目の授業で学生は、記入したセルフモニタリング表を持参する。この授業では2〜3人でペアを作り、看護師役は相手の1週間の記録内容から、食事・運動・排泄・睡眠などの生活習慣について話し合いながら問題を引き出すよう関わる。「毎日夜寝るのが1時を過ぎている」「毎日パンと麺類ばかり食べている」など改めて自分の生活を見るとすぐに問題に気づく。そこで一緒に話し合いながら、次の授業までの1週間に到達できそうな目標を2〜3つ決める。3回目の授業までにもう一度セルフモニタリング表を記入し、目標が到達されたかどうかを一緒に話し合う。これらのことを通して療養を生活に組み入れ新たな生活習慣を作り出す関わりを学んでいる。今後はこれらのスキルが身についているかを評価し、教育教材を確立する研究へと発展させていきたいと考えている。「病気になっても自分のペースでうまく調整しながら幸せに暮らしていけるよう支援する」ことを教育し、研究することで、少しでも社会に貢献できれば幸いである。

朝の５分間、新聞記事が子どもを変える

にしむら　こうじ
西村 孝次
（国際学院初等部教諭）

1．今朝のニュースは何かな

「おはようございます。先生に提出するものはありませんか。１時間目の授業の準備はできていますか。さて、今朝のニュースは…」朝の会のほんの５分間、１日の連絡を伝えた後に新聞記事を紹介している。国際・環境・事件・テクノロジー・スポーツ、幅広いジャンルから毎朝一つ。「先生、今日のニュースは何？」、登校してきた子ども達が私の机上にある新聞を広げて問いかける。教室と社会を繋ぐ小さな窓口、子ども達はこの時間がちょっとお気に入りである。

2．ＮＩＥについて

学校教育に新聞を取り入れるＮＩＥ（Newspaper in Education）は、１９３０年代にアメリカで始まり、日本では１９８５年に提唱された。社会性豊かな青少年の育成、活字文化と民主主義社会の発展が目的に掲げられている。研究会も作られて久しく、既に十分に効果的な指導法とその実践がある。それらは要約などの読解力をつける国語科の指導中心に行われたり、入試対策に取り入れられたりすることが多い。私の場合は新聞に親しみながら家族や友達との対話を深め、コミュニケーション力をつけることを意図としている。

3．子どもと子ども、子どもと保護者、学校と保護者を繋ぐ新聞

時事問題だけでなく投稿や討論、故人の思想や「なぜ生きるのか。」といった哲学的な疑問にも新聞はヒントを与えてくれる。日々進歩する自動車の安全技術について「もし自動運転で事故を起こしたら、責任は誰にあるのか法的整備が必要である。」という記事を紹介した後、「この記事の感想を隣の友達とシェアしてみて。」と問いかけてみる。「運転席の人、自動車メーカー、車の所有者かな？」小学１年生から探究心を培っているＤＩＡ（同志社国際学院）の子ども達は、活発に意見を出し合う。自由闊達な学級の雰囲気は、いつ投げかけられるか分からない私の質問からも生まれていく。

また、常に新しい情報は魅力的である。ユビキタス社会の進歩によりインターネットで閲覧できる情報の速さと量は言うまでもないが、一覧で見られる利便性や信頼度の高さは新聞に分がある。

初めての懇談会で「子どもが５年生になってから、最近学校のことを何も話さないんです。」と悩まれている保護者の方に、「『今日は先生、どんな記事を読んでくれたの？』とお家で聞いてあげてください。」と話している。確かに高学年になると、友達の話や勉強のことを親に

話したがる子は自然と少なくなる。その中で、新聞記事の話題は親子の会話のネタ、話すきっかけになる。ＬＧＢＴ（性的少数者）やＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）といったワードが夕食の席に出ようものなら、親としても子どもの成長を感じ、嬉しいことではなかろうか。

もちろん、どの記事を選ぶのかはそれなりに吟味が必要である。贔屓のチームのスポーツニュースや最新携帯電話の記事は確かにキャッチーではあるが、それぱかりでは上述の点であまりそぐわない。記事の内容は、子ども達に何を大切にしてほしいか、どんな子ども達に育ってほしいか、という教師の間接的なメッセージであり、学級経営にも繋がるからである。

4．現在社会と繋がる学び

これまでどんな記事を紹介してきたか、という具体例をもう少しあげたい。インドネシアの首都がジャカルタからボルネオ島に遷都する案があるという記事を聞いた子は、「今、お父さんが出張行ってる国や。電話で首都が変わるかもしれないって教えてあげるわ。」と感想を持った。イランの女性が宗教上の理由でサッカーの試合に男装して行ったため、警察に捕まってしまい、その後焼身自殺を図ったという記事には、女の子だけでなく男の子も「日本では当たり前なのに。」と不満をもらした。またゲストティーチャーとして招いた芥川賞作家の平野啓一郎氏の「分人」という考え方について学んだ子ども達は、新聞で平野氏のいじめについての記事を読んで、「私たちに話してくれたことと同じ事が書いてある。」と驚いていた。また面白いことに、国語の教科書の説明文「千年の釘にいどむ」の読み取りを始めようと思うと、タイミングよく「１３００年の歴史を持つ奈良薬師寺の東塔改修」の記事が、社会で環境問題を扱っているときには、「東京湾のイワシから大量マイクロプラスチックが発見」との見出しが目に留まることがある。そして、クラスの中で言葉の乱れがあったりすると、「いじめられた側に立って」という投稿欄を見つけたりすることがある。きっとこの不思議なタイミングは、偶然ではなく、子ども達が学んでいることは現在社会と繋がっていることを現わしているのではないかと思う。

最近では、「お茶の水女子大が２０２０年度からトランスジェンダーを受け入れる。」という記事を紹介した。早速「先生、同志社女子大はどうするのですか？」という質問が出た。今後同志社で学ぶ彼らが、この議論を展開していくことを期待したい。

5．情報機器の活用

プロジェクターやタブレット端末などの機器は新聞記事を紹介するのに大変重宝する。以前はＢ４の用紙に切り抜きを貼って全員に印刷して配っていたのが、大写しできたり、一人一人の端末に数秒で転送できたりするようになったので、教材作りは通勤途中でも手軽にできるようになった。子ども達はクラウドにあげられた記事を自身のスピードで読み、疑問を持ち、感想を話す。ＩＣＴがそれほど得意でない私でも、これにはとても助かっている。

6．これから

まるで本屋の教育書コーナーに並んでいそうな表題をつけて、少し風呂敷を広げすぎたような気もするが、新聞を教育に活用することの発展性と子ども達への効果は抜群である。もちろん、私の拙い実践だけでは説明できるものではないが、ＮＩＥを未来志向的に捉えるという意味でこのまま原稿に載せることにした。

小学校に勤めて早25年が過ぎた。積み重ねていくことと、柔軟性を持つことのバランスを考えつつ、これからも高いアンテナを張って、子ども達の学びを深める実践を重ねていきたい。

同志社クローズ・アップ

「法曹コース」の設置と法学部の将来

―良心を手腕に運用できる法曹の育成のために

大学法学部教授　川嶋四郎（かわしましろう）

一　「法曹コース」の設置に向けて

最近の法学部に関する最大のトピックは、いわゆる「法曹コース」の設置をめぐる動きである。これは、弁護士・裁判官・検察官という法曹を養成するための専門職大学院である法科大学院制度の危機的な現状を背景に、法学部と法科大学院を有機的につなぐプロセス、つまり法曹養成過程の連携の実質化を意図した動向である。

医師を養成する医学部の場合は、伝統的に6年一貫教育が行われてきたが、法曹養成については、これまで必ずしも成功した一貫教育は行われてこなかった。現在のところ、3年または2年の法科大学院、司法試験および1年の司法研修所における教育を経て、法曹が育成されているが、このシステムが必ずしも十分に機能していないのが現状である。そこで、この15年間の法曹養成に関する「希望と危機と再生の過程」を概観し、現時点における「法曹コース」の設置に向けた本学法学部の取組みを紹介したい。

二　法曹養成過程への「希望」

21世紀の日本を支える司法制度をよりよいものにするため、2001年に『司法制度改革審議会意見書』が公表された。それは、制度を支える法曹の養成制度についても言及し、新世紀の司法を担うにふさわしい質の法曹を多数確保するために、従来の司法試験という「点」による選抜ではなく、法学教育・司法試験・司法修習を有機的に連携させた「プロセス」としての法曹養成制度を整備することとした。その中核に、法曹養成に特化した専門職大学院として設けられたのが「法科大学院」であった。そこでは充実した教育が行われ、かつ厳格な成績評価や修了認定が行われることを前提に、修了者のうちの7、8割が司法試験に合格でき、先進諸国の中では人口あたりの法曹数が格段に少なかった日本で、2010年頃には司法試験合格者数を年間3000人にまで増加させることが目標とされた。アメリカのロースクール・システムをモデルにしており、法学教育論等も活発に議論された（拙著『アメリカ・ロースクール教育論考』〔弘文堂・2009年〕等を参照）。いわば、希望に満ち溢れた旅立ちの時代であった。

三　法曹養成過程の「危機」

しかし、危機は程なくして訪れた。2004年には7万人以上であった法科大学院の志願者数が、2018年には8000人程度に激減し、しかも、最大74校存在した法科大学院も、現在では半数程度に減少し、法科大学院自体も大幅な定員の減少

を余儀なくさせられた。法科大学院の標準修業年限は3年であるが、この法学未修課程に入学しても半数は司法試験に合格できず、公平性・開放性・多様性という設立当初の理念の実現は困難になっているのが現状である。2015年には司法試験合格者数の見直しも行われ、1500人程度に削減された。司法試験の合格率は、7、8割に届いたことはなく、近時は2、3割程度の合格者数で推移している。最高裁判所司法研修所の修習期間が無給とされた時期もあり、また、マスコミ等が弁護士の就職難を大々的に報じ、経済的な困窮のイメージさえ広く植え付けられることとなった（現在では状況が改善している）。医師の養成と比較した場合に、近時の医学部には廃止や募集停止などはなく、医師国家試験の合格率は9割程度である。

このような状況で、司法試験予備試験という、法科大学院を修了することなく司法試験の受験資格が得られる試験への人気は年々歳々増加した。もともとは、法科大学院に通うことができない人々にも司法試験を受験できる道を開く制度であったが、大学生でも法科大学院在学生でも受験することができることから、法科大学院教育のいわばバイパスとして利用されている。法曹養成の「エリート・コース」として定着しているのである。つまり、法科大学院を経ない若い裁判官・検察官・弁護士も誕生することになった。これは、希望の法科大学院が創設された当初から当然に予想された危機の現実化でもある。

四　法曹養成過程の「再生」？

しかし、物語はこれで終わってはならない。プロセスを通じたより良き法曹の育成は、かけがえのない人生を懸命に生きる人々にとって不可欠であり、法の支配が全国に行き渡り司法へのアクセスが充実することは、国の豊かさの源である。国際的にも活躍できる法曹の育成も不可避である。法に関する高度の専門的知見や技能を涵養し、温かい眼差しと高い倫理観・正義感をもった法曹を育成する使命を実現するために、法科大学院は着実な法曹養成を続けなければならない（予備試験は、法曹倫理を基礎とした実務法律科目や司法試験科目を除く多様な科目を学ばない法エリートを生み出す契機となっている）。

「法曹コース」の設置は、『意見書』ではその位置づけが十分ではなかった法学部と法科大学院を有機的に結合する試みである。学部に「法曹コース」を設置する大学と法科大学院（を設置する大学）との間で「法曹養成連携協定」を締結し、法曹志望の学生が、早い時期から法科大学院を見据えた教育を受ける機会を得ることが可能になった。学部3年・法科大学院2年（既修課程）の5年間の新しい有機的かつ連携的な法曹養成プロセスである。これは、司法試験の法科大学院在学中受験を認める新制度ともあいまって、従来、大学入学から法科大学院を経て通例7年半以上かけて司法研修所に入所しなければ法曹になれない現状を改革し、5年で入所でき計6年で法曹になることができる道を開くものである。法科大学院修了から司法研修所入所までのいわゆるギャップ・タームの解消も期待される。

五　本学法学部の取組みと将来

全国を見渡した場合に、設置しない法学部も多くみられる中で、本学法学部（高杉法学部長）は、「法曹コース検討委員会」（瀬領委員長）において鋭意検討を加え、新年度から「法曹コース」を創設する決定を行った。文部科学省の基本的な方針が必ずしも明確ではなかったにもかかわらず、教務主任梶山教授の八面六臂の活躍や多くの教職員の方々のご尽力もあり、すでに2つの法科大学院（同志社大・神戸大）と協定の締結にまで漕ぎ着けている。相変わらず予備試験制度は残されたままであるが、私たちは、「法曹コース」において基本法律科目を基軸とした魅力的な法学教育を行いたい。それは、法曹養成制度の「再生」に向けた取組みであり、法学部では、底辺に向かう志を忘れることなく良心を手腕に運用できる法曹の育成を目指したい。

同志社クローズ・アップ

人文科学研究所75周年記念シンポジウム「同志社大学人文研の過去・現在・未来」

大学人文科学研究所助教　林（はやし）　葉子（ようこ）

同志社大学人文科学研究所（人文研）は創立75周年を記念して、２０１９年12月21日（土）にシンポジウムを開催しました。現在、当研究所の共同研究は、17の部門研究会に属する約２７０名の学内外の研究員によって支えられています。特に重点を置く分野は「キリスト教社会問題研究」「京都を始めとする近現代日本の地域研究」「現代社会研究」であり、本シンポジウムは、それら三分野の講演を中心に行いました。会場には、１１０名の方にご来場いただきました。

高久嶺之介 同志社大学名誉教授の講演

人文研の役割

開会のご挨拶の中で、八田英二総長・理事長、松岡敬大学長から、それぞれ、人文研が人文社会科学系の共同研究で果たしてきた役割の意義や、今後一層研究成果の還元と他機関との共同・連携に取り組むことへの期待が述べられました。

継承されてきた学際的共同研究重視の方針

小山隆・人文科学研究所長は、人文研の共同研究重視の方針は人文研の前身である同志社大学研究所の設立時（１９４４年）から貫かれ、初代所長も共同研究を重視していたことを紹介されました。１９５２年には「複数の分野に跨がる人たちの総合的研究」として学際的共同研究が構想されたこと、そして同年に人文研が資料収集部門を設置したことも、現在の方針に繋がっていると指摘されました。そのように初期の頃に形づくられた人文研の骨格が現在まで受け継がれてきたことが確認され、今後の発展的継承の抱負が語られました。

第一部　キリスト教社会問題研究

本井康博・元同志社大学神学部教授の講演「ＣＳ（キリスト教社会問題研究）と共に32年」ではＣＳの歩みが概観され、『キリスト教社会問題研究』が同志社で唯一 EBSCOhost の人文系データベースに選ばれるなど高い外部評価を得ていることを

踏まえて今後いっそう「人文研の顔」「同志社の顔」としての研究を牽引していくようにと激励されました。その講演を受けて吉田亮・社会学部教授は、CSの特殊性は「同志社プロテスタンティズムが近代日本の形成にどういう関与をしてきたか」を実証主義的方法によって解明してきたことであり、今後の最重要課題はトランスナショナリズムに関する研究を発展させることだとコメントされました。

第二部　京都を始めとする近現代日本の地域研究

高久嶺之介・同志社大学名誉教授の講演「近畿地域史研究の流れ」では、研究対象の地域から借りた古文書をもとに進められた人文研の地域研究の諸相について、特に高久先生が関わってこられた京都地場産業、近畿の農村や自治体、近代地方名望家の研究等が紹介されました。それを受けて小林丈広・文学部教授は、高久先生のご研究は地域の特徴を地域に寄り添って考えるもので、一次資料を用いた実証的な近現代史研究の先駆けであったと指摘されました。また、そのような一次資料の調査収集・整理を踏まえた研究スタイルが今後も人文研で継承されることへの期待が表明されました。

第三部　現代社会研究

松久玲子・同志社大学グローバルスタディーズ研究科教授の講演「地域研究拠点としての部門研究―同志社大学のラテンアメリカ研究―」では、人文研に経済的基盤を与えられたことにより、それまで学内で注目されることがほとんどなかったラテンアメリカ地域研究の継続的実施と学内外の研究ネットワーク形成への取り組みが可能になったことがエピソードを交えて紹介されました。また、その共同研究が科研費獲得へと繋がり、同志社大学「ラテンアメリカ研究センター」発足へ結びついたことを一例として、人文研が学内での研究分野拡大に果たした役割の大きさを指摘されました。その講演を受けて、浅倉寛子・メキシコ社会人類学高等研究所教授からは、人文研の支援が日本とラテンアメリカ諸国の研究者の国際交流を支えたことが強調されました。

最後に、小山所長から、人文研将来計画検討委員会による報告を元に、今後いっそう人文研が「学際」に焦点を当てていくことや重点的資料収集を行うこと等、将来計画についての説明がありました。本シンポジウムで配布された資料は、人文研ホームページ内の特設ページ（https://jinbun.doshisha.ac.jp/meeting/symposium.html）で、順次、公開されます。是非ご覧ください。

同志社クローズ・アップ

表象文化フェスティバル―ふみだすチカラ―
同志社女子大学表象文化学部設立10周年記念事業

女子大学表象文化学部長　丸山敬介（まるやまけいすけ）

参加型フェスティバルの構想と「ふみだすチカラ」

二〇一九年度は、英語英文学科（英文）と日本語日本文学科（日学）が、京田辺校地の学芸学部から今出川校地に分離移転し、「表象文化学部」を設立して十周年にあたる。また、英文の新制七十周年、日学の開設三十周年の年でもある。節目の年の記念事業として、一過性の講演会だけに終わらない何かをしたい、という思いから、英文と日学の協働（コラボレーション）による「表象文化フェスティバル―ふみだすチカラ―」が企画された。柱となる外部ゲスト三名――俳優のキムラ緑子氏（英文学科卒業生）・映画監督の周防正行氏・ドキュメンタリー映画監督の山崎エマ氏――のトークイベントを十月・十一月・十二月に置き、その間を、教職員や学生の手による様々な企画で埋めていこうという、長期にわたる参加型文化フェスティバルの構想である。

「ふみだすチカラ」という統一テーマには次のような意味をこめた。

・人間がその長い歴史の中で積み重ねてきた、文学や演劇をはじめとする多様な表象文化は、現代を生きる我々の人生に様々な意味での「ふみだすチカラ」を与えてくれる。

・表象文化を専門的に学ぶことは、表象文化の持つ「ふみだすチカラ」を社会に向けて発信していく力を得ることでもある。

このテーマは、結果的に、二か月半にわたるイベントを縦糸でつなぐキーワードとなった。クロージングイベントでは、期間中、参加者一人一人に書いてもらった「ふみだしたこと・ふみだしたいこと」ボードのスライドショーを上映したのだが、その一つ一つの笑顔と言葉が力強さにあふれていたことが印象に残っている。

多様な公募企画

テーマが決まり、ゲストによるトークイベントの計画が順調に進む中、実行委員には一抹の不安があった。「参加型文化フェス」とはいうものの、果たして自主的な企画の応募などあるのだろうかという懸念である。しかし蓋をあけてみればその心配は杞憂だった。展示、ワークショップ、パフォーマンスなど、

期間中も応募は増え続け、最終的に四十余りの企画が十月二日から十二月十七日までの間に実行されたのだった。紙幅の関係で一例をタイトルのみ紹介する。詳細はHP「イベント」「イベントアーカイブス」のページ参照（https://www.dwc.doshisha.ac.jp/faculty_dep_info/representation/10th_anniversary/）。

〈展示〉

「森見登美彦×京都マップ」「イラスト展示かれんこてん」「POPでビブリオバトル」「日本語教科書展示」「SPのあゆみ」「映画や本からちょっとだけ知ろう！台湾」「宝塚歌劇で舞台化された小説展示」等。

〈ワークショップ〉

「満月句会」「俳句の世界を映像化してみるワークショップ」「The Do's and Don'ts of the Tea Ceremony」等。

〈プレゼンテーション・パフォーマンス〉

「怪談と虚構（フィクション）」「プロセス演劇―〇〇（まるまる）で遊ぶ」「推し愛♡グランプリ」「My 留学生活 in the US」「フィクションは欺かない―文豪の名場面を読む・観る・聴く」「GURLS' RAINBOW EMPOWERMENT―性の多様性・フツーってなんだろう」「英語劇：ウィンダミア卿婦人の扇」等。

英文・日学の協働（コラボレーション）

右の企画には、英文・日学両学科の学生や教員が企画段階から共に関わったものがいくつかある。また、企画自体は一方の学科のものであっても、両学科から隔てなく参加し、聴衆となった。日頃あまり交わることのない隣接学科の学生との出会いは双方の学生に大きな刺激をもたらした。何よりも教員間において、イベントの感想や表象文化について、学科を越えて語り合う姿が見られたのは本事業の大きな成果であると言える。真のリベラルアーツ教育は、こういった教員相互の対話の中から生まれるものであろう。また、本事業の成功は学部事務室の全面的なサポートなしにはあり得なかった。日常の業務を滞りなく進めつつ長期にわたりこれだけの数のイベントをサポートすることは大変だったはずだが、学部学科の活性化を共に喜びながら、学生・教員・事務局が共同でこの行事を作り上げていけたことを幸せに感じ、次の十年へとふみだすチカラを実感している。

周防正行映画監督トークイベント
（栄光館にて）

怪談と虚構トークセッション

クロージングイベントの一場面

同志社クローズ・アップ

英語で平和を学ぶプロジェクト
～Doshisha Peace Award 2019～

中学校教諭　皆川祥吾（みながわしょうご）

本校英語授業のカリキュラムはどの学年においても“Think Act Learn in English”をスローガンに構成されており、聞く力・話す力・読む力・書く力という所謂「英語４技能」をバランスよく育成することを目指している。その中で本校３年生は、各学期にテーマを設定し、そのテーマの元、扱う教材を厳選し、授業で扱うことで、共通の話題で使われる語彙や文法をオーバーラップさせ、「テーマ」と「そのテーマで使うことの多い語彙・文法」をなるべくリンクさせることを目指した。また、学期の後半に学びのまとめをアウトプットする活動として、そのテーマにリンクし、かつリアルな社会とつながりを持った上で実施できるプレゼンテーションや映像作りなどのプロジェクトを設定している。“Doshisha Peace Award 2019”は２０１９年度２学期（９月～12月）における、最終プロジェクトだった。

２０１９年度２学期における同志社中学校３年生の英語授業におけるテーマは“Peace（平和）”であった。これは、英語授業で使用している教科書 New Crown（三省堂）において、Atomic Bomb（原子爆弾）による被害について学ぶトピックや、アメリカにおける黒人差別の改善を訴える Martin Luther King Jr. の有名な演説“I have a Dream”を元にしたトピックなど、「平和とは何か」について考えるきっかけとなる話題があったことに起因している。また、本校における人権週間が毎年11月にあることや、毎年12月に行われる３年生修学旅行の１つが沖縄戦の戦跡を巡る平和学習であることも、“Peace”がこの時期のテーマになった理由である。

“Peace”というテーマの元、最終プロジェクトとして“Doshisha Peace Award 2019”の構想を練り上げ、実現するまでに至ることができたのは、独立行政法人ＪＩＣＡ関西京都デスクの国際協力推進員である長谷川広一氏との出会いによるところが大きい。長谷川氏に連絡を取り、企画構想を相談したところ、京都市付近で「平和に向けた活動」をしている団体をご紹介いただくことができた。それがこのプロジェクトで関わることになった団体、IKEUCHI ORGANIC 株式会社、株式会社 MOTHERHOUSE、DariK 株式会社、公益社団法人 日本国際民間協力会ＮＩＣＣＯ、認定ＮＰＯ法人 テラ・ルネッサンス、そしてシリア支援団体 Piece of Syria である。これらの団体は、地球環境を考えた製品作りや、発展途上国の開発支援、及び人道支援をしていて、各団体独自の活動を通して、地球／人の「平和」に貢献している。

このプロジェクトにおいて、３年生の生徒たちには平和活動をしている前述の団体の広報活動の一環として「ＰＲ動画」を

作ることを掲示した。彼らの「平和活動」をより多くの人に知ってもらうため、世界に発信する動画として「英語字幕をつけた動画作成」をプロジェクトの目的とした。“Doshisha Peace Award 2019”は、それらのPR動画を世間に向けて発信する場として設定した。

このプロジェクトは主に2019年度11月に行った。まず、各クラスにおいて5、6人のグループを設定し、その中の1人に特別授業（11月5日実施）に参加してもらった。この特別授業では、JICA関西 長谷川氏及び、本プロジェクト協力団体NICCOマネージャー大豊盛重氏に本校に来ていただき、協力団体の概要や活動内容などについて講演をしていただいた。この特別授業で得た情報を元に各グループにおいて、広報協力したい団体を選定してもらい、各団体のホームページを調べたり、各団体の事務所に行ったり、各団体の代表にインタビューしたりする中で、情報を整理し、一人一台所持している iPad 上のアプリ Clips と iMovie を使って、英語字幕とともに各団体のPR動画を作成した。作成したPR動画は11月末、各クラスにて放映し、一次審査という形で各クラス代表グループを1つまたは2つ選抜し、これらのグループを“Doshisha Peace Award 2019”への出場グループとした。“Doshisha Peace Award 2019”へは合計14グループが出品することとなり、“Doshisha Peace Award 2019”当日となる12月13日（金）では、この中で最優秀作品を決定することとなった。

“Doshisha Peace Award 2019”はこのように、平和活動をしている団体の英語字幕付きPR動画の最優秀作品を決め、表彰するという機会として設定しただけでなく、その他の生徒や保護者、教育関係者、報道関係者、外国人留学生、行政の方などに見ていただき、各団体の「平和活動」を発信する場として設定した。当日は全体で約80名の参加者に来ていただき、生徒たちの作成した優秀PR動画を見てもらい、彼らの「平和活動」を伝えることができた。また、2019年12月17日京都新聞朝刊（小林沙恵記者）において本プロジェクトをご紹介いただき、さらに協力団体の広報活動に関わることができた。

この“Doshisha Peace Award 2019”に至るまでの一連のプロジェクトは、今年度初めて開催し、11月の1ヶ月という短いスパンで作品を仕上げたこともあり、最終の Award に出品した作品についても、字幕の間違いがあったり、映像の未完成部分があったりして、作品のクオリティはまだ改善の余地があった。各団体の動画を作成する時間、動画を何度か修正する時間、各団体によるファクトチェックの時間などを考慮すると、あと1ヶ月ほどの時間があればより充実した Award になったように思う。ただ、このプロジェクトを行った中で、生徒たちが「平和活動」を身近に感じてくれ、社会と学校の学びをリンクさせてくれたと確信している。今後は「英語」という枠組みだけにとらわれず、他教科と協力しながら、よりリアルな社会との接点を持ったプロジェクトを実施していきたい。

最優秀賞受賞式の様子

プロジェクト説明の様子

同志社
クローズ・
アップ

香里中学・高校における特別支援の取り組み

香里中学・高等学校教諭　特別支援コーディネーター　竹田幸平（たけだこうへい）

特別支援の必要性

教室に入れない生徒、学校に来られない生徒の存在は今に始まったわけではなく過去からも多く存在していました。過去において、そういった生徒たちは『さぼっている』『なまけもの』『わがまま』といったレッテルを貼られ、特にかまわれずに置き去りにされていましたし、関心のある大人も「頑張れ」「しっかりしろ」といった、通り一遍の声かけしかしてこなかったように思います。最近になり、そういった生徒たちにも目が向けられるようになってきました。保健室の片隅で座っているだけとか、図書館で自習させているだけといった対応から、積極的なアプローチや過ごしやすい環境の整備が必要となっています。また、発達障害の特性を持つ生徒や体に障害を持つ生徒に対しても、彼らの特性を周囲が理解し、お互いがお互いの特性を理解した上で、きめ細やかな対応ができる態勢を作っていかなければならないと思います。

本校の現状

本校においては、保健室で養護教諭が教室に入りにくい生徒の話を聴くといった状況から、１９９５年にスクールカウンセラーを初めて導入し、生徒、保護者のケアにあたる一方、教員の側もこういった生徒への対応についての勉強が始まり、カウンセラーや外部講師による研修会を実施してきました。２０１８年にはカウンセラー４人体制で毎日誰かが常駐している形となり、生徒、保護者、教員に対するカウンセリングを充実させ、２０１９年には特別支援コーディネーターを校務分掌として設置し、特別支援教育の充実に取り組んでいます。

学習室

本校の取り組み

年々増える不登校傾向の生徒、保健室登校を希望する生徒、カウンセラーへの相談者に対して、できるだけの対応をしている現状ですが、特に保健室登校の生徒に対するケアが課題となっています。現在、保健室においては常時数名の保健室登校の生徒が登校していますが、登校できる日もさまざまで、登校時間も不定期な状態です。これらの生徒は保健室に登校しているときは基本的に保健室内の学習室で自習をしており、手空きの教員や養護教諭、コーディネーター、カウンセラーが対応しています。これに加え、本年2学期より、特別支援や心理学に興味のある大学生を保健室登校の生徒に対応する補助者として採用し、勉強の補助や話し相手として対応してもらえるようになりました。

また、勉強に対しても積極的な姿勢がみられない生徒のために、保健室の裏庭に畑をつくり、興味のある生徒には栽培体験ができるようにし、学期や長期休暇の最後には、流しそうめん大会や餅つき大会、ピザ作りなどのイベントを実施しています。

餅つき

農園

これらの作業機会やイベントは学校への興味保持や登校への動機付け、楽しみのひとつとして大きく機能しているように感じます。

一方、教員に対しては研修会を定期的に開催し、特別支援が必要な生徒に対する理解の向上や対応についての研修をおこなっています。また、本年より状況に応じて教頭が招集し、担任団、生活指導部、養護教諭、特別支援コーディネーター、カウンセラーなどが参加してケース会議を開催しています。この会議は、以前では担任団や関係教員だけで処理していた事象を、学校、学年や関係者で情報共有し、対応を検討して一貫性のある指導に役立てるといった面で非常に役立っています。

今後の課題

1つめの課題は年々増える相談件数と保健室登校、不登校傾向のある生徒たちの増加があります。これに対応する人員、環境の充実が急務です。特に不登校、保健室登校の生徒に対してのケアは、学校や人との関わりに対する興味を切らせないようにしていくにはどうしたらいいのか。また、そこから一歩進んで、教室での授業や集団の中での活動ができるようにするにはどうしていったらいいのか、といった課題があります。

2つめの課題としては私たち教員のスキルアップや理解を深める取り組みです。いままでの感覚では追いつかない事象が多く見受けられる中で、私たち教員が勉強し、考え、積極的に取り組む、また、環境を整えていく努力をしていくことが重要であると感じています。

同志社
クローズ・
アップ

音楽で賛美する〜讃美歌の魅力〜

中学2年生　総合的な学習の時間

女子中学校・高等学校教諭　三浦（みうら）　彩（あや）

1. はじめに

本校では中2の総合的な学習の時間を音楽科が担当しているが、中高6年間を通して、課題の設定、情報の取集、整理・分析、まとめなどの探究的な学習を体系的に行うためにも、加藤美穂子司書教諭にも関わっていただいている。

この授業の目標は、次の3点である。

①讃美歌の作られた背景や歌詞に込められた意味について学ぶことを通して、人々がどのように神と向き合って生きてきたのかを考察し、自己の生き方を考える。

②表現活動と言語活動を通し、探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を養う。

③各教科で身につけた知識や技能などを相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにする。

2、神を賛美する音楽に触れ、手話で讃美歌を歌い神を賛美する

1学期は、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥ教、仏教など様々な宗教音楽を鑑賞し、各宗教に神を賛美する音楽があることに気づくことから始める。その上で、キリスト教音楽の中でもゴスペルやスピリチュアルなど様々なジャンルのものを歌ったり、明治時代に歌われていた歌詞で讃美歌を歌うなどして、慣れ親しんでいるキリスト教音楽にも様々な表現方法があることを表現活動を通して実感する。

これらの学習を踏まえた上で、6人1班で1曲讃美歌を選び、手話を用いて神を賛美する活動に取り組む。手話は教員が教えるのではなく、班毎にプリントを見ながら動きを確認し、立ち位置なども含め独自の工夫を凝らしていく。この協働活動を通して、手話の動きに込められた言葉の意味を考えたり、歌詞の元となった聖書箇所の背景などを理解していく。毎回授業終了時に振返りを書き、活動の進捗状況を明確にして、自ら計画的に取り組めるようにしている。

讃美歌を声と身体の動きで表現・発表することで、更にその理解を深め、改めて讃美歌に込められたメッセージに思いを馳せる機会となった。

手話の発表
讃美歌21-470『やさしい目が』
2節“あたたかい手が”

3、国や地域による〝クリスマス〟の祝い方の違いに気づく

2学期には、4人1班で国や地域を選び、他の班員とテーマが重ならないよう研究テーマを設定し、個人で探究する。「フ

ランスのクリスマスプレゼントを届けてくれる人と届くまでの流れ」「メキシコのクリスマスの伝統　ポサダとピニャータについて」等テーマは一人ひとり異なるが、同じテーブルに同じ国や地域について調べる班員がいるので、資料を探す過程で、テーマに関係のありそうなものを見つけたら互いに勧め合う場面も見受けられた。

レポートが完成したら、クラス全体に向けて発表を行う。発表にあたっては、聴き手が聴きやすい音量・話す速さ・目線などを意識できるよう声掛けしている。発表のタイムキーパーや司会も生徒が務める。発表期間中は、授業の前半に発表を、後半にクリスマスページェントに向けてキャロル練習を行い、発表で共有した内容を歌唱表現活動に生かしている。

2学期の学習のまとめのレポートに書かれていた印象的な箇所を紹介する。

「〝クリスマス〟、そう聞くと、私はとても華やかなイメージがありました。しかし、今回の学習で、すべて華やかなものではないことがわかりました。ツリーやプレゼントがなくても、神の御子であるイエス・キリストを祝うこと、その事自体がとても喜ばしく素晴らしいことなのだと思います。そして、それがクリスマスの本当の意義だと思いました。またクリスマスには、たくさんの『歌』を歌うことが多いですが、それはとても素敵なことだと感じました。なぜなら、『歌』というのは、何かを持っていなくても、みんなで楽しめるものだからです。貧しい人から、お金持ちの人、子供から老人までのすべての人が、1つの『歌』を歌うことで、楽しくワクワクした気持ちになれます。『身分や性別に関係なく、すべての人は幸せになれる』それこそが、イエス・キリストの教えではないかと思いました。」

クリスマスの発表に向けて、発表の練習をする様子

4、自らと讃美歌の関わりについて考察する

3学期には、1人1曲讃美歌を選び、作詞作曲者や作曲された経緯の他、歌詞の元となった聖書箇所や行事との関わりなどを調べ、深く理解した上で、自らの経験等と関連付けながら今後どのように讃美歌と関わっていきたいかを探究する。中1時に音楽の授業で百曲以上の讃美歌に接し、中2でもこの授業でそのレパートリーを増やしてきているので、選択肢は幅広い。

このように、年間を通じて、協働活動から個人での探究活動へ、調べ学習から自らの内面と向き合う学習へと、発展的に学習できるよう計画している。

讃美歌を選んでいる様子

讃美歌関連資料を集めたブックトラック

5、最後に

1年間キリスト教主義に基づく学校生活を経験した中2という段階で、身近になった讃美歌を取り上げることで、興味・関心を持って主体的に取り組むことができていると考えている。讃美歌と向き合うことは、自らと向き合い自らの生き方を考えることにつながり、また音楽の役割や文化の多様性に気づく契機になるのではないだろうか。私自身も、生徒たちと共に自らを耕す機会をいただいていることに感謝したい。

同志社
クローズ・
アップ

知の研究

国際中学校・高等学校教諭　帖佐香織（ちょうさかおり）

設置の経緯～「ＴＯＫ」との出会い

高校2年生の選択科目「知の研究」は、様々な「知識」について皆で考えていくことを目指す実践的な科目である。様々な知識の内容について問うのではなく、「知識」とは何か、すなわち知識そのものについて問うのである。授業形態も「花を植えるより、みんなで土を耕す」ものであり、私たち担当教員も生徒たちとの授業を毎回とても楽しんでいる。

今から5年以上前のこと、同志社国際学院初等部（ＤＩＡ）の卒業生の受け入れを控えて、本校ではＤＩＡで採用されているＩＢ（国際バカロレア）の調査・研究を行った。結果的にはＩＢそのものを導入するのではなく、その良いところを積極的に取り入れていこうという方針が立てられたが、その試みの1つが、ＩＢのディプロマプログラムのコア科目であるＴＯＫ（Theory of Knowledge、日本語訳は「知の理論」）の考えを取り入れた学校設置科目「知の研究」を開講することであった。

私自身は「哲学の授業のかわりに」フランスでＴＯＫと出会った。しかしＴＯＫは、「フランスの高校で教えられる哲学をモデルに作られたといわれるが、ＩＢの教科書や実際の授業を見る限りそれとは異質※」であり、「教師の問いと生徒の討論によって授業が構成される※」ものであった。

「知の研究」が目指すもの

「芸術に関する専門家の判断は、どの程度の妥当性をもつのか」。この問いは、実際にこのクラスで2学期の後半に与えた課題である。生徒たちは自分の好きな芸術分野を取り上げて（ＴＯＫにおける Real life Situation、実社会の状況）レポートを書き、それぞれが意見を発表し、芸術とは何かを考える時間をもった。4月から週に2時間、生徒たちは、こちらからの問いかけやグループワークなど様々な手法で、あとの表に示した授業計画に従って丁寧にそして着実に取り組んできた。クラスにいるのは、いわゆるペーパーテストに強い生徒ばかりでもないし、意見を述べるのが得意な「帰国生徒」ばかりでもない。それでもこのクラスの生徒たちは、9ヶ月かけて、批判的に考え、

自分の意見を述べ、他者の意見を聞くことができるようになってきた。

さて、先のような問いを「Knowledge Question（知識に関する問い）」と呼ぶ。私たちは、経験もしくは教科書等を通して、「歴史的事実」「数学の定理」等の様々な「Knowledge Claim（知識に関する主張）」を知っているが、知識の発見・生成の過程や知識の性質そのものについて問う機会はあまりない。この科目では、知識に関する「メタ認知」を行うこと、その上で、新たな知識を探求していく姿勢を身に着けることを目指している。

授業の感想～濃密で贅沢な時間

ティームティーチングでこの科目を担当する私たち2名の教員は、あらゆる点で全く異なっている。社会科と数学科、アナログとディジタル、感覚と論理、哲学と信仰…。よって、授業でも意見が対立したり、相手の言っていることにひたすら感心したりする。生徒たちはそれを見ているからか、他者とぶつかることを恐れず、自分の意見を言う。

先の芸術に関する議論では、主観的な芸術観と客観的な芸術観、作品の創造と鑑賞、芸術作品の価値と価格、歴史や経済的価値…等の問題について、同じ作品に対する専門家同士の見解の相違をどう判断するのか、芸術家と鑑賞者は対等か、などが論点として取り上げられ、実際の芸術作品や専門家の批評を通じて考えた生徒たちの見解が述べられた。そして、ある生徒は「このように自分の意見を言う授業を、日本でも皆が受けるべきだ」と言ってくれた。

生徒たちは日々、学校で様々な「知識」に触れる。「知の研究」の授業で「知識」そのものについて考える時間をもつことで、学びの時をより豊かなものとして感じてくれれば幸いであると私は思う。そして学校を卒業してからも、「知識」を得る過程を楽しみ、大切にしてくれれば、と願っている。

(Endnotes)

※ 渡邉雅子「国際バカロレアにみるグローバル時代の教育内容と社会化」

【参考】授業計画～授業内容と生徒の活動

1学期

1-1	イントロダクション、クリティカル・シンキングとは
1-2	パンテーンのキャンペーン「#この髪どうしてダメですか」
1-3	「知識」はどこから来るのか、個人的な知識と共有された知識
1-4	個人的な知識と共有された知識、知るための方法
1-5	知識の領域、知識の領域と知るための方法
1-6	近世までの医療のあゆみ、知識の領域「土着の知識の体系」
1-7	知識の領域「歴史」、パラダイムシフト、 「アルゼンチンはスペインの探検家によって発見された」
1-8	「ニュートンが万有引力の法則を発見した」、 知識の領域「自然科学」
1-9	文明の進歩

2学期

2-1	最近関心をもったニュースや出来事
2-2	何のために数学を学ぶのか、知識の領域「数学」
2-3	知るための方法「推論」、演繹法と帰納法
2-4	知識の領域「倫理」
2-5	知識の領域「数学」と「自然科学」、数学と自然科学の違い
2-6	南アジアの貧しい家族の暮らしのロールプレイ、 知るための方法「感情」と「知覚」
2-7	Knowledge ClaimとKnowledge Question
2-8	知識の領域「芸術」、芸術とは何か

同志社
クローズ・
アップ

同志社小学校 PEACE WEEK の取り組みについて

小学校教諭　中川好幸（なかがわよしゆき）

今年度２０１９年より、良心探求ウィークを小学生が理解しやすいように、春季を Harmony Week 秋季を Peace Week として位置づけました。本稿では、この秋の Peace Week について報告させていただきます。小学生にとって、平和を考えることは、リアリティという面で難しいところがあるのですが、未来を担う子どもたちこそ、戦争の現実について少しでも知った上で、身近なことで何ができるのか、Peacemaker（マタイ５：９）にどのようになっていけるのかを考えていってもらいたいという希望を持ってこの週間を設定しました。週間の主な内容としては、６日間の朝の礼拝、そして、外部講師近藤紘子（こうこ）さんの特別授業、そして、各クラスでの振り返りや話し合いの場でした。

毎日の礼拝では、担当教員が以下のような話をしました。

毎日の礼拝

月曜日（担当 宗教科教諭 中川）広島や長崎で起こったことの概略を説明し、講師の近藤さんがどのような方なのかという紹介をしつつ、児童が話を聞くための準備をしました。

火曜日（担当 英語科教諭 振本ありさ）広島で被爆された、いわたさんというおばあちゃんが二代、三代目のお孫さんまで、自分の体験を伝えておられる「いわたさんのおばあちゃん」という絵本を紹介しつつ、語り伝えていくことの大切さを知ること、それぞれの心に平和がしみわたることを望んでいるという話がありました。

水曜日（担当 中川）世界を舞台に活躍し、日本でトップクラスのベーシストである日野 Jino 賢二さんの言葉、「僕はこのベースを武器として平和をつくろうとしている。そうすれば、みんな本当の武器を持って戦う必要はなくなる。」という言葉を紹介し、それは、国連ビル前の壁にある「剣を鋤とする。（イザヤ書２：４）」（武器を武器でないものにする）と字面は反対だけれども、精神は共通し、それぞれが自分の笑顔ややさしい言葉を武器にして、平和を作り出すことの大切さについて触れました。

木曜日（担当 振本）身近な京都での戦争の体験をした祖父母の話、アメリカと日本間でやりとりされた青い目の人形と日本人形の交流で、その当時も外国と交流を続けた人がいたことなど、それぞれの出来事が、京都という場でも戦争というものを通して実際にあった出来事であることを覚え、それぞれがやさしい心を持つことの必要性を訴えました。

金曜日（担当 教諭 2年生担任 糸井文彦）絵本「すみれ島」朗読を通して、戦争中の事実を知り、それぞれの人がどのようなことを感じたのかを想像することの重要性について触れまし

た。戦争中のさまざまな出来事を理解することは非常に難しいことです。しかし、低学年なら低学年なりに、高学年なら高学年なりにそれぞれが感じることを心に留め、一人一人が自分にできることを行動に移していくことの大切さを考える機会を持ちました。

土曜日（担当 中川）Todd Parr 著 "Peace Book" より、平和というのは、さまざまな日常の中の自由さということと結びついていて、毎日の生活の場面において「平和」を考えることが大切だということを伝えることで、週間のまとめとしました。

近藤紘子さん特別授業

水曜日の特別授業講師に来ていただいた近藤紘子さんは、１９４４年11月広島流川教会牧師夫妻の長女としてお生まれになり、被爆時８ヶ月でした。（父親の谷本清牧師は、20世紀のノンフィクションの代表とも言われるジョン・ハーシー著 "Hiroshima" にインタビュー記事が掲載され、翻訳も手掛けておられます。）幼少の頃から、口には出さなくとも、さまざまな被爆者の様子をご覧になり、心の中では、アメリカという国、そして原子爆弾を落とした戦闘機エノラゲイの操縦士を憎み、いつか仕返しをしようと思い続けていました。しかし、10歳の時、アメリカのテレビ番組に家族で出演し、その時対面した副操縦士キャプテンルイスが、自分は原爆投下直後の消失した広島の街を見て、"My God, what have we done?"「神さま、私たちはなんてことをしてしまったのだ。」と思ったということを語りながら涙を流しているのを見て、今まで自分は正しい側、キャプテンルイスは悪い人間と思っていたことが、全ての人類に共通する、誰にも悪い部分があること。それに気づいた時、自然とキャプテンルイスの手を握っていたと語ってくださいました。それから、自分の価値観が大きく変わり、平和のための活動を始めようと決意され、それ以降、日米でさまざまな講演を初めとする活動をされています。セントルイス市は、この日１９５５年５月11日の出来事をTransformative Learning Day（価値観の変革を学ぶ日）として覚え、近藤さんが後日ＭＬＢの始球式をされた時、背番号を11にする粋な計らいをされたそうです。

特別授業の様子

児童一人ひとりが peacemaker として

この週間を通して、児童が心に留めたことは、非常に強烈であったと思いますし、そのことを聞いただけで終わらせることなく、アジア諸国と日本の関係をとらえることにもかかわってくることや、日常の中で、小さいことでも peacemaker としての役割を意識していくことが必要ですし、小学生という段階でもできることをさがしていきたいという感想も多く見受けられたことは嬉しいことでした。毎年のこの週間を通して積み重ねていくことで、理解が発達に応じて深まっていき、行動にもつながっていくことを期待しています。

特別寄稿

「梨木（なしのき）校地」の133年

梨木屋敷から同志社布哇（ハワイ）寮、そして同志社幼稚園へ

本井 康博（もとい やすひろ）（元大学神学部教授）

解体されたフレンドピースハウス

二〇一八年八月、京都御苑東のフレンドピースハウス（旧ハワイ寮）に元寮生が集まった。取り壊し直前の緊急集会である。

翌月、解体工事は始まった。建物の寿命は百三十二年。夜間照明された登録有形文化財の佇まいは、白と緑のコントラストが映えて美しかった。寺町通と梨木通に挟まれた敷地は、梨木神社にも近く、いわば「梨木校地」である。

ハワイ寮最期の雄姿
（2018年８月31日、大神あずさ氏撮影）

解体を契機に、同志社社史資料センターは「フレンドピースハウス――ハワイから同志社へ――」展を昨秋、学内で開催し、展示図録も刊行した。

ベリーの入京と建築

当ハウスの出発はベリー（J.C.Berry）家の住宅。彼は一八八二年に来日した医療宣教師で、一八九三年の帰国まで神戸、岡山、京都で医療と伝道に従事した。

彼は、新島襄が医学部を夢見て立ち上げた同志社病院と京都看病婦学校の管理のため一八八六年一月に岡山から呼ばれた。娘は「一年の仮住まいのあと、ついに家族は新居に移れた」と喜ぶ。

新居はベリーの設計で、建築費は二千五百ドル。岡山で住宅を設計した経験から、京都でも居宅の他に病院と看護学校の建設工事も

監督したという。

家族は夫婦と子ども四人。娘によると、広い庭では犬（名前は弁慶）や馬、複数の乳牛が飼われた。牛は病院用にも搾乳され、馬は御苑西（現ＫＢＳ京都）の病院・看護学校へ通う手段であった。

ベリーは園芸以外にも庭の一部に芝を張り、子どもたちと目隠しごっこや陣取り合戦をして遊んだ。

最初の住民、Ｊ・Ｃ・ベリー
（『現代語で読む新島襄』）

南にはバックレー邸

実は梨木校地には二軒あり、総面積は千八百坪近い。「同志社所有地全図」（一八九〇年六月）や神戸の宣教師によると、二軒はベリー邸とバックレー（S.C.Buckley）邸である。後者もまた一九六一年まで女子寮（後述）として健在であった。

小野英二郎夫妻に贈られた
Ｓ・Ｃ・バックレーの家族写真
（小野有五氏提供）

バックレーは同志社神学校教授で、妻は医師（京都看病婦学校教員）。赴任は看護学校開校の前年（一八八六年）、帰国は一八九二年である。一八八八年三月の時点で、夫妻が梨木に居住したのは確実であるのに、その半年後にはゴードン家（M.L.Gordon）が入居したという。

ゴードンの入居とデントンの入京

ゴードンは大阪から同志社に転じた医療宣教師。入居当時の消息を知るのは、来日直後のデントン（M.F.Denton）である。彼女は初めて入洛した日（一八八八年十月九日）のことをいつまでも覚えていた。

御苑の東側、大きな銀杏の樹の下を人力車に揺られながらゴードン邸に入ると、「ゴルドン家は広い庭をもった大きい宣教師住宅で、御所の静かな東側の道［梨木通］に面し、北隣りにベリー宣教医の

今出川に移され女子寮（香柏寮）となった旧ゴードン邸
（『同志社女子大学　寮の100年』）

住宅（現在のハワイ寮）があった」。デントンはこの梨木通を「世界中で一番好きな道」と生涯、愛でた。

ゴードン家こそ、真っ先に訪うべき家庭であった。カリフォルニア（パサデナ）で小学校校長をしていたデントンを同志社にスカウトした人こそ、日本からの帰国休暇中、同地に一時滞在したゴードンだからである。

長女、次女がデントンの教え子でもあったゴードンは、この新人を自宅に引き取りたかったが、看護学校からの強い要請で彼女は翌日、同校に移り住んだ。

数年して、梨木校地の二軒はともに空き家となる。バックレー夫妻に続いて、翌一八九三年にはベリー家が、ついで六年後にはゴードン家も帰国に及んだ。

デントンの入居と出町幼稚園の開園

三家族が立ち退いた後の入居者の詳細は不明だが、確実なのはデントンである。一八九五年に同志社とミッションが宣教師住宅所有権をめぐって抗争し、翌年、宣教師は総辞職に及んだ。デントンも女学校内の教師館（学寮）を出て、旧ベリー邸に移った。

「ベリー家の人たちが〔この家に〕いないのが、残念です。学校を去るのが辛かった、とあなた方に言うつもりはありませんが、何か別の方法であの問題を解決できたかもしれないのに、と今でも思っています」と無念がる。デントンを良く知る武間富貴（同志社幼稚園名誉園長）も、先生は「梨木町の宣教師邸に移り住んでいた」と証言する。

同志社を去ったデントンは、伝道所と出町幼稚園（現同志社幼稚園）の開設に力を注いだ。ラーネッド夫人が一八九七年二月頃、女学校傍の借家に設けた出町講義所（伝道所）を手伝ったのである。

日曜学校を担当するうちに、しだいに幼児教育に目覚め、一八九七年二月にミッション本部に「ラーネッド夫人と私は、幼稚園を始めました」と、さらに翌月にも「私がベリー医師の家〔旧宅〕に住み、女生徒四名と共に暮らしているのをご存じでしょうか。三名は幼稚園の仕事をし、一名は私の〔日本語の〕先生であり、ヘルパーです」と報じた。

デントンは信徒で医師の佐伯理一郎の協力を得て、出町幼稚園の初代園長に就いたが、まもなく鳥取行きが決まったので、園長を辞した。

新渡戸稲造が入居

二十世紀に入っても、梨木校地にさしたる変化はない。ただベリー家の退去以後、建物は「梨木屋敷」とか「梨木寮」、「梨木邸」と呼ばれ始める。

デントン以後の入居者で著名なのは新渡戸稲造である。彼は一九〇三年十月、京都帝国大学法科大学教授を命じられ、第一高等学校校長に転任するまでの三年間、旧ベリー邸からも京大に通った。彼が台湾の後藤新平に送った手紙の住所は「京都梨木町通今出川」である。

元宣教師館だけに「日米の懸け橋」をモットーに国際親善に貢献した彼の宿舎に相応しい。

他教派で非宣教師の彼が入居できた背景には、米独留学中の親友、佐伯や京都でのデントンとの交流があった。前者は新渡戸の入京当時、同志社理事、医師として同志社病院と看護学校を管轄する立

場にあったので、新渡戸を同志社理事にと推薦した。

一方、デントンの来客名簿には、新渡戸の署名が混じる。夫人がアメリカ人だけにデントンとの交流は万事好都合、住宅も洋館が相応しかった。

ギュリックと「青い目の人形」

新渡戸に続く入居は、ギュリック家である。一族から数名が宣教師として来日するが、同志社との関係が濃厚なのは、シドニー・L・ギュリック（S.L.Gulick）である。デントン伝にも「ミス・デントンが住み、後にシドニー・ギューリック博士夫妻と家族が住んだ古い『ベリー・ハウス』は、美しいたたずまいをしていた」とある。

シドニーはダーウィン（C.R.Darwin）とも親交した生物学者で、一九〇六年から一九一三年まで同志社で科学概論や進化論を講義した。一方、平和運動にも関心が高く、帰国後は排日法案反対運動に熱心に取り組んだ。とりわけ「友情人形」（Friendship Dolls）、すなわち「青い目の人形」（American Blue-eyed Dolls）を日本に贈る運動は有名である。日本側の受け入れ窓口になったのは、渋沢栄一であった。

同志社普通学校に在学中、同志社教会の日曜学校で指導を受けた加藤延雄（元同志社中高校長）に回顧がある。

「ある時、我らの組会の例会が、梨木町のギュリック先生の居られた宣教師館（今のハワイ寮）で開かれた。その折、ギュリック先生は、大に戦争反対をとなえ、かつ大変楽観的な将来に対する展望を述べて、もう世界には日露戦争を最後として大きな戦争は起るまいと言われた」ので、クラスで論争になった。

やがて一九一四年に勃発した第一次世界大戦は「ギュリック先生には、大きなショックであったらしい。先生の見通しはあますぎた。

先生は同志社をやめて帰米されると、平和運動に専念された。大正九（一九二〇）年、米国加州の排日土地法案が可決、成立して排日運動が盛んになると、ギュリック先生はますます日米親善のために懸命の努力をされた。そして、かの人形使節――日米小児間の人形交換運動となったのである」。

青い目の人形（右）と答礼人形（左）を抱く渋沢栄一
（渋沢史料館提供）

バートレットの入居

シドニーが去った九年後に入居（一九二二年～定年退職の一九三五年）したのが、宣教師のバートレットである。

夫人はゴードンの長女で、少女時代を梨木校地（南の教師館）で送った。バートレットと結婚後、同志社女学校で英会話を教える傍ら、幼稚園の第四代園長（一九三三年～一九三五年）をも兼ねた。す

なわちデントン同様に、同志社幼稚園と梨木校地の双方に所縁があった。

梨木キャンパスの売却

ところで同志社は、バートレット入居以前の一九三〇年頃から、梨木校地を「不用土地」と見なし、売却に乗り出す。最低価格を坪八十五円とし、「可成善キ買人」を求めた。

しかし、経済的不況のため「一向善キ買人、出現セザル現状」が続いた。翌年、ようやく「バートレット邸南部五百坪を滋賀県五ケ荘村塚本清三氏に坪当り八十円で売約。十月末引き渡し予定」に漕ぎつける。

さらに二か月後には六百坪を坪八十円（合計四万八千円）で田中新一郎に売却できた。一九三二年、土地売却に伴い家屋は女子部今出川キャンパスに移築、改修され、宣教師住宅、ついで総長（牧野虎次）住宅、最後は女子大香柏寮となった。

一方、北側の土地（旧ベリー邸敷地）約七百坪であるが、待つこと四年、願ってもない「善キ買人」が出現する。ホノルルのフレンドピース奨学会（Friend Peace Scholarships）である。

リチャーズ（フレンドピース奨学会）が購入

売却交渉は一九三五年十二月十五日に、土地六万一千円、建物一万二百三十五円で成立。翌春、購入者は「梨木邸を改装」して「フレンドピースハウス」にする、と同志社理事会が公表した。新聞はさっそく「同志社に布哇寮　ホノルルの親日家が建設」と報じた。

「親日家」とは、奨学会会長のリチャーズ（Theodore Richards）。ニュージャージー州に生れ、本土で教育を受けた後、ハワイの伝道と教育に使命を感じて転住。校長やキリスト教諸団体幹事などの傍ら、キリスト教的奉仕活動にも熱心に取り組んだ。

一九一一年にはフレンドピース奨学会創設のために来日し、大隈重信、渋沢栄一、成瀬仁蔵などの賛同を得て、東京で結成に漕ぎつけた。同志社からも海老名弾正と原田助が支援した。

日米親善を夢見るリチャーズが、かねてから念じてきた「太平洋のかけ橋」への想いが、結実したのである。

フレンドピースハウスの設置

奨学会はさっそく留学生五人を選び、ハワイに送った。その中に同志社大学の学生（満水寅一）と卒業生（柏木義円）の子、隼雄が混じる。後者は後年、ハワ

同志社の恩人、T・リチャーズ夫妻
（『フレンドピースハウス』）

イ寮献堂式で祝辞を述べる。

一九二八年、奨学会は逆にハワイの日系青年を同志社にフェローとして留学させる制度を発足させ、一九四〇年まで延べ十二人を送り込んだ。彼らの宿舎兼学生寮が、同会創立二十五周年記念事業（一九三六年）の一環として設けられたフレンドピースハウス、すなわちハワイ寮である。

驚くべきことに、奨学会は同志社から購入した建物と敷地をそっくり同志社に返却（寄贈）し、日本名を「同志社布哇寮」とした。土地・建物の購入費（七万余円）と改修費（一万五千円）は同会会長、リチャーズの夫人が実母の遺産から出費した。

後に同志社は、リチャーズ夫妻の功績を称え名誉職の「社友」に推奨した。

デントンが陰で働く

夫妻による寄贈はデントンの力に負う。彼女の評伝は、「同志社に寄贈されたのは、実にミス・デントンのおかげであった」と称賛する。リチャーズ夫妻にも証言がある。

「ミス・デントンの提案によってその地所を学校から買い受け、相当の金額を追加して完全に再建〔改装〕し、フレンドピーススカラー（奨学金受給者）のための寮として、同志社に返還〔寄贈〕した」。

デントンの貢献は、改修・内装工事にも及ぶ。イギリス人女性版画家、E・キース（E.Keith）の協力である。彼女は妹（J.Keith）と共に京都では数週間にわたってデントンハウスに滞在した。ほかにも、デントンはハワイ寮の正門にと女子部から門を移築した。女子部校内に残る旧公家屋敷門とも、同志社女子部最古の門とも伝わる。

同志社布哇寮が誕生

フレンドピースハウス、すなわち同志社布哇寮（通称ハワイ寮）は、フェローと同志社大生十数人が共同生活を営む国際寮である。

リチャーズ夫人は、献堂式で「新島襄を三十五年前〔一九〇一年〕に知った」ことを明かしたうえ、「此（この）建物の財源は、私の母の賜物」（実母の遺産）である、「何（ど）うぞこれが『平和のお宮』であるやうに」と表明した。寮の目的を「キリスト教を通じて国際親善に貢献すること」と定めたのも夫人であった。

ハワイから来日したディレクター（寮監）の黒川直也も、寮を「キリスト教的国際親善の増進機関」にすると宣言した。

発足二年後、ボストン近隣のウースターから同志社に来客があった。帰国後、彼は同地に住むベリーの息子（G.Berry）にフレンドピースハウスの視察談をした。息子は、五十年前の「わが旧宅」が、「学生たちのセンターやホーム」として立派に機能している様子やら、父親の名前が今なお記憶され、彼が愛情をこめて管理した住宅と庭が、きれいに維持されているのを知って喜んだ。

デントンもまた、かつて自分が居住した旧ベリー邸が男子寮に転化したのを目（ま）の当たりにして、こう述懐する。

「「昨年、発足した」フレンドピースハウスは、多くの活動の中心となっています。〔母国のウースターで医院を開業中の〕ベリー博士夫妻が、ご自分たちの家が新しい役割を果たしているのをご覧に

なることが出来たらと思います。

一八八八年以前に宣教師のために建てられたすべての家の中で、その家〔ベリー邸〕だけは玄関に備え付けの椅子があり、そこで人力車の車夫は連れてきた客を待つ間、火鉢の側にすわって、身体を温めることができました。大きな銀杏のある庭は、ほとんど変わっておりません。

私はそこへ行く度にいつも、このような家が女生徒たちのためにあったならば、どんなにいいだろうかと思うのです」。

戦時中は日赤女子寮

開寮から閉寮までのハワイ寮五十二年史については、『フレンドシップ　ハワイ寮　五十年のあゆみ』（一九八六年）や『神と同志社に育まれたハワイ寮　創設期から一九六一年を中心とした寮史・写真集』（二〇〇八年）に譲る。

戦時中は日赤看護婦寮に
（『五十年の歩み』京都第二赤十字看護専門学校）

梨木寮から御苑を抜けて通学する看護学生
（同前。いずれも岡山寧子教授提供）

ここでは戦時中の秘話を一件。日米戦争開戦三日後の一九四一年十二月十一日に同志社は早々とフレンドピースハウス（布哇寮）の閉鎖を決定した。

「日米友好のために活用するよう寄付されたものだが、国交断絶により寄付目的消滅のため」とされた。館名も敵性語の英語名を退け「梨木寮」と改めた。「三条〔実美〕公〔公爵〕鎮座せる梨木神社と同一町内」にあることが、ことさら強調された。

国際寮を断念後、寮は日本赤十字社京都支部の要請で看護婦寮となった。同志社は日赤に月額百五十円で二年間、貸与した。日赤寮生のひとりは、「一年生の時は、御所の東の梨木寮で、二年生になって御所の西の泉寮で〔あったが、〕設備もよく、とても閑静な環境で申し分なかった。毎日、梨木寮から三列縦隊で整然と御所の中を横断し、〔府庁前の〕日赤京都支部へ通った」と懐かしむ。

戦後にハワイ寮再開

戦後、第二代ディレクター、ヤング（Rev.J.G.Young）が一九四七年四月に赴任して、男子寮が再開された。以後、ラッシェ（J.M.Rasche, 第四・六代寮監）を含めて数人が次々と派遣され、一九八八年の閉寮まで四十年余り、寮生の精神教育に腐心した。

その間、敷地内にはハワイハウス（別館。今回解体）やリチャーズハウス（旧北志寮）が新築された。そして今度は同志社幼稚園（園舎）である。

デントンゆかりの梨木校地

幼稚園と言えば、かつてデントンが梨木校地で暮らした時に出町で始めたものが、今春、奇しくも梨木に転じる。

彼女と梨木校地との繋がりは深く、入京初日に始まる。彼女がその日宿泊した梨木キャンパスは、今や園庭である。フレンドピースハウスの取得や改修にもデントンは貢献した。彼女が女子部から移築した門は、これからは幼稚園の門となる。こうした梨木との繋がりは、デントン伝でも知られざる秘話であろう。

同志社ギャラリー第20回企画展図録
（同志社社史資料センター刊）

シャロームハウス（同志社幼稚園舎）が竣工

梨木校地の建物は、百三十三年を通して名称や用途、居住者や所有者が異なる。けれども、それぞれの活動や軌跡には不思議にも時代を超えた共通点がある。

フレンドピースハウスは一貫して「平和のお宮」を志向する。

その点を考慮すれば、園舎名は「シャロームハウス」が相応しい。

シャロームは「こんにちは」と「平和」を意味するヘブライ語（英語ではShalom）。ヤング教授（神学部）は、ハワイ寮の寮監時代、同志社教会の礼拝で友人たちと「アロハ」のように「シャローム！」と挨拶を交わしていた。

この一言は、「友好（フレンド）と平和（ピース）」の拠点であり続けたフレンドピースハウスのスピリットを象徴してやまない。

園舎名にリチャーズの名前は避けた。敷地内にすでにリチャーズハウス（学寮）が立地するので、代わりに園舎最大の広間を「リチャーズホール」と名づけた。

園舎の新築をリチャーズ夫妻に感謝すると同時に、恩人にはこう誓いたい。

「シャローム！ご夫妻の志はけっして解体いたしません！」。

竣工まぢかのシャロームハウス
（2020年２月11日、筆者撮影）

同朋舎
4,200円（税抜）

新島襄の教え子たち（出身地別）

本井康博（もとい やすひろ）（元大学神学部教授）著

昨年、上梓した『新島襄の教え子たち』のいわば下巻で、上巻「ジャンル別」に対して「出身地別」とした。取り上げた人物は、合わせて約180名。本書で「新島襄交遊録」全7巻が完結する。既刊書を挙げると―

まず『新島襄の交遊―維新の元勲・先覚者たち―』。非キリスト教（セキュラー）な世界の人物との交遊を紹介した。勝海舟や木戸孝允、伊藤博文、陸奥宗光、大隈重信などとの繋がりを論じた。

以後は、キリスト教世界に移り、まずは他教派指導者を取り扱った『新島襄と明治のキリスト者たち―横浜・築地・熊本・札幌バンドとの交流―』で、新渡戸稲造や内村鑑三などを取り上げた。

ついで同志社系教派（会衆派・組合教会）に特化した『新島襄の師友たち―キリスト教世界における交流―』。沢山保羅（ぽうろ）や成瀬仁蔵はもちろん、J・H・シーリーやA・ハーディといったアメリカの恩人たちにも光を当てた。

そして教え子である。中でも一番弟子の徳富蘇峰は別格で都合2巻、すなわち、『新島襄と徳富蘇峰―熊本バンド、福沢諭吉、中江兆民をめぐって―』ならびに『徳富蘇峰の師友たち―「神戸バンド」と「熊本バンド」―』に及んだ。

最後はその他の教え子を総括する『新島襄の教え子たち』上下巻。結局、教え子篇は「新島襄交遊録」7巻中、4巻を占める。新島はたしかに「生徒ひとり」を大切にした。

なお、本書は第22回日本自費出版文化賞（特別賞）を受賞（2019年12月15日）した。

著者より

講談社
1,000円（税抜）

王家の遺伝子

石浦章一（いしうら しょういち）（大学生命医科学部特別客員教授）著

私の専門はアルツハイマー病をはじめとするヒトの難病の分子生物学で、発症のメカニズムや治療法の研究をしています。また、生命医科学部の野口範子教授と一緒に、同志社大学初めての文理融合・学部横断型の「サイエンスコミュニケーター養成副専攻」の立ち上げのお手伝いをしており、4年目に入って順調に修了生を輩出しています。今回、歴史を分子生物学で読み解くという試みを紹介しようと思い、「王家の遺伝子」という本を上梓しました。

本書は、王家の墓から見つかった微量のDNAの情報から骨の持ち主の正体が分かったという例を、ツタンカーメン王、ラメセス三世、リチャード三世などいろいろな時代の王様の話題を交えながら、まとめたものです。もともと歴史が好きなものですから、我が国でもこういう解析ができたらいいのにと藤原氏の物語を読みながら思います。

章の間に、今話題になっているゲノム編集や人種のルーツの話を盛り込みました。文献を見れば分かりますが、本当は大学院生向けのレベルなのですが、ネットの評では中高生あたりが「やさしすぎる」とか「DNAの話は不要」と書き込んでいます。多分内容が理解できなかったのだろうと思います。しかし、大学1年生にもわかるように書いてありますから、是非、お読みになってください。

ついでに一言。もし男系を続けたいなら妻妾が多くいない限り難しいという事実が、この本を読むとよくわかります。

著者より

カズオ・イシグロに恋して

臼井雅美（大学文学部教授）著

英宝社
3,400円（税抜）

本書が出版される約一か月前、二〇一九年四月三日、在外研究でイギリスに滞在していた私は、イシグロに会うことになった。イシグロは、オックスフォード大学ボドリアン図書館よりボドリー賞（Bodley Medal）を受賞した。その授業式と講演会場となったシェルドニアン・シアターは満員で、熱気に包まれていた。二〇一七年、カズオ・イシグロがノーベル文学賞を受賞し、世界に認められたことになる。

本書では、イシグロの処女作『遠い山なみの光』から最新作『忘れられた巨人』までの七作品に関して、グローバリズムの観点から論じた。三作目の『日の名残り』でイシグロが大ブレイクした時には、私はアメリカで博士論文の執筆をしていた。イシグロの創作の軌跡をたどると、私自身の研究の軌跡をたどることにもなる。歴史が大きく塗り替えられてきた二十世紀後半から二十一世紀にかけて、過去の記憶と対峙し、忘却という魔物を相手に、歴史の闇をえぐる旅をイシグロは言葉で紡いできた。民族、宗教、文化、ジェンダーなどのボーダーを超えて行こうとするイシグロの声は深く、強い。その声を、研究者の立場から、私自身が解読してみた。

講演を終えたイシグロに、「もうすぐ、私の本が出るんです」と言うと、彼は、「何の本？　小説？」と聞いてきた。そこで私が、「あなたについての本なんですけど」と言うと、彼は絶句してしまった。「日本語で書いてしまって…でも、出版されたら送ります」と告げた。その後新刊本を彼に郵送することになったが、直接手渡すことができていればと、悔やまれる。

今は、イシグロのＡＩに関する新作の出版を楽しみにしている。

著者より

ドイツにおける運輸連合制度の意義と成果

青木真美（大学商学部教授）著

日本経済評論社
3,700円（税抜）

本書は、１９６０年代からドイツで導入された都市交通における協力と調整の組織としての「運輸連合」制度について、初期から２０００年代までにわたり調査・分析したものである。

日本よりもはるかに自動車交通が盛んであるドイツにおいて、モータリゼーションの初期のころから道路や駐車場の整備で自動車交通に対応するだけでなく、公共交通の利便性の向上や運賃水準の引き下げによる利用の増大を図ることによって、都市全体の移動可能性を高める、という政策方針が掲げられた。主に大都市圏で運輸連合が導入され、国営鉄道と公営交通事業者との共通運賃制度やバスと鉄道を乗り継いでも同じきっぷで乗れるゾーン運賃の導入、運行計画の調整、統一された広報やマーケティング戦略などが実施された。

本書では、ドイツばかりでなく他の先進国の公共交通における制度や、日本に対する示唆などにも言及している。

近年、日本では高齢者の移動可能性を保証するために公共交通の維持が大きな問題となっているが、ドイツにおいては公共交通の投資や運営費に対して助成を行い、自動車を保有しなくても十分に移動手段が確保されるような制度となっている。現代の社会では、高齢者ばかりでなく、全ての年齢層において就労や居住の自由の保証、学習機会の享受などについて、交通は必要不可欠であり、社会的包摂の実現のためにも、配慮しなくてはならない要素となっているといえよう。

著者より

岩波書店
960円（税抜）

2100年の世界地図

峯陽一（みねよういち）（大学グローバル・スタディーズ研究科教授）著

日本社会は内向的になり、暗い雰囲気が漂うようになった。繰り返す災害に加えて、少子高齢化もあるだろう。対照的なのがアフリカである。現地を訪問するたびに、若者が増え、耕地が広がり、ビルが増えていくのを実感する。国連の人口予測によれば、21世紀を通じてアフリカの人口は5倍増するという。

その結果、２１００年の世界では、アジアで40億人、アフリカで40億人、その他の地域で20億人が暮らすようになる。アジアとアフリカの住人が世界の人口の8割を占める。成熟したアジアが、若いアフリカに向かい合うのである。

アフリカの成長を助けつつ、アフリカから元気をもらおう。そんなことを考えながら、この新書を執筆した。豊富なカラー地図の作成には、ＧＩＳ（地理情報システム）を専門とする地理学者が協力してくれた。歴史学や哲学の知見も盛り込んだ。

２１００年の世界の姿は予想できるとして、その後の世界はどうなるのだろうか。人口が増えるアフリカでも、都市部の出生率は低下傾向にある。気候変動の対策はいろいろあるが、資源の浪費を減らす一番の近道は、人類社会が小さくなることだ。未来に向かう出生率の低下は、環境危機に対する人類の無意識の適応なのかもしれない。

新書には書かなかったが、２２００年の世界では、ウェアラブル端末を身につけた無数の小集団が自然に囲まれて狩猟採集生活を展開しているのかもしれない。そんな人類の未来も悪くないと、個人的には思っている。

著者より

岩波書店
860円（税抜）

奴隷船の世界史

布留川正博（ふるがわまさひろ）（大学経済学部教授）著

「奴隷船」とは「移動する監獄」である。リヴァプールやナントなどのヨーロッパの奴隷貿易港から出帆した奴隷船は、西アフリカやアンゴラなどの沿岸の貿易拠点に向かう。ここで綿織物やビーズ、銃などの商品群と交換に奴隷を獲得する。奴隷たちはぎゅうぎゅう詰めにされた状態で大西洋を渡るのである。絶望的になった奴隷たちはしばしば船上で叛乱を企てた。分かっているだけでもその率は一割を超えた。それを監視するのが水夫である。毎日二回の食事を与え、健康を維持するためにダンスをさせた。下の処理もしなければならなかった。

近年、奴隷船の航海データが収集・整備されてきた。その数三万六〇〇〇件を超えている。しかも、簡単に無料でアクセスできる（https://www.slavevoyages.org）。ひとつの航海ごとに、船舶名・トン数、船主・船長名、船員数、出帆港、出帆日、アフリカの停泊地、積み出された奴隷数、荷揚げ港、荷揚げされた奴隷数、帰還日などが記されている。一五〇〇―一八六七年にアフリカから積み出された奴隷数は一二五〇万人、荷揚げされた奴隷数は一〇七〇万人、死亡率は一四・五％にのぼった。また、船員のなかでも水夫の死亡率が奴隷の死亡率と同等かそれ以上であったのだ。

本書の後半ではイギリスの奴隷貿易・奴隷制廃止運動について詳述している。その主力をなしていたのはクウェイカー教徒とイギリス国教会福音主義派であった。「アメージング・グレース」を作詞したジョン・ニュートンもそのなかにいた。

一八八八年のブラジルの奴隷制廃止によって南北アメリカの奴隷制は完全になくなったと考えられてきたが、現代でも奴隷制はなくなっていない。その数四〇〇〇万人以上と見積もられている。

著者より

新日本出版社
1,500円（税抜）

小さき者の幸せが守られる経済へ

浜矩子（はまのりこ）〈大学ビジネス研究科教授〉著

元来、経済活動は人間の営みだ。人間による人間のための、人間しか行わない営みだ。だから、経済活動は人間を幸せに出来なければ、その名に値しない。人間たちの中で、その幸せが最も脆くて危ういのはどのような者たちか。それが、小さき者たちだ。小さくて弱い人々には、強大なる者どものような「自助力」が備わっていない。そのような人々さえも、いや、そのような人々をこそ、幸せに出来る。人間の営みである経済活動には、そのような特性が備わっていなければいけない。

経済学の生みの親であるアダム・スミスは、人間が人間であることの本質をその共感力に見出した。他者の悲しみを悲しみとする。他者の喜びを喜びとし、それが人間の本性だ。経済学の始祖は、そう言っている。共感力を言い換えれば、もらい泣き力だと言っていいだろう。経済活動がそのような人々によって営まれている時、経済活動は幸せの波紋で世界を一杯にする。

三章編成の本書において、第一章は上記の謎解きを進めて行くためのいわば基礎編である。第二章と第三章が応用編だ。

各章の内容は、いずれも、二つの連載コラム向けに筆者がこれまで執筆して来た原稿に基づいている。具体的には、朝日新聞社のアエラ誌掲載コラム「ｅｙｅｓ浜矩子」、そして集英社の情報・知識＆オピニオンｉｍｉｄａｓ掲載の「経済万華鏡」である。自分で言うのは図々しいが、改めてテーマの並び具合をみれば、なかなか盛沢山だと思う。

著者より

平凡社
840円（税抜）

人類の起源、宗教の誕生

小原克博（こはらかつひろ）〈大学神学部教授〉他著

本書は、霊長類学者・山極寿一氏（京都大学総長）と私との対談に、二人による補論を加えたものです。これまで山極氏は霊長類学の成果を踏まえて、人間や人間集団の特性をも明らかにしてこられましたが、本書においても、そのような力量がいかんなく発揮されています。山極氏の豊富な知見に助けられながら、私もまた人類の特性に対し、専門の宗教研究の視点からアプローチしています。

動物としては、きわめて非力なホモ・サピエンスが、アフリカのジャングルを離れ、移動を続ける中で、いかに集団を形成し、言語や想像力を駆使して、困難な環境を生き抜いてきたのかが本書では議論されています。ヒトが目に見える現実を超えて、他者とのつながりを想像し、共同体を形成する上で「宗教」は大きな役割を果たしてきました。広い意味での「宗教」は人類史と同じだけの来歴を持っています。

こうした大きなパースペクティブから、現代社会における暴力・戦争、人工知能がもたらす問題、身体性の再評価などを扱っているのも本書の特徴です。特に、大学教育が今日果たすべき役割に関して、山極氏と私の考えが強く響き合っているのを読者は見出すことができると思います。教育の画一化が、知のあり方をむしばんでいるのではないか、むしろ、大学は、高校までの規範化された学びをご破算にし、学ぶ者を多様性のるつぼへと投げ込む「知のジャングル」であるべきではないのか。考えるべき素材を大量に含んだ本書をぜひ手に取ってみてください。

著者より

山川出版社
3,500円（税抜）

1571年 銀の大流通と国家統合

城地孝（大学文学部助教）・堀井優（大学文学部教授）他著

本書は、世界史上のさまざまな時代に見られた共時性に重点をおいて「歴史の転換期」を考えるシリーズの第六巻として編集されました。一五七一年およびその前後の時代に居合わせた人々の具体的な営みが、スペイン領フィリピン、明帝国、ムガル帝国、オスマン帝国、フランス王国、そして海洋におけるイングランド人の掠奪活動を対象に活写されています。その全体を一読すれば、世界貿易の活発化や各地域の国家統合への動きをつうじて形成された近世世界を実感していただけるものと思います。

第二章「北虜問題と明帝国」（城地孝）では、近年の研究成果を踏まえつつも、長城ラインの「辺境社会」を構成する諸アクターや明朝の中央・地方の政府当局者の動きを具体的に描きだすことに重点をおきました。国家と社会の乖離や持てる者と持たざる者の二極分化など、現代の中国にもあてはまりそうな何かを読み取っていただければ幸いです。

第四章「東地中海のオスマン帝国とヴェネツィア人」（堀井優）では、このイスラーム国家の領域および対外関係の広がりのなかで形成された政治外交および国際商業上の秩序を、オスマン条約体制、オスマン・ヴェネツィア間の行政網、エジプトの商港社会から論じました。異質性を強調されがちなイスラーム圏とヨーロッパとの間の異文化接触を支えた、結合的な関係を読み取っていただければ幸いです。

著者より

ミネルヴァ書房
3,800円（税抜）

子どもの貧困／不利／困難を考えるIII

―施策に向けた総合的アプローチ

埋橋孝文（大学社会学部教授）他編著

「子どもの貧困」にどう立ち向かうかをテーマにした、2期におよぶ科学研究費プロジェクトの成果であり、２０１５年に出版されたⅠ、Ⅱの続編である。

子どもの貧困という問題に立ち向かううえで、当事者である子どもへの福祉・教育的働きかけが必要ではないか、という問いかけは私たちが共有する問題意識であった。

私たちは、子どもの自己肯定感やレジリエンスに注目して子どもに対して貧困が及ぼす影響を最小限にくい止めるためのサポートのあり方を福祉と教育の両面から考えてきた。自己肯定感やレジリエンスといった、子どもの心の働きが力となって、貧困に対して防御機能をもつのではないか、との仮説が出発点となっていた。それらを高めることで、子どもが個人としてはもとより、子ども同士を含む人とのさまざまな関係性の中で子どもが貧困に負けない状況を作り出すことはできないだろうか。それが私たちの研究を通底するモチーフであった。

子どもの貧困は親の貧困から切り離してはありえず、親の貧困が第一次的に重要であり、立ち向かうべき問題である。しかし、親の貧困への対策が子どもの貧困をすべて解消してくれるというわけではない。親の貧困に対処することと並んで子どもへの働きかけが必要なゆえんである。

本書は「子どもの貧困に対する総合的アプローチ」を提示しえたことで、施策に向けた政策論議を深められたのではないかと思っている。

著者より

東信堂
1,200円（税抜）

グローバル化と法の諸課題
―グローバル法学のすすめ―

川嶋四郎（大学法学部教授）他著

日本法の領域は、現在様々な局面でグローバル化への対応を強く迫られている。そこで、日本学術会議法学委員会では、「『グローバル化と法』分科会」を設け、グローバル化にともなう法的な諸問題について、様々な角度から検討を行ってきた。本書は、その分科会の委員の中の9名が、各自の問題関心から自由に選択した現代的な課題について執筆した研究成果であり、論文からエッセイまで多様なものを含んでいる。

本書は、大きく分けて二つの部分からなる。一つは、「グローバル化をめぐる法的諸問題」の部分であり、もう一つは、「グローバル化の中の法学教育」である。前者には、「法の比較」、「『法の市場化』論」、「国際経済法の課題」、「犯罪論体系の法比較」および「健康関係の国際法」の論考が含まれ、後者には、「グローバル化と法学教育」、「海外の大学での日本人教員の法学教育」および「司法制度改革と法曹養成の国際化」を具体的に紹介し考察したものが含まれている。

私は、二一世紀の日本の司法について二〇〇一年に『司法制度改革審議会意見書』が示した具体的なヴィジョンの中の法曹（裁判官・検察官・弁護士）の国際化、特に「法科大学院における国際的な法曹養成の課題」について論じた。『意見書』は、法曹を「社会生活上の医師」と考え、国民主権・法の支配の観点から、国民の国民による国民のための司法の構築を目指し、法曹の国際化を重要課題の一つと位置付けたが、その達成のための道のりはまだ遠く、法学部および法科大学院教育を通じて、「ゆっくり着実に（slow and steady）」実現するための様々な道を探求した。

本書は、日本のグローバル化についての現状と課題を多様な視角から概観する分かりやすい読み物であり、より多くの人々に手に取ってもらい共にこれからの日本のあり方を考えてもらえればと願う研究者によって執筆されたものである。

著者より

ミネルヴァ書房
2,400円（税抜）

ボランティア・市民活動実践論

上野谷加代子（大学社会学部教授）
木原活信（大学社会学部教授）他著

本書は、今日のボランティア活動、市民活動の行方を「憂う者」たちによる作品である。地方自治、民主主義が崩れそうな事柄が多い中で、また、中央政府からのボランティア・住民活用をあてにした種々の政策が出される中で、今こそ、ボランティア・市民活動の本質を考察し、語り合う材料をだしあい、運動としてのボランティア活動を大切にしたいと願っている。様々な分野での活動、幅広い活動者（当事者を含む）による実践、そして先達者たちの勇気ある実践を確かめながら、迷いながら、今後の進むべき実践の方向を皆で探ろうというものである。

執筆者たちをこのような思いに導いたのは、監修者の「岡本榮一」先生である。岡本先生の人となりは本書をお読みいただくとして、先生は戦後の混乱期に同志社大学の門をたたき、大学院で社会福祉学専攻の嶋田啓一郎先生や多くの神学者の方々から学んだそうである。そして、様々な先駆的実践を通して、今日の学としての社会福祉や実践の根源となる価値を理論としてわかりやすく初学者や実践者に提示し、一緒に行動してくださった方である。執筆者たちは、岡本先生から多くを学び、それぞれの立場で師と仰ぎ尊敬している。本書は3部構成からなり、第Ⅰ部では岡本先生のボランティア人生について、第Ⅱ部では活動の価値、思想、歴史を踏まえての今日的意義、第Ⅲ部では実践を参加・学び、そして協働という視点から論じている。すべての市民に読んでいただきたい。

上野谷加代子より

日本評論社
5,000円（税抜）

クィアと法

菅野優香（大学グローバル・スタディーズ研究科准教授）他著

２０１５年に渋谷区と世田谷区ではじまった同性パートナーシップ制度は、現在、32の地方自治体によって導入され、さらに24の自治体が今後の導入を予定・検討しているころである。同性パートナーシップに勢いを得て、同性婚や婚姻平等への動きが活発化している日本。他にも、性同一性障害特例法、ＬＧＢＴ理解増進法および差別解消法導入の試み、一橋大学アウティング裁判など、実に多様な事柄がＬＧＢＴＱと法に関わる領域には満ちている。そして、伝統的な法学が扱ってきた狭義の「法」を超え、わたしたちの日常生活を取り巻く社会規範としての法を対象とし、ジェンダーやセクシュアリティの規範性を批判的に問い直すクィアという視点、方法論と接続し「論争誘発的なテーマ」を集めて編まれたのが本書である。そこで展開されるのは、「アセクシュアル」「ペドフィリア」「オープン・リレーションシップ」「ハッテン場」「コミュニティ」「トランスジェンダー」「カミングアウト」「マスキュリニティ」「パトリシア・ハイスミス映画」といったキーワードをめぐる、挑戦的でスリリングな議論である。１９９０年前後にアメリカで開始されたクィア研究は現在に至るまで領域横断的な分野として知られるが、クィア研究と法学を架橋し、クィアな視点から法にかかわるさまざまな事象を読みとく本書によって、ＬＧＢＴＱをめぐる生、コミュニティ、文化、歴史について新たな視座を読者に届けることができたら嬉しく思う。

著者より

ミネルヴァ書房
2,200円（税抜）

いじめ：10歳からの「法の人」への旅立ち

村瀬学（女子大学生活科学部特別任用教授）著

いじめは、子どもたち同士で「違反者」を見つけ、その友を「裁く」意識を持ち始める10歳頃からはっきりと出てきます。相手が「違反者」として「非」があるのだから「罰」を与えるという意識です。大事なことは、こういう子ども同士の身勝手な「私設の裁き」に対抗して、教室の中で、しっかりと立ち向かえる子どもを、「公の人」「法の人」として育てる必要性があります。この「公の人」を育てるためには、教室に「外＝社会」に開かれた「話し合いの場＝広場」をつくる努力を教師が指導しなければなりません。そこで、子どもたちが、「私設の裁き＝いじめ」を「公の場」で訴える力を付けることになります。そのためには、何よりもそういう方向を教師がしっかりと支えられる力を身につける必要があります。

もめ事には必ず「小さな正義」が絡んでおり、そういうことの起こるところには生徒同士の「言い分」があります。大事なことはその「言い分」を聞く「場」を設けるということです。それも当事者だけを「別室」に呼んで話を聞くのではなく、みんなの聞いている中で「言い分（小さな正義）」をみんなが考えるという「場」（私はそれを「教室に広場を」と呼んでいます）を作ることなのです。

この本では、事例の分析も交えながら、生徒と教師の両方に、しっかりと役立つための対策を提示しています。とくに、教室で実際に使って頂けるような９歳10歳からの「二分の一成人式パスポート」のアイディアも出しています。「法の世界」に入ってゆく準備のための「パスポート」です。

著者より

実業之日本社
950円(税抜)

テレビドラマでわかる平成社会風俗史

影山貴彦(女子大学学芸学部教授)著

「テレビドラマは時代を映す鏡」であると、折に触れて語っています。たかがテレビドラマ、されどテレビドラマでありまして、テレビドラマの推移を考察することは、メディア研究だけに留まることなく、時代の変化や、社会の流行、人々の嗜好が垣間見えてくるものではないか、と以前より考えていました。「平成のドラマ」を一冊の本にまとめてみませんか?という光栄な依頼を頂戴したのは、平成の時代が終わろうとする頃でした。

本書では、平成の30年余りを彩った代表的なドラマ作品の数々を取り上げ解説しています。ひとつひとつのドラマについて長く触れることは物理的に難しかったのですが、コンパクトながらも的外れとならないコメントを重ねていくことを心掛けました。正直、かなり手間暇のかかる作業でした。

執筆前から予想していましたが、ドラマはエンターテインメントとして人々に愛されているだけでなく、その時代を象徴する社会の出来事や市井の人々の生活、風俗を色濃く滲ませているという事実をさらに深く再確認することができました。比較的マイナスなイメージで捉えられ、印象薄めに解釈されることもある平成という時代ですが、果たしてそうでしょうか?私はそうは思いません。ドラマを見る限り、そこにあるのはまぎれもなく30年という濃密な日々なのです。

肩肘張らず、柔らかくドラマを通じて平成を振り返ってみたい、そんな皆さまに手に取って頂けたら、この上ない喜びです。

著者より

花伝社
1,500円(税抜)

バブル世代教師が語る平成経済30年史

西村克仁(香里中高社会科教諭)著

令和と元号があらたまりましたが、今から30年前の平成の始まりはバブルの絶頂期にあたります。

振り返ってみれば、今の社会はバブルとその後の長い不況の果てに生み出されたと言えるのではないでしょうか。かつての日本を知る我々大人は、いつからか「バブル前」と「バブル後」という風に時代区分をしていることに気づかされます。私自身、平成の始まりに若き日を過ごした「バブル世代」の一人です。

その一方で若い世代には、何がどのように今につながったのか、ほとんど伝わっていません。例えば、バブルといえば派手なお姉さんが扇子を振り回して踊っていた景気の良い時代、崩壊後は一気に不況になった。そんな程度ではないでしょうか。

平成が終わりをむかえた今、私たち大人は社会のあり方が大きく変わったこの30年を子ども達に伝えてもいいのではないでしょうか。ここ数年、私は昭和末期からの社会の変化を「歴史の授業」として生徒たちに教えてきました。

もちろん、この時代を歴史として語るにはまだまだ新しすぎるのですが、この間の社会の歩みを知ることは生徒自身にとっては、「自分につながる現代史」を知ることでもあります。翻って「平成ってどんな時代だったの?」と子どもに問いかけられたとき、私たち大人は自分の身におこったことを含めてどう答えることができるでしょうか?令和につなぐ現代史としてご一読いただければ幸いです。

著者より

同志社大学古本募金　同志社女子大学DWCLA古本募金 ご協力のお願い

かつて新島襄がグレイス教会で献金を訴えた際、多くの聴衆から多額の寄付の申し入れがありました。その中で、年老いた農夫と寡婦がそれぞれ手渡した2ドルは、殊更に彼の心を打ち、そしてこの2ドルこそが同志社の核となった、と新島は書き記しています。この時に集まった5000ドルの献金はもちろん、それと同時に、多くの人々から頂いた善意によって同志社は設立されました。

同志社大学・同志社女子大学では、「古本募金」プロジェクトを開始いたしました。古本募金とは、皆さまのお手元にある不要となった書籍等（CD・DVD・ゲームソフトを含む）の買取金額が大学に寄付される仕組みです。その寄付金は、同志社大学では学生の奨学金に、同志社女子大学では図書館の図書購入費用に充てられ、これからの社会を担う学生の未来に繋がります。2ドルの精神をお持ちの皆様からのご支援・ご協力を心よりお願い申し上げます。

期　　間：随時
寄 付 方 法：下記をご参照ください。
同志社大学（https://www.furuhon-bokin.jp/doshisha/）
同志社女子大学（https://www.furuhon-bokin.jp/dwc/）

寄付の流れ：
①まずは寄付者ご自身で本・CD・DVD・ゲームソフトの梱包をお願いいたします。
②各大学のウェブサイト（上記）からお申し込みください。
宅配便の集荷日時を指定できますので、あとは集荷を待つだけです。
※合計5冊（5点）から送料無料です※
③集荷を指定した日時に宅配業者がご指定場所まで取りに来ます。送り状もウェブサイトから申込いただいた内容を印刷して持ってきますので手間がかかりません。
④上記①～③の3ステップで手続き完了です。
後日お手元に届く「寄付受領書」でご確認ください。

お問い合わせ先：同志社大学　学生生活課
TEL：075-251-3280
E-mail：ji-kosei@mail.doshisha.ac.jp
同志社女子大学　図書館
京田辺キャンパス　TEL：0774-65-8481
今出川キャンパス　TEL：075-251-4145
E-mail：tosho-i@dwc.doshisha.ac.jp

ハリス理化学館同志社ギャラリー展示ご案内

ハリス理化学館同志社ギャラリーは、創立者新島襄の志と同志社の歴史等を、資料で紹介する展示施設です。ハリス理化学館は、J.N.ハリスの寄附をもとに1890（明治23）年に竣工し、長らく同志社における理化学教育の拠点となった建物です。現在、国の重要文化財に指定されています。

【常 設 展】ギャラリー内には６つの常設展示室が設けられています。１階には「新島襄の人と思想」、「同志社のあゆみ」、「世界の中の同志社」、「同志社の今」、２階には「J.N.ハリスと同志社」、「京都の中の同志社」と、部屋ごとにテーマがあり、創立以来の歴史と共に、京都や世界と共に歩んできた同志社の足跡をたどることができます。（２か月に１回程度の展示替え有）

【企 画 展】第21回企画展
タイトル：「古代計帳に載るムラ―山背国愛宕郡出雲郷をめぐる考古学―」
期　　間：2020年３月20日(金)～４月26日(日)（月曜は休館）
場　　所：ハリス理化学館同志社ギャラリー２階企画展示室（今出川キャンパス）
主　　催：同志社大学歴史資料館

第22回企画展
タイトル：「「支え合う志」をつないで―障がい学生支援制度発足20周年―」
期　　間：2020年６月２日(火)～８月２日(日)（月曜・祝日は休館）
場　　所：ハリス理化学館同志社ギャラリー２階企画展示室（今出川キャンパス）
主　　催：同志社大学学生支援センター障がい学生支援室・同志社大学同志社社史資料センター
協　　力：全国高等教育障害学生支援協議会(AHEAD Japan)、
大学コンソーシアム京都、日本学生支援機構(JASSO)、日本財団、
日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan)

【入 場 料】無料
【開館時間】10:00～17:00（最終入館16:30まで）
【閉 館 日】日曜日（企画展開催中は開館）、月曜日、祝日、ゴールデンウィーク、夏期休暇中の一定期間、年末年始。
※開館日等を変更する場合があります。お越しになる前にホームページ等でご確認ください。
【場　　所】同志社大学　今出川キャンパス
※駐車場、駐輪場はありません。公共交通機関を利用してお越しください。

入場無料

お問い合わせ先
ハリス理化学館同志社ギャラリー事務室（日・月・祝日は閉室）
ホームページ：https://harris.doshisha.ac.jp/
TEL：075-251-2716　FAX：075-251-2736
E-mail：ji-harjm@mail.doshisha.ac.jp

新島旧邸公開のお知らせ

新島旧邸の敷地には、幕末まで京都大工頭中井家の屋敷があり、明治初年には中井屋敷を堂上華族の高松保実が所有していました。1875（明治８）年11月29日、新島襄は、この高松邸の半分を賃借して仮校舎とし、生徒８名で同志社英学校を開校しました。翌年、英学校は薩摩藩邸跡地の専用校舎に移りますが、その後、新島は高松邸を購入し、自宅を1878（明治11）年に建築しました。これが、現在の新島旧邸です。同志社発祥の地に建つ新島旧邸を、同志社の建学の理念を体感する場として公開します。

【公開期間】①通常公開
2020年４月７日～７月30日、９月１日～11月28日、３月２日～３月30日
毎週　火・木・土曜日（祝日は除く）
②特別公開
４月１日～５日（春の特別公開）
７月26日、８月２日（オープンキャンパス）
11月８日（ホームカミングデー）
11月29日（創立記念日）
2021年３月20日～22日（卒業式）
※公開日の詳細はHPをご覧ください。https://archives.doshisha.ac.jp

【公開時間】10:00～16:00（入館受付は15:30まで）

【見学対象】①通常公開
旧邸周囲から建物内部を見学（建物内部には入場できません）
②特別公開
旧邸周囲及び建物内部（母屋１階と附属屋）に入場できます。
※旧邸建物内に一度に入れる人数は20名程度とします。

【入 場 料】無料

【場　　所】京都市上京区寺町通丸太町上ル松蔭町
※駐車場、駐輪場はありません。公共交通機関を利用してお越しください。

【団体見学申込】10名以上の団体は、予約が必要です。団体予約は、見学日の１週間前までに電話・FAX・E-mailにて下記にお申し込みください（電話受付は10:00～16:30）。

入場無料

お問い合わせ先
ハリス理化学館同志社ギャラリー事務室（日・月・祝日は閉室）
TEL：075-251-2716　FAX：075-251-2736
E-mail：n-kyutei@mail.doshisha.ac.jp

同志社女子教育と体育・スポーツ

３つの正三角形からなる同志社徽章は、知・徳・体の三位一体の教育理念の象徴であると言われています。同志社の女子教育の中でも、心身に健康をもたらすための教育は常に重視されてきました。それは、正課の授業に加えて、スポーツフェスティバルや課外活動など多面的に展開されています。今回の企画展では、本学の体育教育およびスポーツの歩みを振り返り、それが果たしてきた役割を見直していきます。

期　　間：2019年11月22日㈮～2020年7月31日㈮
時　　間：10:00～16:00
閉 室 日：土・日・祝日　および2020年4月30日、5月1日
　　（ただし、2020年5月6日、7月23日、24日は開室しております）
場　　所：同志社女子大学史料センター
　　（今出川キャンパスジェームズ館１階展示室）
主　　催：同志社女子大学

同志社女学校でのなぎなたの稽古　　同志社社史資料センター提供

お問い合わせ：同志社女子大学史料センター
〒602-0893　京都市上京区今出川通寺町西入
TEL：075-251-4200　FAX：075-251-4201
E-mail：shiryo-i@dwc.doshisha.ac.jp

編集後記

本号の特集は「大学入試改革の今後について」であり、毎日新聞の中根氏を司会にお迎えし、２０１９年度中になにかと話題となった大学入学共通テストなどの入試改革を中心にお話いただいた。

時報１４７号の特集「一貫教育探求センター始動」でも取り上げたように、小中高では、学習指導要領により全体的な方向転換が図られ、学力の三要素が重視されたカリキュラムとなっている。

しかしそれが大学への進学の際にどのように評価されるのか、あるいは大学における学びとどのように連携しているのかについては、まだまだ検討が必要である。「知識・技能の確実な習得」「思考力、判断力、表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」という「学力の三要素」については、同志社の教育において大切にされている新島襄先生が示されていた教育方針には、個性を尊重し、画一的でない総合的な教養人を育てる、ということが盛り込まれており、まさにこの学習の三要素が盛り込まれているといえるのではないか、という内容となっている。

また、入試改革に加えて、入学後どのような社会人に育てるのかというのも重要なポイントである。アドミッション・ポリシー（入学者受入方針）、ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）の連携が話題となっていたが、自立して問題発見や問題解決方法の探究を行えるような生徒・学生を一人ひとり丁寧に育てていくというのが、幼小中高大の14の学校を通じた大きな課題であり、そのためには、入試制度ばかりでなく、日常の教育活動におけるさまざまな環境整備や教職員の仕事内容の検討などが求められよう。

今号も、鼎談に参加された方々をはじめ多くの方々からの玉稿をいただいた。紙面を借りてお礼申し上げたい。年末のお忙しい期間においての原稿の執筆、真にありがとうございました。

（青木）

●同志社広報委員会小委員会委員

ABC順・○印委員長

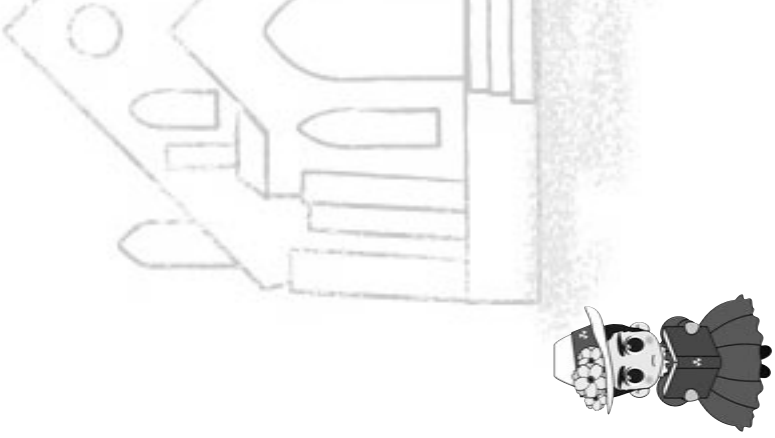
○大学商学部教授　青木　真美
大学経済学部准教授　本領　崇一
大学広報部広報課長　今西　覚
女子中学校・高等学校事務長　磯田　信行
大学広報部長　岩田　喬彦
女子大学学芸学部教授　影山　貴一
中学校・高等学校事務長　鎌田　伸一郎
大学法学部教授　川嶋　四郎
女子大学看護学部准教授　木村　洋子
国際中学校・高等学校事務長　貴志　浩行
大学神学部助教　木谷　佳楠
女子大学表象文化学部教授　北尾キャスリーン
大学生命医科学部准教授　小林　耕太
大学スポーツ健康科学部助教　松倉　啓太
女子大学薬学部准教授　松元　加奈子
幼稚園教諭　森田　清子
大学政策学部教授　中田　喜文
大学理工学部准教授　小武内　清貴
大学心理学部准教授　及川　昌典
女子大学生活科学部教授　奥田　紫乃
女子大学現代社会学部教授　大西　秀之
大学グローバル地域文化学部教授　ROBERT JOHN CROSS
小学校事務長　齋藤　道子
大学文化情報学部助教　田中　雄一
法人事務部校友同窓課長　田中　裕顕
大学グローバル・コミュニケーション学部助教　唐谷　芸秀
国際学院事務長　口田　隆雄
大学文学部准教授　塚田　一栄
香里中学校・高等学校事務長　内山　純子
大学社会学部教授　浦坂　一郎
女子大学広報部広報室広報課長　渡邉　望
法人事務部長　柳井

●編集協力　アルカダッシュ

●同志社時報の申し込み

・送料（ゆうメール着払い：1冊236円）のみのご負担でご講読いただけます。
・お申し込みは、綴じ込みハガキをご利用ください。
・宛先　〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入 同志社大学広報課

同志社時報　第149号
編集人　青木真美
発行人　八田英二
発行　学校法人同志社
同志社大学広報課同志社時報係
電話（075）251－3120
印刷所　株式会社 石田大成社
２０２０年４月１日発行



切り取り線

切り取り線

お手数ですが63円切手をお貼りください。

〒602-8580

京都市上京区今出川通烏丸東入

同志社大学広報課　同志社時報係　行

切り取り線

（ふりがな） お名前	
ご住所	〒　　－ 電話（　　）　　－
いずれかに○をつけて下さい。 校友　・　同窓（同志社）　・　父母（　　学校）　・　一般　・　教職員（　　年卒業）	

本誌送付ご希望の方は、下記のいずれかに○をおつけください。

●新規希望（購読申請書をお送りいたします）

●バックナンバーをご希望の方は、号、発行年月をお書きください。　　号（　　年　　月発行）

※新規読者をご紹介いただける場合は、裏面を使ってご紹介者の連絡先をお知らせください。見本誌をお送りします。

同志社教育の目的は、その神学、政治、文学、
科学等に従事するにかかわらず、みな精神、
活力あり、真誠の自由を愛し、もって邦家に尽
すべき人物を養成するを務めべきこと。

新島襄の遺言より

しおり　切り取り線

切り取り線

切り取り線

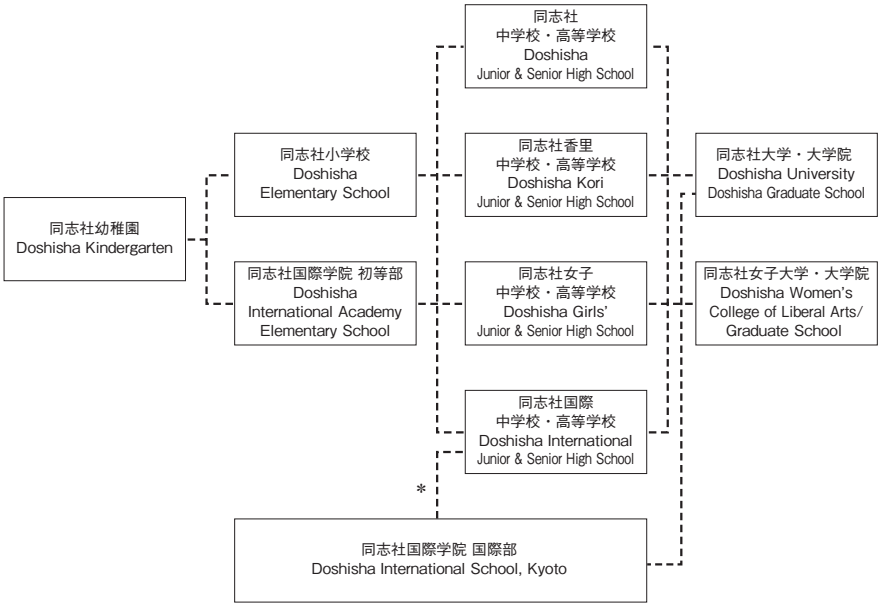
『同志社時報』に関するご意見・ご感想をお寄せください。

Doshisha college song　Words by W. M. Vories　Music by Carl Wilhelm

One purpose, Doshisha, thy name	同志社よ、その名は一つの目的を意味する。
Doth signify; one lofty aim:	その学徒の精神的、肉体的に、
To train thy sons in heart and hand	神のため、祖国のため、生きんという
To live for God and Native Land.	一つの崇高な目的を。
Dear Alma Mater, sons of thine	親愛なる母校よ、同志社の学徒は、
Shall be as branches to the vine;	ぶどうの枝のごとくつながりゆくことであろう。
Tho' through the world	たとえ、世界くまなく、広くはるかに、
we wander far and wide,	われらさまようとも、汝の教訓は、
Still in our hearts thy precepts shall abide!	われわれの心に永遠に生き続けるであろう。

（訳：児玉　実英）

同志社の一貫教育体制
The Integrated Educational System of the Doshisha



＊一定の条件があります（帰国生の要件）

DOSHISHA

同志社時報

第149号 2020年4月発行

ISSN 0389-3111